秘話 日本の百年

●はじめて明らかにされる三代の内幕

大宅 壮一
三鬼陽之助 他

大和書房　ペンギンブックス 44

東京キワニスクラブ編

秘話　日本の百年

●はじめて明らかにされる三代の内幕

大宅　壮一
三鬼陽之助　他

東京キワニスクラブ編　　大和書房

目　次

1　日本百年の内幕

江戸から東京へ……池田弥三郎……10
江戸っ子弁から現代の混乱した日本語まで、コトバの変遷に見る日本史

国粋主義の系譜……児玉誉士夫……23
恐怖のテロ集団「玄洋社」「黒龍会」の結成に始まる日本右翼運動の盛衰記

二・二六事件――幻の〝昭和維新〟……和田日出吉……35
昭和十一年、日本を震撼させた青年将校クーデターのベールを剝ぐ

東條英機とその時代……矢次　一夫……47
疾風怒濤の時代の渦中で、当時の指導者と親交のあった筆者が、その真相を語る

山本五十六「死の暗号電報」……阿川　弘之……62
日本の悲劇！　山本長官の死をめぐる日米暗号解読の秘話

終戦始末秘話……木戸　幸一……75
敗戦という未曽有の難局に直面、日本の指導者たちは何を考え、どう対処したか

戦後二十年の内幕……大宅　壮一……88
〝世界の驚異〟――奇跡の復興をとげ、経済の高度成長を日本にもたらしたものは何か

2　日本百年の回顧

三代宮廷秘話……入江　相政……104
日本に栄光の時代を築いた明治天皇から学者今上天皇まで皇室三代の知られざる生活模様

三代宰相論……御手洗辰雄……116
明治・大正・昭和の日本近代史を身命かけて闘い築いた政治家群像

三代蔵相外伝……小汀　利得……130
新聞記者として、筆者が身近かに接触した歴代大蔵大臣の意外な裏ばなし

三代軍人魂……高木　惣吉……142
日清・日露の将軍から山本元帥まで、そのサムライ精神をさぐり、敗戦の原因をつく

三代の官僚山脈……細川　隆元……154
「官員さん」から「官吏」、「国家公務員」へ、戦前・戦後に見る〃官僚組織〃の実態

三代疑獄史……河井信太郎……166
裏から見た明治百年史の真相
三代財界人かたぎ……三鬼陽之助……178
激動の時代を生き抜いた経営者たちの猛烈な闘志と不屈の魂！
想い出の相場師たち……遠山　元一……190
相場に生命をはる勝負師たち——兜町生活六十年、シマの元老が語る三代株屋気質
誇り高き資本家たち……野田　一夫……202
三井・三菱・住友の大発展の秘密は何か。日本経済をリードする彼らに学ぶものは？
三代男の花道……小島　直記……214
栄光の座を去る男の胸中には……いま明らかにされる財界人引退の秘話
サラリーマン三代……坂本　藤良……226
日本最初のサラリーマンは、坂本龍馬であった!?——〝ホワイトカラー〟百年の変遷史

三代文士かたぎ……今　東光……238
原稿料五円に感激した明治の文豪、豪華別荘を持つ現代作家——その文士生活の裏おもて

日本の大学三代……永井　道雄……250
初代文相森有礼により東京帝大が整備確立されて三代、日本の大学教育はどう発展したか

＊

明治「二百年」への期待……松永安左ェ門……262
百年後の日本は、どう変貌するか。九十翁がうらなう未来の日本の姿は？

あとがき……271

装幀・見返しイラスト・扉イラスト構成　しとう・きねお

1

日本百年の内幕

江戸から東京へ

江戸っ子弁から現代の混乱した日本語まで、
コトバの変遷に見る日本史

池田弥三郎

■地名を変えた鉄道省

「江戸から東京へ」という課題を与えられたのですが、私は、言葉に重点を置いて、その移り変りをお話ししたいと思います。

東京は今年（昭和四十三年）で百年になるわけですが、初めは〃トーケイ〃といいました。たぶん、廃藩置県の時のものだろうと思いますが、資料がありまして、東京府のところに〃トウケイ〃とかながふってあります。これは、たしかにトーケイといったという証拠になりますが、私も小学生の頃、時々耳にしました。

銀座に小松ストアというデパートがありますが、そこの今の社長のお父さんは、小坂梅吉とい

う方で、銀座のたいへんな名士でした。その方が、私の小学校（泰明小学校）の今でいうと、PTAの会長だったのです。ですから、何かというと小学校に出てきて、演説をする。そして、必ずトーケイという言葉を使って「わがトーケイシは……」というのです。

小坂さんは、私より四十歳ぐらい年上でしたが、その年輩の人たちにはトーケイという言葉が生きて使われていたようです。私の父親は私と三十歳ぐらい違うのですが、トーケイとはいいませんでした。もう私どもでは、すっかり、トーキョーという言葉になってしまいました。

そのように、各地の地名が、かなり変化してきております。たとえば「山手」ですが、私どもはヤマノテといって、決して、ヤマテとはいわない。これをヤマテにしたのは鉄道省なのです。

鉄道省のお役人は、だいぶ日本の地名をめちゃくちゃにしたという罪があります。なかでもいちばん大きな罪は、埼玉県のクマガイをとうとうクマガヤにしてしまったことでしょう。私が、国鉄のモニターをしておりました時に「あれは完全な間違いだから、クマガイになおしたらどうか」といったのですが、どうしてもなおさない。ある時、永井竜男さんにその話をしたら「それはなおさないだろう。熊谷の次郎直さねえ（実）」だといって、笑っていました。それはともかく、そんな調子で、ヤマノテをとうとうヤマテにしてしまったのです。

私ども下町に育ったものは「山の手の連中はケチだ……」などと、悪口をいいまして、ノテレンといったものです。「あいつはノテだ」などといったのですが、これはヤマノテだからノテなんで、ヤマテではテになってしまう。

また、最近では葛飾のほうまで下町だというので、われわれ〝下町育ち〟はたいへんびっくりしておりますが、そもそも下町とは江戸の城下町をいったものです。だから、現在の中央区の月島などを除いた、昔の日本橋区、京橋区のあたりが、本当の意味の下町なのだろうと思います。このように、現在も下町という言葉は残っていますが、指す地域がだいぶかわってきているわけです。

■世は災害で移り変る

東京というところは、昔から非常に人の出入りの激しいところでした。それは「江戸の花」といわれた火事や、災害が多かったことも、人の移動をさせる原因となりました。

私も覚えている関東の大震災は、ちょうど今から四十四年前になりますが、私は当時、小学校の三年生で、震災後にクラスメートが半分かわってしまいました。つまり、下町が焼けて、半数どこかへ行って他の人と入れかわったのです。

江戸時代は、だいたい、三年に一度ずつの割り合いで大きな火事があったという計算になるようですが、そのたびに江戸の住人たちが入れかわる。だから、東京の言葉を江戸時代までさかのぼって調べますと、言葉の移り変りが非常に早い。江戸の末期などになると、三十年ぐらいでがらっとかわってしまうほど、激しい移り変りをしています。今日では、もっと早いだろうと思い

ますが、非常に変化をしています。

たとえば、東京では、マチというところと、チョーというところがある。江戸の真中の日本橋区内は、ほとんど何々チョーで、室町だけがマチなのですが、神田へまいりますと、小川町は、オガワチョーとはいわない。浅草でも千束町は、けっしてセンゾクチョーとはいいませんが、これらも、だいぶ激しくかわってきているようです。

ただ、こうした地名には、無理なものもかなりありました。たとえば、六本木から、飯倉の裏のほうにおりて行く、電車の通らない一方交通の小さな坂があります。そこは、今〃一口坂〃といっておりますが、震災前後までは、〃イモアライ坂〃といっていました。同じように、靖国神社のところにある電車の停留所〃一口坂〃もイモアライ坂なのです。しかし、一つの口と書いて、イモアライと読ませるのが無理。逆立ちしたってそうは読めません。

なぜそのような読み方をしたのかというと、もとはひとつのシャレなんです。大阪の淀には競馬場がありますが、あの辺に芋洗いというところがある。囲りがぜんぶ水ですから、一方口なのです。そこで「出入口が一つだから……」というので、シャレて〃一口〃と書いてイモアライと読んだらしいのです。東京のほうでも、坂は、上がりがあればくだりがあるので、一口ということはないわけなのですが、どういうわけか、何か特徴のある坂のことを一口だと名前をつけて、イモアライとシャレて読んだらしい。今日では、東京のイモアライ坂は、全部ヒトクチ坂になってしまっています。

それから秋葉原の読み方ですが、これも鉄道が悪い例です。アキハバラというと、なにか鼻から息が抜けてしまいそうな気がして、とてもわれわれにはいえない。私たちはアキバッパラといいました。

田町に都電の車庫がありますが、あの辺は薩摩屋敷のあとで、サツマッパラといっていました。また、千住の小塚原は、処刑所だったので骨が散らばっているからコツガハラなのだが、乱暴ないい方をして、コツガッパラになったのだと思います。このように、非常に乱暴な江戸の言葉で、アキバッパラ、サツマッパラというところも、漢字で書けば〃秋葉原〃。それを、その通りにアキハバラと読むものですから、地名もかわってきてしまった。こうした例はいくつもあるのです。

■江戸っ子の負けおしみ

久保田万太郎先生が、そういうことには非常にやかましかった。今ではそれを受継いだ形で、安藤鶴夫先生が非常にうるさいのですが、浅草の駒形のことを、コマガタといったりすると、大変いやがります。鳥越なども、トリゴエといってはいけない。

私は、そのことをよく知っていますので、安藤さんの前では、わざわざコマカタ、トリコエといいます。すると感激家の安藤さんは「池田君はさすがにそういってくれる」といって喜んでい

明治3年頃の東京日本橋風景　当時の錦絵

るのですが、私は内心、どうもコマガタ、トリゴエという方が普通なのではないかと思うのです。目黒に白金というところがありますが、これは、シロガネでは困ります。シロカネならプラチナで、シロガネなら銀ですからちょっと違うわけです。しかし、駒形、鳥越などは、浅草の人が一生懸命頑張っていうほど、清音であったかどうかは問題だと思います。

しかし、紺屋高尾の手紙に「君はいま駒形あたりほとゝぎす」というのがある。これは、コマカタと読むから、ホトトギスが出てくる。つまりホトトギスは、テッペンカケカタと鳴くんだから、コマガタならホトトギスが鳴けなくなってしまう、と久保田先生は説明したのですが、どうもこれは、あてにならないようです。

東京の言葉は、濁っている言葉が多いから、東京は関西に対して文化の程度が低いんだというコンプレックスがあった。それに対する江戸っ子の負けおしみが逆に働いて、本来、濁っていたものを無理して澄んでいっている傾向もあるのです。

ところが、必ずしも関西のほうが澄んでいってるというわけではない。たとえば東京でセンタクというのを、関西ではセンダクといいますし、東京でカカトというのを関西ではカガトという。ですから、必ずしも、東京が濁っているから下品で、大阪は澄んでいるから上品だということにはならないのです。また紙に書いたものには濁点を打ちませんでしたので、清音、濁音の問題は、どちらがほんとうにいっていたのかわからないのです。

下劣な話になりますが、京都に行くと、ご存じのように、銀閣寺のところに、石の道しるべが建っております。「ひたりきんかくし、みきなんせんし」と書いてあるのです。あれは、右が南禅寺で、左が銀閣寺ということなのですが、点を打たないので、そんなへんな読み方になってしまう。だから、清音、濁音の問題は、どうもはっきりしません。

■文部省の机上プラン

言葉の変化は、誤解から生じて自然に通用してしまうもののほかに、人為的に造り出されて行くものもあります。今度は、文部省の悪口になりますが、私は子供の頃非常に不思議に思ったこ

とがある。

小学生の時、夏休みの宿題などをもらうと、「次の問に〃答えなさい〃」とか「何々を〃書きなさい〃」という言葉がありました。東京では、「お書きなさい」とか「お答えなさい」という言葉はあるのですが、「書きなさい」などという言葉は、子供心にも異様な感じがしました。それは、ものを知らない、文部省の役人の作った言葉だろうと思います。

文部省の作った言葉で、非常に有名なのは、明治三十年の教科書にある「お父さん」「お母さん」という言葉です。私はこの言葉がきらいで、伜などに〃お父さん〃などと呼ばれると、どうもむずがゆくていやな感じがします。これは、文部省が、教科書の中で、父親、母親ということを、何と呼ぼうかという時に、机上プランで作り上げた言葉なのです。結局、この教科書を通じて、全国に標準語のように通用してしまいました。ただ、この時、学習院だけは異議を申し立てて「お父さま」「お母さま」にしたのだそうです。

最近でも、ものを知らない女子学生は「お父さまがおっしゃいました」などと、平気で私にいうのがおります。そんなのは、みんな卒業式で振袖を着るような馬鹿な娘です。

お父さま、お母さまという言葉も、お父さん、お母さんというのも何か非常に耳にさわりますが、それはもう、われわれのただの感傷なのかも知れません。明治百年のあいだに生れた言葉ですが、全国に通じてしまった言葉です。私どもは「おとっつあん」「おっかさん」で、お母さんなどとはどうしてもいえない。お母さんなどというと、待合の女将さんを思い出してしまいま

す。

細いことを拾ってまいりますと、ずいぶんおかしいなと思う言葉があります。しかし、そういうような、個々の言葉のへんなことよりも、ひとつ大きな問題として、関西の言葉が東京に非常に影響を与えてきているということがあります。

昭和十年頃に、関西の漫才が東京で流行したことがあります。エンタツ、アチャコが入ってきた頃ですが、その時に、東京の言葉の中に大変な勢いで大阪の言葉が入ってきました。

それから、また最近、ここ十年ばかり、大阪の言葉が東京の言葉に影響を与えています。これは、プロ野球に関係があるのではないかと思います。野球は、西のほうがキャンプになることが多いので、関係者が盛んに上方語を使う。だからプロ野球が盛んに放送されると、われわれの耳に関西弁が入ってくる傾向が強くなります。

ところで、われわれ東京から見ますと、思考型の人は――もちろん関西だってものを考える方はたくさんいますが――関西弁を使うと、どうもちゃらんぽらんに見える。政治家なんかもそうです。社会党の佐々木（更三）さん（元委員長）だって、関西弁で「あらへん」なんていったら、あまり重々しくない。やはり、東北弁のほうが、思考型のような気がします。

それはともかく、最近は、関西でも、大阪の言葉が特に濃厚です。

私は、よく「東京のど真中に育った江戸っ子の池田先生」と紹介されますが、私は江戸っ子ではありません。東京の人間です。江戸っ子というのは職人階級ですから、学があっちゃいけな

い。「人生字を知る憂患のはじめ」で学問を学んだものは、もう江戸っ子ではありません。不幸にして、私は学がありますから、江戸っ子ではないのです。

また東京の「ど真中」という言葉を盛んにつかいますが、この語も東京弁にはない。「ど真中」という言葉は、たいしていやな言葉でなくなりましたが、似た言葉で、「ど畜生」とか「ど阿呆」「ど助平」といったら実にいやな言葉です。これを、「大阪が東京に与えたいやな言葉だ」といえば、「いや、それは大阪じゃなくて、河内の言葉だ」という。悪いのは隣りにもっていってしまうのです。

「ど真中」というのは、ほんとうは、野球のホームプレートのど真中に、直球を投げ込んだ、ということからきたんだろうと思います。さしずめ東京では、「まん真中」ですが、「まん真中に直球」では感じが出ない。「ど真中」でいいのだと思いますが、そのように、野球を通じて、かなりの言葉が入っています。

だいぶ関西弁をヤリ玉に上げましたが、いまの歌謡曲は、日本の言葉をめちゃくちゃにしているということで、おおいに問題があります。

美空ひばりさんがうたってる歌に「おいらはなんとかの江戸っ子で、イキなハッピを云々」というのがあります。しかし、江戸っ子は、ハッピは着ない。印半纏（シルシバンテン）なんです。ハッピは関西のものなのです。最近は江戸っ子も、ハッピを着るようになってしまいました。

また、昨年（昭和四十二年）は「東京流れ者」という歌が、だいぶ人気を呼びましたが、「流れ

者」というのは、関東無宿なのです。ところが、あの歌の文句を読んで見ると、ギターの流しらしい。新内流しとか、ギター流しという流しは、正業ですが、流れ者というのはアウトローなんで、どうも作詞家は、「流れ者」という言葉を知らないらしい。

関西の言葉を、歌謡曲を通じて東京の言葉にしてしまった例で、「……してほしい」というのがあります。永六輔さんは、向島の人で東京人ですが、「こんにちは赤ちゃん」や「チコチャン日記」の主題歌などで、よく使っています。しかし、それは、関西の「……してほしい」というのとは、だいぶニュアンスがちがう。関西の意味は、かなり強い命令で、それを言葉の上でやわらげているのですが、東京は、軽く「……してちょうだい」というていどなのです。

私も、そういう区別を知らなかったものですから、失敗したことがありました。ある時、京都で女性に「いっぺん抱いてほしいの」といわれたのですが、その時分は、まだ、ここまで研究が進んでいませんから、東京風にたいへん軽く受けてしまい、後で「しまった」と思ったのです。

■出身を示した言葉

これは、関西の言葉ではないと思いますが、「おでばな」「あがりばな」という言葉があります。最近は立派な紳士が、「あがりばな」を略した「あがり」という言葉を寿司屋などでつかっている。これは、ちょっと顔が赤くなるような気のする言葉なのです。それは、女郎屋か、銘酒

屋の女の言葉です。それも、「あがり」という言葉を使った女性は、あれは銘酒屋の出の女だとか、女郎あがりだとかいわれたほど、その出身を示すはっきりした言葉でした。

「おでばな」という言葉は、芸者屋の言葉です。だから、堅気の女性や、堂々たる会社の社長さんが、寿司屋で「おい、あがり」などということは、いわないほうがよろしい。

「おあいそう」という言葉もそうです。これは、寿司屋なり、天ぷら屋なりが、「あいそづかしでございます」といって会計書を出すわけで、お客さんの方から、「おい、おあいそ」などというのは、まったくおかしな話です。

このように見てきますと、私どものまわりには、大変な言葉の移り変りがあるわけですが、それには原因もあります。まず、東京の人自身が、非常に言葉の上にディレッタントで、次から次へ、言葉の刺激を楽しんでかえて行くこと。そして多数の地方の人たちが入り込んでくるから、山手とあれば、知らない人は、ヤマテと読んでしまう。そういうこと以外に、ときどき顕著な波が押し寄せて、東京の言葉のなかに、大阪やその他の土地の言葉が入ってくるというわけです。

しかしまた、最近、どうしようもなくなっているぐらい変化しているのが、アクセントです。いままで、東京では平板にいっていたのが、頭高にいい出すアクセントが非常に耳につきます。

それともうひとつ、これは、もう十年か二十年の問題ではないかと思いますが、ガギグゲゴと軽く鼻に抜いて発音するガギグゲゴと、ふつうの濁音のガギグゲゴとの区別の問題です。この区別は、関西のほうでは早くからなくなっていますが、これが東京の言葉に微妙なニュアンスをも

たらしています。

美智子妃殿下が、はじめて婚約を発表なさいましたとき、立派な、わかりやすい言葉でお話しになったのですが、たったひとつ気になったのは、このガとガの区別がないことでした。「イギリスのオミヤゲにいただきました」とおっしゃったので、なおしていただきたいものだなどといいましたら、すぐおなおしになった。

ちょっと注意すれば、ガとガの区別はなおります。まだ、いまの妃殿下が、国母陛下におなりになる時代までは、教養ある方は、ガとガの区別はしたほうが良いという考えが、全般的に多いのではないかと思います。

池田弥三郎（いけだ・やさぶろう）
慶応義塾大学教授。NHK解説委員・用語委員。大正三年十二月東京に生れる。昭和十二年慶大国文学科卒業。同二十六年慶大助教授となり、同三十六年四月教授に就任。「日本芸能伝承論」で博士号を受く。著書に「日本人の芸能」「日本の幽霊」など多数ある。

国粋主義の系譜

恐怖のテロ集団「玄洋社」「国龍会」の結成に始まる日本右翼運動の盛衰記

児玉誉士夫

天皇中心主義

国粋主義の系譜についてとのことですが、この道では、何人かの先輩もおられますので、私など僭越ではなかろうかと考えましたが、この世界で四十年、生き抜いてきた自分なりの感じを申し上げたいと思います。

国粋主義の概念規定となりますと、ちょっとむずかしくなりますが、日本の場合これは、天皇中心主義につきるのでないかと思います。天皇と天皇制と、それを取りまく日本独特の政治構造、社会構造の特異性が日本の〝国粋〟である。そしてそれから出発した愛国主義が、いわゆる国粋主義なのです。

今日の世界諸国家の中には、単一民族国家と、複数民族国家があります。日本が大和民族という単一民族国家であることはいうまでもありません。したがって民族と国家は同じ意味で呼ばれる。これが、ソ連、アメリカなどの複数民族国家では、そのような呼び方はできないのです。

天皇は、国民の血縁的な宗家であり、民族のまとまりの中心である。いわば、天皇と国民は〃親と子〃の関係なのです。したがって、これは、支配者と被支配者というような西欧的概念ではわりきれない、生命的なつながりなのです。

しかし、長い間、天皇の大権というものは、幕府に握られていました。しかもこの封建的幕藩体制の下で、人間らしく生きて行けるのは武士だけだった。百姓や町人は、奴隷のようにあつかわれ、すべて武士階級に奉仕しなければならないおきてになっていたのです。

このような時代の中で、志ある人々が、外国の圧迫などを機にして決起し、結局、四民（士、農、工、商）平等の天皇制を確立したというのが明治維新なのです。

明治維新の意義には、いろいろな要素がありますが、一番大切なことは、これが世界史上においても比類のない〃人間解放〃の大偉業であり、しかも、天皇と国民が民族のいのちをかけて、なしとげた業績であったということだと思います。封建制度をうち砕き、階級差別を取り除いて、近代統一国家にした。そして、明治維新以後の日本民族の驚異的躍進がはじまったのです。私たち日本人は、このすばらしい国粋主義の発揚を、誇ってよいと思います。

そしてその後、この国粋主義というものが、一つの行動と組織になって最初に現われたのが、

福岡の箱田六輔、平岡浩太郎、頭山満などの諸先覚によって指導された「玄洋社」です。

この玄洋社は、明治十二年に創立されたのですが、当初は「向陽社」として結成されました。ところが、太陽というのは天皇を意味するから「天皇に向う」と誤解されるのじゃなかろうかという懸念があった。そこで「玄洋社」に改めようといい出したのが明治十四年です。

一方、この「玄洋社」頭山先生の精神を受け継いだ内田良平先生が、明治三十四年、東京にも「黒龍会」という組織を創りました。それ以後、昭和の初期までは「黒龍会」の活躍時代で、国家的な問題には、常に果敢な行動を展開したのです。

この「玄洋社」と「黒龍会」が、日本の右翼の根幹をなすものであって、これを切り離しては、日本の右翼の歴史は語れないのです。

■大アジア主義の真髄

明治以後の日本国粋主義運動は、これを三段階に分けて考えられます。

第一段階は、すべての右翼運動が、国士とか、浪人とか呼ばれた、明治の初期から、大正の末期まで。大正末期から、あのテロ時代を経まして、終戦までを第二段階。そして、敗戦後、今日までの時代を三番目の段階とします。

さてそこで、この第一段階ですが「黒龍会」が活躍しました大正の末期頃までは、国粋運動の

草創時代。この時代の世相はといえば、明治維新後、日本を支配していた藩閥政治の横暴に対する、民権擁護運動と、国際社会に対する国権伸張の運動が盛んでした。しかも、運動は、国士とか浪人とか呼ばれる特定の有志組織によって進められることが多かったのです。

また、この頃、浪人と呼ばれた国粋主義者の社会的地位は、今日の右翼と比較して、かなり重きをなしていたといえます。

たとえば、大正五年に、インドの独立の志士ボースが日本へ亡命した時のことです。頭山先生が、例の東京新宿の中村屋の養子ということにして、かくまいおうせてしまったのですが、この時、英国側から、日本の政府に対して、ボースを引き渡せといってきた。これに対して、日本の時の外務大臣は「日本には浪人という特殊な階級がある。この階級は、政府の力をもってしても、どうすることもできない」と回答しまして、ついにそのままになってしまったのです。

しかしこれは、単に浪人の地位が高かったというよりも、ひとつには頭山先生の大人格がそうさせたのではないかと、私は考えるのです。ともかく、明治から大正にかけての浪人の活躍というものは国士として恥しくない。立派な先輩であったと思います。

この当時の「黒龍会」あるいは「玄洋社」を、大陸主義だとか、大アジア主義とか世間ではいろいろいわれています。しかし、この大陸主義、大アジア主義にしましても、けっしてアジアをみんな取ってしまおうとか、満州を日本のものにしようという考えではない。

ご承知のように、孫文の革命を応援し、あるいは明治三十七年に日韓は併合されましたが、頭

山先生は、日韓合併でなく、主権をそのまま認めようという〝日韓合邦〟の考えをもっていた。そして「黒龍会」の内田主幹は、韓国統監府の初代統監になった伊藤博文のもとで、日韓親善のために奔走したのです。「アジアの民と手を握って行こう」というのが、大アジア主義であり、頭山先生の考えていた大陸政策でした。

一方、大正の末期から、昭和の初期にかけて労働運動が非常に激しくなってきた。野田醤油の争議とか、足尾銅山、鐘紡の争議など、ようやく、日本にも赤旗の波が広がってきたのです。

このように、日本に迫ってきた、社会主義、共産主義の脅威に対して、右翼団体が、雨後のタケノコのように続々と出てきた。それらはいずれも、精神は「玄洋社」に発しているとはいえ共産党に対抗するものであり、いわゆる反共的な右翼というものだったのです。

そしてこの右翼は、この頃から、二つの道に分れて進むようになったのです。一つは、純然たる反共団体。一つは、国家改造をめざす者たちでした。こうして、国粋主義運動は、第二段階に入って行くのです。

国家改造への熱情

大正末期から昭和初頭にかけて、政党政治の腐敗はその極に達した。明治維新によって維新された国の制度や政治権力、国策などが官僚や資本家や政党に独占される傾向が強まりましたの

「玄洋社」の同人たち　前列左が領袖進藤喜平太

で、愛国者の中には「もう一度昭和維新をやらねばならない」という声が出てきた。そしてこの時期を〝維新運動時代〟と称し、それによって、民族の理想を追求しようとしたのです。

本当に、当時の政友会と民政党の堕落というものは、大変なもので、どちらの政党にしても財閥と結託しなかったら政治は運営できない。それも、政友会が三井財閥ならば、三菱は民政党を支持するという状態でした。

しかも一方では、世の中は大変な不景気。昭和四年には、二百万人の失業者が出ており、東北地方の農村は、何十年来の冷害にぶつかっていた。農民は、ほとんど食えない状態で、やむなく娘たちは皆、女郎に売られたのです。吉原や、玉の井に娘を売り、そして子どもはといえば、小学校に通うのに弁当を

持って行けないというのが実情でした。それなのに都会では、政治家が堕落し財閥は奢る。盛んなのは、高級車が列を作る花柳界ばかりでした。当時若かった私たちにしても「この状態はなんだ。共産党だけが我々の敵ではないぞ」と思ったのです。

「共産党が生れ赤旗が日本にひるがえる、この労働争議の実状も政治が悪いからだ。腐敗した政治家と財閥をぶっ倒さなくては日本はよくならない」「もう一度、天皇の名による革命を断行しようじゃないか」という風潮が起きていたのです。これがいわゆる〝国家改造論〟であります。

若い私たちの当時の指導原理は、ちょうどそのころ北一輝先生が書かれた『国家改造法案』や『支那革命外史』その他大川周明先生が書かれたいろいろの著書によっていました。

要するに、国粋主義は、大正末期まで頭山先生と内田先生が指導し、それ以後は、北一輝先生と大川周明先生が国家改造論をもって私たちを指導したのです。

私たちは、共産党を叩く前に、堕落した政党政治と資本主義の欠陥を衝くべきだということになった。そして直接行動派の実力行使が起り、血盟団事件(昭和七年)、五・一五事件(同年)、神兵隊事件(同八年)、二・二六事件(同十一年)などが起ったのであります。

今日になって、左翼の歴史家が当時を「右翼は、軍の走狗になった」という見方をしていますが、これはまったく違います。なぜならば、当時、これらの事件に参画しました数多くの人々は、その結果として軍閥を生むことなど、夢にも考えていなかったのです。まして、事件後の自己の利するところなど、みじんも考えていない。

われわれは、ただ「政党を倒し、財閥を倒せば、必ず誰かが日本をよくしてくれるだろう。少くとも今よりはよくすることができるはずだ」と、信じていた。今考えれば、幼稚でもあり、若かったのですが、その時代は、そう考えざるを得なかったのです。

ただここでわれわれが、そのような国家改造はできるという信念をもち、明治維新を再現しようとした結果は、予想もしない軍閥を作ってしまったのです。これは私たちのおかした誤りでした。

それというのは、北一輝先生や、大川周明先生が、若い青年将校を教育し、これをこの運動に参加させたために、必要以上に軍、なかんずく陸軍が力を持ってしまった。そして、軍閥が、やがてみるみるうちに大きくなっていったわけです。

昭和の、あの暗黒時代に、〃立派な日本〃を夢みて活躍した若い青年将校や、若い右翼の人々は、あるいは処刑され、あるいは投獄されました。その間に、世の中は移り変り、満州事変が上海事変になり、支那事変に発展する。そして、大東亜戦争に突入しました。十年近い歳月を経て監獄から出てきて見れば、でき上っていたものは〃立派な日本〃ではなく、逆に軍閥の天下だったのです。

■敗戦で権威落ちる

それから終戦を迎え、国粋主義運動は第三段階に入ります。あれから二十一年経ちましたが、

今日の右翼というものの行動や、街頭の演説会などをごらんになると、昔の右翼の実力を知る人は、なんとも心もとない感じがすることと思います。

しかし、これは、やむを得ないのです。なぜならば、昔、われわれの時代には、北一輝先生や大川周明先生という立派な指導者が存在していましたが、終戦後においては、もはや、その先輩もない。また、われわれは浅学であり、いまだ、指導者としての資格は備っておりません。

また世間から、終戦を機会として、「日本の敗戦は、軍部が悪い、右翼が悪かった」といって、徹底的に叩きのめされた。今日の日本は、私たちが活躍した時代とは、あべこべになっているのです。戦前の愛国運動は、強力な主権国家を背景としていましたから、すべて、積極的、自主的でしたが、戦後は、敗戦という負い目の下に行動する受動的なものになりました。そして、われわれは、完全独立を目指す〝救国運動〟を叫んだのです。

日本に乗り込んできた占領軍は、政策を円滑におし進めるために、愛国団体を弾圧し、公職追放という処分を強行しました。そして、それが解除（昭和二十七年）されるまでの運動は、経験の浅い青年分子によって動かされていました。

今日の右翼は、昔と比較してたしかにいたらなさがあります。一方、社会の人たちも右翼といえば、目のカタキのようにするところがあるのです。しかし、今日の右翼が、内容的に充分勉強し、大所高所からものを見る必要があることは事実でしょう。

私たちも後輩を指導する場合「まず、天下国家をいう前に、自分自身の人格形成が肝要だ。自

分自身の人格が立派でなければ、天下国家をいう資格はない」と申しております。しかし、なんといっても終戦後徹底的に打ちのめされているという事実は、ひとつのハンディキャップになっているのです。

左翼がある限り、右翼はあるのが当然です。私は、この二十年間、打たれ、叩かれてきた右翼の中から、常識と新しい時代の感覚を持ち、新しい目標をつかんだ国粋主義思想が出てくると、信じます、というのは、先に述べた昭和初期における政治の堕落ぶりと比較して、今日の政治の方が、より立派だとはいえない。ただ前より、狡猾になっただけではないかと思うのです。卒直にいって、今のままの政治で「これであと十何年安心だ」といい切れる人が何人いるだろうか。愛想をつかしている人もたくさんいるはずです。

■国民感情の〝爆発〟——創価学会の出現

最近、創価学会について、保守党の方々も、いろいろその勢力の拡大を憂い、批判を加えています。しかし、私は、今、創価学会が力をもってくるということは、当然であると思います。今日の政党の軟弱さが、これを生んでいるのです。

たとえば、昭和初期に右翼が事件を起した時、国民大衆は拍手喝采した。五・一五事件が起きた時、「無罪にしてやってほしい」といって、一般市民の人たちが自分の指を切り、これを五、

六本集めて、嘆願したりしたのです。これをみても、政党が堕落すれば、それに対する国民の批判と憤懣は、必ず、何かの形で現われてくることがわかります。

今日の政治は、往年の政治に比較して決して良くないのですが、国民感情の〃爆発〃は、昔のような形では出ておりません。おそらく、そうした爆発の現われの一つが、創価学会という、膨大な組織を作りつつあるのだと思います。

悲しいかな、国民は右翼には、こりています。右翼といえば、すぐ往年のテロ行為を頭に思い浮べるのです。だから、今国民はついてこない。だが、政治に対する不信は非常に多い今日、このままではこの国民感情は必ず爆発するのではないかと思います。

私どもが、自分の子供や孫たちに、金や財産を残してやっても、いったい何になるだろうか。不安な世の中では、そんなものは空に等しいのです。それよりも自分たちの生きているうちに少くとも、三十年先、五十年先の日本が、もうこれなら絶対に安心だ、という社会をこそ残してやりたいのです。

必ず近い将来には、国粋主義が違った形で、違った目的をもって生れてきましょう。今も昔も右翼というのは、決してこわいものではない。すべてはその時代の空気が生むものなのです。

しかし、右翼が〃何もしない〃ということは、かえって日本の将来にとって恐しいことだともいえます。昔は、青年志士でも、売名とか、自分の栄達とかは考えておりませんでした。「自分は死んでも、日本をよくしよう」という国家に対する情熱をもっていたものです。

ところが今は、そういう情熱がありません。「よしんば悪い政治家が倒されても、次のヤツが出るだけだろう。国のために監獄行きなど、まっぴらご免だ」という気持が広がっているのです。

私は、決して、あのような暗黒時代のくることは望みませんし、暴力は絶対いけないと思っています。私たちの後を継ぐ若者に対して、極力、自分たちの踏んできた誤った道を踏むなと申しております。

昭和四十三年は、日本民族が明治維新という歴史的大偉業をなしとげてから、満百年に当ります。この年を、単に〝明治百年〟としてではなく、〝明治維新百年〟と意識して迎えるということは、かつて明治維新のために生死をかけた、私たちの父祖と先覚者たちの悲願を受けとめ、その業績を、子孫に伝承する第一歩だと思います。

そしてこれから健康で、豊かな、安定した日本を作り上げ、子孫に譲渡することが私たちに与えられた大きな課題だと思います。

児玉誉士夫（こだま・よしお）

新夕張炭礦会長・東海興業・塚本総業顧問。明治四十四年二月、福島県に生れる。大正十四年日大皇道科卒業。若くして国粋主義運動に身を投じ、戦時中は海軍の物資調達のため、児玉機関を組織して活躍。戦後は、鳩山内閣の組閣に大きく貢献した。

二・二六事件――幻の〝昭和維新〟

昭和十一年、日本中を震撼させた青年将校クーデターのベールを剝ぐ

和田日出吉

右翼青年将校との出会い

明治維新が、日本の歴史上の大きな焦点として研究されているように、二・二六事件（昭和十一年）を頂点とする、いわゆる「昭和維新」も最近になって日本の近代史上の研究課題となっているようです。二・二六事件については、妙な因縁から、ある接触を持った私でありますが、ここでは学問的な探究としてではなく、当時、一ジャーナリストであった私の耳に目に肌に、じかに触れたことだけをスケッチ風にお話ししたいと思います。

だいたいにおいて、昭和維新という軍人による国家改造の動きが軍部内に具体的に現われたのは、昭和五年の「十月事件」で、これは不発に終りましたが、その翌年の三月事件、五・一五事

件、満州事変、相沢中佐事件、天皇機関説問題、国体明徴問題、統帥権干犯問題、美濃部博士襲撃事件等が、一つの潮流となって日本を襲い、ついに二・二六事件となったことはご承知の通りで、革命前夜のような雰囲気でした。こうした軍部や右翼の動向にアプローチしなければ、社会の動きが捕捉できない。特に軍部内の国家改造の指導的立場に立つ青年将校の動向に、深い関心を持たざるを得なかったのであります。

当時、私は武藤山治氏を社長とする時事新報社の編集総務という地位にありましたが、二・二六事件の起きる一年半位前だったと思います。日本、支那、フィリピンの三国で極東オリンピックがマニラで開催されることになりました。ところがまだ建国早々の満州国――というより関東軍、右翼、軍部の急進分子が、この極東オリンピックに満州国の参加を強要してきたのです。まあ、独立国としての実績を作ろうとしたのでしょう。満州国といったところで、これを承認しているのは日本だけで、世界各国は独立国として認めていない。支那もフィリピンもこれを拒絶したのも当然といえましょう。青年将校たちは文書を配布したり、演説会を開いたり、日本体育協会に対し強迫めいた不穏な行動が連日つづけられるありさまでした。

ある日、私は時事新報の社説で、この問題を取り上げ「軍は国防の一線に立ってのみ行動すべきであって、自ら理非の明白な問題のスポーツにまで口出しすべきでない」といった内容の社説を掲載したのです。その夜ふけ、私が社のデスクに残っておりますと編集長の自宅から電話がかかって、「今、青年将校が二名今朝の社説の件でどなり込んできて困っている。ことの消息は自

分にはよくわからないからすぐきてくれ」という。さっそく、私は車で馳けつけて見ると、坊主頭に袴をつけ、紺がすりの、いかにも青年将校らしいのが二人で正座しているのです。

記事の取消しと、謝罪の広告を大声でまくし立てる。私は社説は新聞社の生命であり、「ましてや今回の社説は正論であるにおいてをや」といって反論する。結果的には二人の青年将校は、私の説得に応じた形になりましたが、その青年将校の一人が、二・二六事件の主謀者の一人である栗原安秀中尉（当日の首相官邸襲撃指揮者、二十九歳、昭和十一年七月十二日銃殺）だったのです。眉目の秀でた、頭のいい清潔な感じの青年将校でした。その夜をきっかけに栗原中尉はしばしば私を訪ねてくるようになり、国家改造論を吹きかけたり、現下の社会問題や政党、財界の問題を訊ねて帰るのが常でした。

■農村の疲弊を救え！

「青年将校運動」という危険な存在が、巷間に伝えられているのに、その実体が知らされていないのです。そこで私は栗原中尉に、「ひとつ君たちの運動の理念と明白な目的を聞きたい」というと、それでは同志と相談してお答えしましょう、ということになり、その同志というのが野中四郎大尉、安藤輝三大尉（いずれも事件の主謀者で、前者は警視庁占拠後、ピストル自殺。後者は鈴木貫太郎侍従長を襲撃して瀕死の重傷を負わせる。七月十一日刑死）でした。

数日後、私は栗原中尉との会談を基礎にして「青年将校運動とは何か」という一問一答の形式による文章を草し、求められるままに、宗任高信氏が編集長をしている日本評論に発表したのですが、内容は不穏な文字の連続で、当然多くの伏字となって、判読に苦しむくらいでした。しかるに、この私の原稿は印刷場において何者かによって持ち去られ、まもなくその伏字のない原文のままの私の文章が「極秘文書」と銘打たれて、軍や右翼に流布されたそうです。

これについて「日本現代史資料」の編者高橋正衛氏は同著の中で「この記事『青年将校運動とは何か』の持つ価値は二・二六事件がなぜ起きたか、当事者が自ら語った唯一の資料で、二・二六事件に関する多くの著作があるが、事件の直前に当事者の蹶起せざるを得ぬ理論と心情を直接語っているのはこの記事以外にはない」と記しています。まあ、ある意味で貴重な資料のようで、四百字詰四十枚の大部のものでした。

その内容を簡単に説明するのは困難ですが、要するに「青年将校運動」とは青年将校が指導的立場に立ち国家改造を目的とする「軍隊運動」であること。自由主義、左翼思想の侵蝕は民間のみならず軍部内にもおよんで国体の擁護までも危い。軍部の上層の腐敗は、軍閥を生み、これに閥を育ててあい争う。天皇の大権を重臣や軍閥が私議する。独占資本は国民大衆から飽くなき搾取に狂奔する。政党は党利党略をこととし、ことに「全国の農村からの兵士を預る将校たる自分らとしては、疲弊した農村で、飢えのため、兵士の妹が女郎屋に売られてゆく実情を知るに及んで、到底兵士に、後顧の憂なくして国防の第一線に死ねとはいえない」。

三宅坂を占領し，陸軍参謀本部への交通を遮断した反乱軍

これらの実体の責任こそ重臣であり、軍閥であり政党であり、財閥である君側の奸である。これを絶滅するのが彼等の使命で、後は天皇陛下のもとに一切を奉じてはせ参じるものだ。彼らは軍人による独裁も考えないし、事件を起して政権を奪うごときはファシズムで、絶対に排するところである。——というようなことで、単純というか狂信というか恐るべき内容のものでした。

近く「青年将校の革命が起る」「第一師団がその中心だ」「その時期は、第一師団が駐満部隊として出発する直前だ」などと流言や、憲兵隊や警視庁の情報が乱れ飛んで、まことに暗い世相でした。

■銃剣に囲まれて官邸へ

忘れもしない二・二六事件の前夜の二月二十五日の夜、私は親友の大仏次郎君（作家）と、大川端近い料亭に一緒にいましたが、その時近くの私の知っている料亭で、三上於兎吉（作家）氏が陸軍省の新聞班長根本中佐と酒をのんでいることを知っていました。私はその夜、おそらく二時すぎ、大仏君と別れて雪の降る中を自宅に車を走らせたのですが、その頃はすでに歩兵第一、第三連隊、近歩三の連隊約千四百余名は、完全武装して行動を起したのですが、私は知る由もありませんでした。

翌朝、私は新聞社の至急電報によって起されました。「大事件、至急出社セヨ」というのです。その時「やったな」という電撃のような直感をうけたわけです。ついに日頃予感していたものが現出した感じです。政府による一切の公表はない。大臣の暗殺や首相官邸襲撃などが流言的に伝わってくるが、真相はわからない。その時ふと思い出したのが、昨夜の大川端の料亭の根本中佐のことです。陸軍省のスポークスマンに逢うことが真相をつかむ一番の近道だと思い、昨夜の根本中佐の行動を聞こうと、その料亭に電話をしました。

すると女中が「根本さんはまだお寝みです」という意外な返事です。事件の起きた朝、軍のスポークスマンが料亭に泊っている。これは私には事件への一つのヒントでした。そんなところに「栗原さんという方から電話です」と給仕が取り次いできましたが、画家で友人の栗原からだと思って、急迫する現在、電話を断ろうとしているところへ、給仕は再び「先方は栗原中尉といっていますが」というのです。

この事件の真最中、中尉のことを真先に浮かばなかったことは不思議でしたが、そこで慌てて受話機を取ると、聞き覚えのある中尉の声でした。そして中尉は「部隊を率いて、首相官邸を襲撃し、今、官邸にいます」というのです。驚いてしまいました。

現場を見ることはできないが、誰でもいいから青年将校に逢えぬものか、と私は電話で中尉に迫ったのですが、中尉は「目下危険ですから」と渋るのです。しかし私はとにかく行って見るからとだけ一方的にいって電話を切り、社の車に飛び乗ったのです。

しかし、首相官邸に近づくと霞ケ関、平河町からの道は銃剣を持った兵士によって遮断されています。ようやく溜池口を見つけて官邸目がけて坂を上りかけました。するとバラバラと銃剣の兵士たちが飛び出してきて私を取り囲んだのです。そこで私は栗原中尉と先刻電話でここへくることを通告してあることをいうと、その兵士は剣先を私の胸元につきつけたまま正門近い連絡所まで連れて行きました。箱やトラックなどのバリケードが積まれ、機関銃が三、四丁、その間から覗いていました。

正門に入ると、カーキ色の兵士たちが三々伍々用ありげに動いていますし、雪の中に三叉の剣が光り、トラックが毛布を積んで入ってくる。衛門の窓から機関銃がにらんでいるのですが、それが襲撃の跡を感じさせない。むしろ演習の小休止といった静かな光景でした。玄関に近づくと、私はすぐ栗原中尉を見つけました。玄関での焚火を前に、中尉は外套の上から水筒の革ひもと腰鞄の革ひもを十字に肩にかけ、私を見つけると挙手の敬礼をして近づきました。

■首相の遺骸に対面

中尉は真先に、私から官邸以外の外の襲撃の模様を知りたがって、湯河原（牧野伸顕伯襲撃場所）はどうなったでしょう、いまだに何んの連絡もないのは失敗したのかも知れませんともいいました。しかし実に落ついているので、私も平静になって「これから、まだやるのか」と聞くと、いや一段落です、と答えました。「ねらったのは誰と誰か」というと、実際に襲撃された者の外に、林大将など四、五名の軍人の名を記した紙片を見せましたが、そのリストの中には財閥の名が一名もなかったのが意外でした。

そこで、私は「今度の行動は、いつか君に聞いた青年将校の理念のあれだね」というと、「そうです」と答えたので「しかしまさか君がこの事件の中心になるとは思いもしなかった」というと「あんたに予告できませんものね」と笑いながら、私にガリバン刷りの「蹶起趣意書」を手渡してくれました。

これからどうしようというのかと聞くと、誰が首相になろうが、誰が大蔵大臣になろうが知ったことではありません、ただ大掃除をしたのですから、と淡々という。だが次の内閣はどうなるかと聞くと、小畑（敏四郎）と柳川（平助中将）ということになるんじゃないでしょうか、という返事、じゃ真崎（甚三郎中将）は？　と聞くと、それは後になるのじゃないですか、とに角今度

できる内閣はケレンスキー的内閣みたいなものですよ、と他人ごとのようにいうのです。

そこで私は、総理が暗殺されたのはどこかと聞くと、中尉は銃剣の兵士を連れて官邸の案内に立ちました。窓のスティール・サッシがひんまがり、ガラスがとび散り、日本間の内玄関から書生部屋へかけて、土足と家具の散乱とガラスの破片で一杯です。

内部に入ると、赤いジュータンの廊下には、血が黒々として、官邸の洋間との境にある鉄のよろい扉に三日月形の穴があいている。兵士がマサカリでやったのだと説明しました。

日本間に行くと、中尉はしめ切った襖を指して、中尉は「この中をごらんになりますか」という。緊張した中尉の表情で、私は首相の遺骸が安置されてあることを直感したのです。

たとえ、異常な事件とはいえ、一国の総理大臣の官邸の奥まった座敷に、行動隊の手を通じて入り込んで、今また総理の遺骸を見るかといわれて、異様な混乱ともなんともいいようのない反省を覚えたのは、今日なお記憶に残っております。

行動隊にとってどうあろうとも、私にとっては総理であります。私は、好奇心的な自分の気持を制して、「ご焼香するつもりで、目礼させていただく」といいますと、中尉は静かに襖を開けました。十二畳もあるかと思われる日本間。その真中に西向きに床が一つ敷かれ、顔の上まで花模様の西洋布団がかけられて人が寝ている様子です。もちろん、それは首相の遺骸に違いないと思ったわけです。私は静かに頭を下げましたが、もしその遺骸の顔に布団がかけてなかったら、あるいはかけてあっても中尉が布団をはがして、その顔を私に見せるようなことがあったら、どう

だったろうと思います。というのは、私は岡田首相とは仕事がら何辺かお目にかかっているし、首相の身代りに暗殺された松尾大佐も顔見知りでした。従って、もし私が遺骸の死顔を見てこれは岡田首相ではないと中尉にうっかり発言したら、どういう事態が起ったでしょう。

■結果は悪い方へ向く

再び唐紙は閉められ廊下に出ると、中尉は雪の積った中庭の一隅を指して、この庭が総理の最後の場所ですといった。そこのガラス扉は破れ、雪の上には血の色が散っていました。松尾大佐は、岡田首相と誤認されて、この中庭で射殺されたのだそうです。さらに廊下を行くと乱闘の跡が生々しく、血にまみれた遺骸が、そのまま横たわっていました。村上という護衛の巡査だそうです。あたりの壁にも、どす黒い血が散っている中に、もう一人の巡査が倒れています。

広い台所を通って女中部屋のような室に行くと、女中が押入れの襖を背に真青な顔をして座っていました。中尉は、お前の自分の家は何処だ、と聞くと、中目黒ですと答える。中尉は「溜池の電車通りまで兵に送らせるから自宅に帰りなさい」といいましたが、ただ「ハイ」と答えただけで、その女中は立とうとはしませんでした。

実はこの時、この女中の背後の襖の一枚をへだてた押入れの中に、岡田首相は生存していたのです。私は事件数カ月後に、岡田さんを角筈の私邸にお訪ねしたことがあり、そのことを話した

ら「ああ、あの時襖の外で軍人と話していたのは君だったのか」と、感慨深そうにいわれたのを思い出します。

私は引返して玄関に出た時、雪の前庭先に一人の背広の紳士が、歩いてくるのが目につきました。中尉が「誰ですか」と聞くと「総理大臣秘書官です」という声です。当時の秘書官、先頃の郵政大臣の迫水久常君でした。その時、中尉は私に「私たちの役目はすみました。今はお上のご沙汰を待つだけです」といい、「逆賊といわれれば死ぬばかりです」と、つけ加えました。そして帰社しようとする私を正門まで送ってきて、挙手の敬礼をしました。

この別れが、彼との最後でした。時が経って中尉が処刑される前後でしたが、住所も書いてない、毛筆で栗原安秀とある一通の封書が届きました。これはどこにも披露しておりませんが、その中で彼の心境をもらしていると思いますので、ここに引用しておきます。

『その後お変りありませんでしたでしょうか。お別れに際し、非常になつかしく感じ、一筆さしあげたわけです。

維新到頭一蹶、もっとも時運の転回の一礎石となれば幸甚、僕はそう確信いたしていますよ。その中にゆっくり僕のほうへいらっしゃい。蓮の葉の上でゆっくりお話ししましょう。しみじみと人生を考えたのんきな四カ月を送ったことを感謝せねばなりますまい。

鞏固たる信念と、勝利者たる誇りと、人生の秘奥の獲得との三つを持ってさようならするのは、しごく愉快です。本年二十九歳、とにかくなし得たところは、あなたのご推察の通りです。たと

え、いかなる毀誉褒貶があろうとも、時運飛躍の一助となったことを喜びます。

社会の瀕渊たる動きを引き起したことをみずから信じましょう。あまり長く書いても仕方ありませんからこれで失礼。お元気で、幸福を祈ります。

和田日出吉様　　栗原　安秀』

彼がいうように〝時運転回の一礎石〟になったかどうかは、ご承知の通りです。かえってこういう狂信的な右翼の動きは必然的に国運を悪い方に向け、やがては、大東亜戦争に突入して行った。それが実情のようです。

和田日出吉（わだ・ひできち）

日本ノーベル会長。明治三十一年一月生れ。大正十年慶大法学部、同十三年ワシントン大学農政科各卒業。同十五年帰朝、時事新報に入り社会部長、編集局総務、中外商業新報論説委員、満州新聞などを歴任、昭和二十二年日本貿易を設立、社長に就任す。著書多数。

東條英機とその時代

疾風怒濤の時代の渦中で、当時の指導者と親交のあった筆者が、その真相を語る

矢吹　一夫

■墓をあばいて鞭打つ

昭和の前半、すなわち二十年の終戦まで、私の青壮年時代は、いかなるめぐり合せか、陸軍や海軍との交際が多かった。そしてとくに、支那革命の発展途上、昭和の初めですが、ボロジンなど中国共産党が長江一帯を制圧して、その勢力が伸びた時代、そして蔣介石が日本に亡命したような頃から、ずっと中国との関係ができましたので、その間どうしても陸軍と交渉を持つ機会が多かったのです。

死刑になった板垣大将とは、彼が少佐の頃（参謀本部支那課）から飲み仲間でしたし、松井大将も、参謀本部の部長時代、少将の時から、私の親しい先輩の一人でした。その後、多数の陸軍幹

部連中と交渉がふえ、多くは酒を飲み議論をする友人としてのつき合いが多かったのですが、さらに十二年から調査部嘱託を引受けたりしたため、それだけに、いろいろな場面に立ち会う機会も多かったわけです。東條大将もそういう知り合いの一人で、彼が陸軍調査部長時代からのつき合いです。

戦後二十年余を経た今日、多くの戦争もの、もしくは戦時中の政治的暴露ものなど、さまざまなものが出ていますが、それらの中には、作り上げられたものや、間違ったものが非常に多い。東條の場合もそうです。加うるに、戦後になってから、陸軍や東條を批判攻撃する立場の人たちの多くが、戦時中、陸軍や、とくに憲兵隊などに、苛められたり、迫害を受けたというようなこともあり、もしくは陸軍の中でも、いわゆる統制派対皇道派といいますか、対立的な立場にあったような人たち、および、歴史的にも長く対立関係にあった海軍の人たち——全部というわけではないが、性来の陸軍嫌いといったような人たちの間から、さまざまな批判や攻撃が行われています。

したがって、今次大戦に関係が深く、勢威を振った東條とか武藤とか、その他の人々に対する批判はまことに厳しく、万悪ことごとく陸軍にあり、東條にありとして、今日に至るもなお一世の憎まれものであります。これを少し大げさにいえば、いまも「墓をあばいて鞭打つ」状態がつづいているのですが、国家や民族に対して、償うべからざる不名誉な大失敗をしたものとして、当然とすべき理由があります。しかし同時に、歴史の真実は明らかにされねばならず、不当な作

り話や、過酷な攻撃は正されねばならぬと考えます。さような意味で、死人に口なしというか、何と批判されても、罵られても、一言弁明の理由をもたない彼らのために、生前いささか交遊のあった私などが、真実の解明を通じて、歴史的事実を明らかにするという意味からも、努力すべきだと前から考えていたのであります。そして今までにも、雑誌や単行本などに、断片的ながら書いたこともありますが、ただ、東條英機を語るということは、まだ時期的に早過ぎるという気持がありました。

ところが、すでにアメリカあたりで「東條英機」と題した本なども出されている。それらを見ると、やはり日本で戦後作りあげられたいろいろの伝説が、早くも歴史として伝承されつつあるような印象も多い。そこで「東條英機とその時代」という題で、ごく大ざっぱですが、お話申し上げたいと思います。

まず、政界に陸軍の勢力が強く登場するにいたるまでの、昭和初期の情勢を概観しておきたいと存じます。第一に、世界は一九三二年七月、イギリスのオッタワ会議を契機として、ブロック経済の段階に進み、きびしい国際対立が発展しつつあったことです。ヨーロッパでは、イギリスが老衰し、フランスが頽廃傾向を示している中で、ドイツではヒットラーが非常な勢いで抬頭し、イタリーでもムッソリーニを中心としたファシズムが起り、独伊の欧州における提携を中心として、新らしい勢力圏が精彩を浴びつつ世界の注目を集めていました。

そして一方では、ソ連の大軍拡が進み、アメリカでもルーズヴェルト大統領によるニューディー

ルの発展があり、隣邦中国では、あい変らぬ激しい排日抗日の運動が展開されていた時代です。

日本にとって、米ソや中国のかかる行動は、非常な圧力、脅威として受けとられていたことはもちろんですが、国内はどうであったかというと、初年に金融恐慌があり、農村も凶作がつづき、政治的責任機関である内閣や政党は無能でもあったが、政治的腐敗事件が次々に発生するという状況で、国民の失望と不満を買っていたのであります。

かような内外情勢であった時に、各界の有識者と目せられる人々の間から、憂国の叫びが、国政革新を要望する行動が、各方面から抬頭し始めた。いわゆる新官僚の名で呼ばれた一群の官僚たち、さらに陸軍の革新将校といわれた人々がそれであります。この新官僚や、革新将校と呼ばれた当時の人々は、次第にマスコミによって時代の花形として、各方面に活躍し、一般社会の中からも、この人々に共鳴したり、迎合したり、追随したりする者の現われたことも自然の成り行きであったようです。

■都市と農村の格差

ここで、当時の都市と農村の関係について一言しておきます。都市のインテリと地方の農村との差は、現在もなおあり、世界的に見てもその傾向はまだ強いと思いますが、昭和のはじめほど大きな格差を示した時代は少いと思います。都市が次第に近代化し、民主主義的な傾向を持ちつ

朝日新聞

る下決判に苦被五廿犯戦

東條、廣田ら七名絞首刑

無罪なし 本庄ら十六名終身禁固

うなずく被告

東京裁判の判決を報ずる当時の新聞（昭23）

つ進んでいる時代に、農村は恐慌のなかに非常に苦労している。そして農村的な利害の主張が、きわめて封建的な、もしくは、きわめて前近代的な政治的色彩をもって出てくるわけです。

この前近代的な農村的政治的主張を代表したものが、五・一五事件に表現されているし、権藤成郷氏の「生活民範」的思想であり、農村子弟の大部分をもって構成される陸軍の青年将校や下士官、一般兵士などの動向にも現われているといえましょう。

当時、陸軍の若い将校たちの集りなどで論議されたり、出されていた刷り物などを見聞して、私など、かなりその方面に知人を多くもっているものでも、ちょっとついていけないような言論が多く、一種の特殊社会を思わせるものがあったほどです。これは、今日といえども、社会党の一部の人々の言行の中に、世間をして奇異の感を抱かせる内容のものがあったり、中共の最近の動きの中に、世界を唖然

とさせるような傾向が出てきたりするのと同じく、文明というか、文化の発展段階の大きな格差が、地域的にも、国際的にも多いと、政治的主張の異質性が強く発現して、対立性を激化させるものですが、昭和初期の日本がそれであったといえましょう。

それと、もひとつ申し上げておきたい問題は、当時の社会運動や、労働運動の主流が、著しく親軍的傾向を示したということです。これは、簡単にいいますと、治安維持法が成立し、その他これに付随して、厳しい取締り法規が完成したために、合法的な面では、もはや手も足も出なくなった。そのために、大正中期以来、勃興した社会運動の中から、民主主義的な政治手段による発展に失望するものが増加し、むしろ新官僚や、革新将校といわれる人々の政治行動と協同し、もしくは、これを支援し、利用して、初期の運動目的を達成しようとするに至ったのであります。

それと、従来から存在していた、いわゆる右翼というか、国粋主義運動というか、その方面の集団もまた、新官僚や革新将校たちの政治的動きに刺激され、いくつかの分派はあったものの、だいたいにおいて北一輝、大川周明氏の理論と戦略とを基本とする勢力が主力を占めつつ、反政党的親軍的傾向を強めたのであります。

さらに財界もまた、満州国の成立と、つづく日華事変の発展で、いわゆる臨軍費の増大等により、大蔵省や日銀等の支配のおよばざる経済活動領域の拡大が行われ、財界主流の中にも次第に親軍的財界人を生んだが、それ以上に、従来、日本財界において不遇の地位にあった野心的財界人の多くが、満州、北支、蒙彊、中南支等に進出を活潑ならしむるにいたった。

このように、政、財界および、国民運動等の諸分野において、現状打破、一九三五、六年のいわゆる対米英危機論を中心に、その後の五・一五、二・二六等の政治的テロ事件の続発、国際的には日華事変の勃発、長期にわたるその泥沼化、さらに対米英戦へと発展し、拡大する方向において、昭和初期から十五、六年にかけて、はじめは分流し、対立抗争していた諸勢力が、次第に吸収と合流作用が行われ、ついには奔流の滔天する如き勢力となった。

そして、それらの最頂点に押し上げられたものが、陸軍であり、東條であったといえると思います。これは、陸軍の時代的力が強いためにそうなったという事情もあるが、陸軍を時代の寵児たらしむるにいたった要因は、政党の腐敗、政治家の無能、国際対立の激化する過程において、国家としての国際的危機への適応力のスピード化、その高度化に対する期待と、その必要というものが、いたらしめたものだというべきでありましょう。東條という人物がとくに豪いというわけではなく、時代の必要が、彼を豪くした。

正直で、律義な彼を、時代の大きな流れが頂点に押し上げたと見るべきであり、その意味では、東條は、悲劇的時代の悲劇的人物であったと思います。

■総力戦か短期決戦か

次に、陸軍の派閥の問題に触れておきたいと思います。私の記憶を巡ってみますと、軍部の内

部に派閥争いが起った歴史は、古いことですが、とくに近いところでごく簡単に説明しますと、大正の末期から昭和にかけて、長州軍閥の衰退が顕著になった頃から、新しく軍のなかにいろいろな派閥的勢力の抬頭が見受けられるようになった。荒木大将や真崎大将を中心とするものもそのひとつですし、山下奉文のような人材、あるいは永田鉄山のような人々が新しくほうぼうから出たのですが、東條大将もその一人であると思います。

永田鉄山という人物は、陸軍の歴史を通じて見て、非常にユニークな人材であったと思います。私がこの永田鉄山のことを、かつて「文春」に書いたところ、いろいろな人たちから怒られましたが、私は「永田の前に永田なく、永田の後に永田なし」という立場を取って、今日も自説を変える必要はないと考えています。

彼が第一次世界大戦に観戦武官として、欧州から帰ると、大正十四年頃でしたが、『国家総力戦論』という長文の報告書を時の陸軍大臣に提出しております。おそらく日本人で、しかも、現職の軍人で『国家総力戦論』というものをまとめたのは、彼が最初ではないかと思います。これは、第一次大戦末期にドイツのルーデンドルフ将軍等の提唱したものを、さらに彼が克明に研究し、発展させたもので、後に、われわれは、一読して感銘を受けた記憶があります。

この永田鉄山が、陸軍省整備局動員課長をしていた頃、その後任になったのが東條英機であります。そして、永田が残して行った『国家総力戦論』を読んで、非常に感銘を受けたそうです。これは東條が、後年私に話したことですが、爾来、年は一つか二つしか違わない永田に、東條が

敬意を表し、私淑するという時代がはじまったわけです。

さて、この永田が参謀本部の部長だった昭和八年頃と思います。昭和七年以来ソ連から提案されていた日ソ不可侵条約の締結問題をめぐって、軍部の内部で大論争が行なわれた。そして不可侵条約に徹底的に反対したのは、同じく参謀本部の部長だった小畑敏四郎中将（当時は少将）で、いわゆる永田・小畑の大論争なるものが、陸軍省と参謀本部を通じて展開されたのです。

永田の残した『国家総力戦論』によれば、日露戦争から第一次大戦を通じて、その当時の兵器が、敵の兵力を殺傷し得る限界は次第に明瞭になりつつある、という前提に立って「単なる軍事的短期決戦は、時代遅れになりつつある。したがって、国家の総力をあげて戦う総力戦でなければならない。その意味において、日本は長期的に総力戦的国家体制を建設すべきであり、この見地に立って日ソの間に不可侵条約を結び、満州国を育成強化しつつ、国力の充実をはかること」というのが要点でした。

それに対し、小畑少将等は「日本は、天皇を中心とする皇道国家であり、ソ連の共産主義とは断じて妥協・協調はありえない。また、戦争というものは、元来、兵力を中心とした、短期、即戦即決のものでなければならない」というのが、主張の骨子であります。

この論争は結局水かけ論におわり、ついに、このために二人とも中央部を出されて、一人は満州へ、一人は近衛師団の旅団長に転出させられるという事態になったのです。

■陸軍内の〝合理主義〟

総力戦か短期軍事的決戦かは、時代により、兵器の発達とその内容により、兵学上の長い論争の歴史を経て、今日もなお続いている重大な問題でありますが、当時の日本のおかれていた時点においては、永田の総力戦争――、不戦して国力の長期充実をはかれという主張が、中堅軍部の間に支持を得たのは事実です。同時にまた小畑の明敏徹底した短期即戦論も、多くの軍人たちの共鳴を得たわけです。この有志の大論争は、彼等の占めていた地位と環境からみて、国家将来の命運にかかわる歴史的論争であったわけですが、軍部上層部は、軍内の分裂を杞憂して、ついにこの論争を中途半端なものに終らしめたまま、引分けにして終っているのです。私は、ここに、後年の、そしてこのあとからつづき、発展した時局の数々の誤謬の根因があると考えているものであります。

永田はこのあと、永田に私淑した中堅軍部との権力を通じて、政治改革への努力を進めています。詳しいことは略しますが、永田や、その支持者の考えた要点は、それまでのいわゆる三月事件、十月事件および五・一五、二・二六事件等に示される一連の政治的非合法事件なるものを否定し、合法的に、漸進的段階的にこれを推進しようとするにあったようです。

軍隊は、民主主義国家においては、政治的存在にあらず、政治的に利用すべき政治力そのもの

に非ずとは、その頃から私なども一貫した主張でありました。陸軍省というものは、元来、行政官庁であり、陸軍大臣も一国務大臣であり、その幕僚もしたがって軍人であるとともに行政官僚に過ぎぬ。ゆえに、陸軍の所属する各兵団、その他の不平不満や主張等は、行政的政治的手続きを経て、閣議ならびに国会を通じて実現に努力すべき立場をとるのが当然、ということになります。

かかる見解が、永田の軍務局長就任とともに、陸軍省内外に具体的施策として発展しはじめ、そしてかかる発展の道程は、必然に、政治技術的な改革手段を不満とする反対派との対立、抗争を生ずるわけです。とくに、荒木大将の先生型、真崎大将の親分型のコンビを中心とする一団は、永田的合理主義をなかなか得心しない。

ついでですが、ここで一言しておきたいことは、この荒木、真崎の存在というものは、他日改めて評論したいと思いますが、とくに真崎大将は私とは同郷の関係でよく知っていますけれども、見るからに古武士的風格のある将軍であります。だから若い士官や将校たちは、親分的親近感をもって周辺に群るのですが、これが、永田等の方から見る、というよりも、連隊長とか、何とか長という地位にあるものから見ると、まことに不都合に見える。

早い話が直属の長を乗り越えて、いきなり真崎、荒木という上長官の所に出入りし、酒などご馳走になって天下国家を論ずる、というのだから、身分的階級的秩序を第一とする軍内部にあってこれは困ると考えたのでしょう。この不平や批判が陸軍省に集まり、教育総監部出身の永田と

してこれが許せない、統制の必要という気配にあり、この辺から、他の事情とも絡むのですが、いわゆる統制派とか、皇道派という派閥ができて、対立が激しくなり、荒木、真崎の退陣、永田の刺殺という事件に発展したわけです。

永田の死後、永田の志望を継ぐものもなく、彼の総力戦論も、ただ一部の願望としてのみ残り、企画院の設立、総力戦研究所などと、中途半端なものばかりに自慰したに止まり、以来、軍部は、政治的意志の統一も、戦略思想の大綱も、何らまとまらぬまま、外見的には巨大なる軍部が、内面的には混沌として右往左往しつつ、自ら作為した時局の大浪にもまれ、陥没し去ったと思うのであります。

■大陸進出か太平洋か

ついでに、陸海軍のことについて一言しておきます。簡略に本質的相違を申しますと、明治時代、とくに日露戦争までは、双方とも喧嘩をしながらも、明治大帝の指導下に協力したといえますが、大正期以降は、分裂対峙したまま、といっていいようです。日露役後、日本の国防国策を、陸軍は大陸に求めたのに対して、海軍は太平洋におくといったぐあいで、しかもこの重大な国防国策についての政治的法定をなし得ないまま、あとは、両軍とも実力にものをいわせて押し切ろうとしている。陸軍が大陸軍国の建設に邁進しようとするのに、海軍も負けじとばかり、八

八艦隊の大海軍案でゆずらず、両軍の押しっくらで昭和時代に入っていること、そして両軍の対立は、いっそうこの段階以後激化していることです。

これを考えてみるに、日本の陸軍は、初めフランスに、後にプロシャ陸軍に学んでいるのに対し、海軍はイギリスに学んだ。東郷元帥の時代までは、両軍ともに最高指導者が明治維新の風雪のうちに育った士魂軍才の人々だから、喧嘩はしても大したことはなかった。ところが、大正期以後、これらの建設者たちが故人になるか、老化したあとは、大きな欠点が現われたわけです。

すなわち、陸軍の学んだプロシャ陸軍は、大モルトケに象徴される政治色の豊富な陸軍であったため、日本においても、ネッケル少佐等の教育した明治陸軍は、政治性の過剰な陸軍を作り上げています。東條の父英教将軍は、このネッケルの愛弟子の一人ですが、一方、海軍はあべこべに、イギリスの民主主義海軍の伝統を受けて、政治性のない技術将校集団として成長している。両軍のかかる質的な相違が、昭和期動乱時代、日本の国力が両断対立させられるという悲劇の因が作られたわけです。

それに、もひとついけなかったことは、日本官僚の養成機関といわれる東大その他の大学が、戦争という巨大な政治現象を政治学の対象から外しており、むしろ軍事学の領域に押しやって、陸海軍大学に一任していたことです。したがって、政治家や官僚が、はなはだしい軍事的無知の状態にあり、一方、また陸海軍も、その大学において自然科学や精神科学は大いに力説、鼓吹しているが、社会科学は一切教授しないということで、政治学に無知な陸海軍人が大量に生産され

ている。

かように、軍事的に無知な政治家、官僚と、政治に無理解な陸海軍人と、これでは、追随や対立はあり得ても、真の協力はあり得ないし、容易ではないといえましょう。

このことは、話が少し飛躍しますが、明治憲法における統帥権問題についてもいえることで、陸軍は、戦局の進展に伴って、弾力的な見解を示した事実がいくつかありますが、海軍は、杓子定規に頑守して妥協しようとはしていない。

かつて、私は、伊藤博文が、朝鮮統監に就任したとき、明治大帝の勅許を得て、朝鮮軍司令官に対する統帥権をもっていた事実を知り、このことは、日露大戦の経験で、伊藤が統帥権の改正を秘策していたのですが、これらを研究した結果、陸海の対立的大本営の一元化が可能であること、この実現を陸海首脳に建策したことがあります。しかし陸軍は、当時の武藤軍務局長等が太く共鳴し、昭和十五年、企画院が「総合国策十ケ年案」を作製した当時、基本的前提として、国防対策のところで、大本営の一元化案を作り上げた記録があるが、この立案論争の過程で、海軍側から出席していた人物のうち、賛成したものは、当時海軍航空本部にいた大西滝次郎（大佐、終戦時中将、軍令部次長、自刃）のみであったことが、想い出されます。

この案は、この頃はまだ一部有志の腹案に過ぎなかったものですが、その後戦局の苛烈化に伴い、小磯内閣の末期、杉山陸相から、陸海の一体化について天皇への上奏、米内海相の反対上奏事件等に発展していること、その直後、大西軍令部次長が、海軍内部において、多田海軍次官と

同室執務という事態が起り、終戦に入って終った。この頃の海軍によると、大本営一元化、あるいは陸海一体化案なるものは、陸軍による海軍の併呑案、として受けとられていたらしい。明治憲法規定の統帥権事項なるものは、いかに面倒なものであったかは、東條が首相、陸相のほか、参謀総長兼任となったことでも、およその想像がつきましょう。

なお、東條と三国同盟、東條内閣成立の秘話、開戦の経緯、内閣退陣にいたる事情などにも触れたかったのですが、紙数がもはや尽きましたので竜頭蛇尾のまま、これで話を終ります。

矢次　一夫（やつぎ・かずお）

明治三十二年七月佐賀県に生れる。職工、沖仲仕人夫、新聞編集等の職に従事し、大正十年協調会に入り、労働争議調停につくす。昭和十二年国策研究会を創設。戦後追放にあい、同二十八年研究会再興、同三十一年および三十二年訪台親善使節団に参加、同三十三年岸首相個人特使として韓国を訪問。

山本五十六「死の暗号電報」

日本の悲劇！　山本長官の死をめぐる日米暗号解読の秘話

阿川　弘之

■前線激励計画

私が書いた「山本五十六」にまつわるこぼれ話のようなことを話せということでしたが、山本五十六長官がブーゲンビルの上空で撃墜されて亡くなった、その真相なり、それにまつわる話を少し突っ込んで申し上げてみようかと思います。

昭和十八年、ちょうどガダルカナルの戦いが非常に熾烈になった頃です。日本は、ガダルカナルを撤退して、押され気味になりはじめて間もない頃でした。

連合艦隊司令部は、内南洋のトラック島に、戦艦「武蔵」を旗艦として陣取っていました。しかし、ソロモン群島では海軍の航空隊が非常に苦戦しておりますので、それを激励するために、

山本長官は、幕僚を連れてラバウルへ進出することになったのです。

このとき、山本長官は、幕僚に向って「自分がラバウルに進出するということは、ほんとういうと、あまり好ましいことではない。開戦当時のように、瀬戸内海とか、陣を内地に移すということならむしろいいんだけれど、考えてもみたまえ、味方の本陣がだんだん敵の前線に引き寄せられて行くというのは、あまりいいことじゃないんだ」ということをいっております。

しかし、前戦の司令官その他からは、「なんとか長官に激励にきていただきたい」という強い要望があり、それに引きずられて、四月四日にラバウルへ進出、その長官を迎えて、米国が占領してしまったガダルカナルその他の地区へ、毎日空襲をかける、いわゆる「い号作戦」がはじまったわけです。

そこよりもっと南のブーゲンビル、ショートランドなどに前線基地があって、このショートランドあたりが、前線中の前線ですが、山本長官はトラック島の「武蔵」へ帰る前日に、最前線まで激励に行ってきたいといい出し、四月十三日には、長官の巡視予定の詳しい電報が現地に出されました。

その予定表に基づいて昭和十八年四月十八日の朝六時、ラバウルの東飛行場から、中型攻撃機に乗る。その飛行機は支那事変の当初に渡洋爆撃をやって、世界に名を轟かした陸上攻撃機（九六陸攻）の後裔で、一式陸上攻撃機といった。これは、非常に優秀な飛行機でしたが、火がつきやすいので、のちには〝一式ライター〟などともいわれたような、そういう欠点もあったようで

す。それはともかく、一行は、一式陸攻二機に搭乗して、六時ピッタリに離陸。すぐ後に零戦六機が護衛について飛び立ち、そして、高度約千五百メートルでブーゲンビルの密林の上にきたのです。

■軍刀握って戦死

ここで「〇七四五（午前七時四十五分）バラレ着」と書いた紙片が機内に回されました。いまですと、旅客機の上で、スチュアーデスが「間もなく東京国際空港到着でございます」というのと同じです。

と、ちょうどその時、護衛の戦闘機が一機、翼を振って前の方へぐっと増速して出て行った。操縦士が見ると、――見るといっても、山本長官の乗っていた飛行機の乗員は、全員即死しているわけで、これは二番機の生き残りの宇垣参謀長やなんかの証言ですが、――五百メートルぐらい下に、アメリカのP38戦闘機の編隊が南に向って飛んでいる。

護衛の戦闘機はこれに立ち向ったけれども、陸攻の方はとても歯がたつ相手じゃないので、すぐ高度を下げて逃げようとしたわけです。それに気がついたアメリカのP38は、二手に分かれて急上昇、はっきり戦闘の気構えを見せて、前路をふさいできました。

山本長官が一番機に乗り、二番機のほうには宇垣纒参謀長（当時少将）など幕僚が乗っていま

したが、この二機は急旋回、急降下をやるものだから、だんだん分れ分れになる。そして、ふっと二番機のほうから見ると、もうその時は、山本長官機は黒煙をふいて密林の中にぐっと突っ込んで行くところで、間もなく密林の中から黒煙が上ったということです。

二番機のほうも、左のエンジンを打ち抜かれまして、モイラ岬の沖に不時着水の形で墜落。すぐ転覆して沈んでしまったのですが、宇垣参謀長と、パイロットの下士官、それにもう一人、艦隊主計長の三人は傷を負ってブインの基地に収容されました。

翌日、残った幕僚たちがすぐ現地に飛び、ブインからも陸軍、海軍、両方の部隊が出て捜索に当った。現地は密林が広く焼けていまして、落ちた一式陸攻の尾翼に機番号だけが残っていた。生存者は一名もなく、機内に折り重なって黒コゲになり、氏名もよくわからない状態の人もあったそうですが、幕僚たちは、だいたい機の外に投げ出されて死んでいた。その中で山本長官だけは、三種軍装に軍刀を握って、密林の中でシートの上に端坐してうつむき、さながら何か考えごとでもしているような姿だったといいます。

それで、問題は、どうして、そういう撃ちとられ方をしたのかということになります。

話は前後しますが、山本長官の戦死が、潜在意識的には、自殺だったという説があります。

これは、微妙な問題ですが……。はっきり敗けるとわかっているのに、自分が先頭に立って、この戦争の火蓋を切らなければならなかったということは、山本五十六という人にとって、非常につらかった。それに、部下も、海軍だけでも一万六、七千人も死なせておりますし、自分の愛

した郷土、長岡の若い兵隊たちが、ガダルカナルで苦戦してたくさん死んでいる。「もう、自分も許してほしい。どっかで死に場所を得たい」という気持が非常に強かったようです。これが、潜在意識的に、自殺だったといわれるゆえんだと思います。

ところで、なぜ山本長官がP38とぶつかって撃ちとられたのか、当時は、どうしてもわからなかった。結局、偶然の不幸だったということで片づけられたのです。しかし、戦後、アメリカ側が、それとなく発表したところによれば、やっぱり暗号を解読されたらしい。

ネーヴィーか、アーミーか

日本は、幸か不幸か戦争に敗けまして当時の軍隊の暗号の問題も、機密事項というものは、ほとんど現在なくなっていますが、アメリカのほうは、その仕事が続いておりますので、どの暗号をどうやって読んだかは、一切いわないし、また聞いても笑って逃げられるのがオチです。だから、これはまだナゾの部分が多いのです。

日本の海軍の生き残ったものとしては、もしやられたのが海軍の暗号だとすれば、非常に面目のない話です。陸軍の基地からも陸軍の暗号で、「海軍の山本司令長官がブインに行って前線視察をする」という電報を、ブインの十七軍に打っている。それがやられたんじゃないか、と思いたいところなのです。

それで、戦後、旧日本海軍だった人が、アメリカの情報将校をつかまえて「一切合財何も教えてくれないというのは少し水臭いじゃないか、ネーヴィの暗号を解いたのか、アーミーの暗号を解いたのか、それぐらいいってくれてもいいだろう」といったら、その情報将校が黙って机の上にNと書いたという話がある。そうすると、これは、陸軍の暗号がやられたんじゃないということになります。

さて、そこで海軍の暗号ですが、まず前述の、四月十三日にラバウルから前線基地ショートランドに宛てて、詳しく長官の巡視日程を書いた電報が一通出ている。これが第一番目。

第二番目は、当日六時、出発する時のものです。これは、現在でも飛行機と基地のあいだで、必ず連絡するように、ラバウルの基地司令官が行き先に宛てて「中攻二機、護衛の戦闘機六機、〇六〇〇（午前六時）予定通り出発した」という簡単な電報を打っています。

第三番目は、一番機の機長がバラレの基地を呼び出して「〇七四五（午前七時四十五分）着陸予定」という、これも簡単な航空暗号を使って打ったものです。

第四番目が、さっきの陸軍の電報。

第五番目は、連合艦隊司令部が東京あてに打ったもの。四月十八日の巡視が終った後、トラックの「武蔵」に帰るので、「い号作戦」の戦闘概況と同時に、十九日、将旗を「武蔵」に移すという電報を打っている。

以上五通の電報のうち、二番目と三番目は問題にならない。なぜかというとこれは簡単な暗号

で出ているので、解こうと思えば解けたのでしょうが、それから準備したのでは、迎撃に間に合わない。つまり時間的に見て問題にならない。

四番目も、アメリカの情報将校がNと書いた以上、陸軍の電報ではない。

そうすると、一番か五番かということになるのですが、これは非常に高度な暗号書を使って出されています。つまり、無限乱数を使った五桁の数字暗号で出ているのです。

この五桁の数字暗号というのは、いったいどういうものか、暗号について素人の方を前提として、少しお話してみたいと思います。まず、約十万語言葉が入っている英和辞典と和英辞典を考えていただきたい。これはアルファベット順に、日本の場合はアイウエオ順ですが、並んでおり、その十万語の文字に対応する五桁の数字が、例えば四六七二一、九九三一四というふうにでたらめに並んでいます。

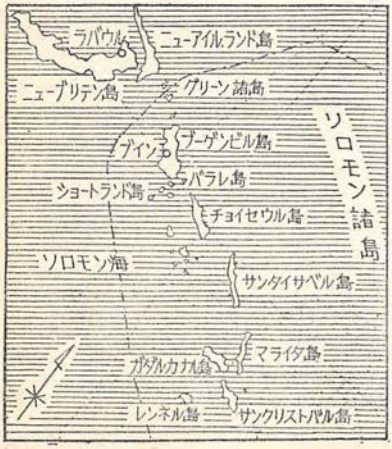
かりに、「連合艦隊司令長官」というのが五一三二六だとしますと、暗号を作成する時に、山本司令長官、連合艦隊司令長官、という原文に対応する数字として、五一三二六を書き出すのです。一方、受け取った方では、これを翻訳して文字を入れて行くわけです。

それだけでもかなり高度のむずかしい暗号ですが、暗号の専門技術からみるとこれなら必ず解ける。なぜならば、反復のあらわれる暗号は、必ず解けるというのが、現代の暗号解読の原則なのです。たとえば、連合艦隊司令長官というのが五一三二六だと限定されてしまうと、連合艦隊司令長官という言葉の五一三二六が、毎日毎日打っている電報の中に何十回も現われ、これがす

執務中の山本五十六長官

ぐシッポをつかまれる端緒になるわけです。

この繰り返し、反復があらわれないようにするために使われるのが、いわゆる乱数表です。それは、何万語という、無意味なでたらめな五桁の数字がまったく無順序にならんでいる。そして指示にしたがって、どこのページの、どの乱数から使いはじめるということ



にして、もとの暗号数字に乱数を足して行くわけです。

このようにすると、同じ言葉が何度繰り返されても、これに足す数字は全部ちがうので、その度にちがう数字に化けるから原則として解読は不可能です。たとえ今日のような、進んだ電子計算機などを持っていたとしても、そうすぐには解読できないと思います。

第六番目の暗号

一方、解読されていた、という人もいます。しかし、山本長官戦死の三カ月後に、例のキスカ島の無血撤退が行われている。アメリカ軍は、その後何週間かして、キスカに猛烈な艦砲射撃をして上陸したのですが、何もいないので「隠れているのだろう」ということで匍うように前進していった。結局、見つかったのは犬が二匹だけ、というコッケイな話もありますが、日本海軍の暗号を全部解いていたら、こんなことはありえない。

そうすると、一番と五番の暗号は解かれていないだろうということになります。そして、二、三、四番目は問題にならないのだから、ここでそれ以外、つまり六番目の暗号電報が問題になってくる。

六番目の暗号は、ショートランドの基地から出された。ショートランドの人たちは、後に出したということをかくそうとしたようですが、実際は発信されている。

ショートランドの基地からもう少し南にレカタという水上基地がありました。そこは、ガダルカナル島に近く、もう水上交通が途絶していたので、食料や重要書類を飛行機で落して、連絡を取っているようなところでした。山本長官も、そこまで行く気はなかったのです。

しかし、ショートランドの連中は「レカタの連中も苦労しているから、長官が明日こられることを電報で知らせてやって、激励してやろうじゃないか」といいだした。

ところが、レカタには、先に述べたような、高度な暗号書はもっていない。「簡単な航空暗号しか持っていないがそれでもいいか」ということで、少しためらったらしいのですが、結局電報は出された。

それまで、いくら高度の暗号を一生懸命組んで解かれないようにしても、ここで、いわば子供にもわかるような暗号になおしてレカタに打てば、なんにもならない。この電報が解かれている可能性はきわめて高いのです。おそらく、この六番目の電報が、山本長官を死に至らせた原因ではないかということです。

ガダルカナルにヘンダーソン航空基地というのがあり、そこの親分は、マーク・ミッチャー少将で、P38を率いた飛行隊長がミッチェル少佐でした。

ワシントンでは暗号がとけたということになって、ノックス海軍長官と、ルーズベルト大統領からガダルカナルへ直々の命令が出た。「全力をつくして山本を撃ちとれ。山本は非常に時間に正確な人で、予定通り六時ピッタリに出て、七時四十五分に到達するだろう」という命令です。

その命を受けて、ミッチェル少佐率いるところのP38十二機の編隊が飛び出して待ちかまえ、山本長官搭乗機を射とめたわけです。たぶん、こうだろう、ということなんです。

日本海軍は、暗号を解読されることによって、山本長官を失ったわけですが、一般に、暗号一つ解くことは、一個師団、一艦隊を持つよりも有利だといわれます。ミッドウェーの失敗なども明らかに暗号を取られているのです。

この場合、なぜ解かれたかというと、暗号書そのものをつかまれたケースも多いのです。濠州の沖で潜水艦が沈んだことがありまして、日本では行方不明になったものとして処理してしまったのですが、アメリカはすぐ潜水夫を入れて、そして、潜水艦の艦体を切って暗号書だけを引き上げたのです。そして、これと同種の暗号はらくに全部読んだだろうと思います。日本は、そういうことは知らず、多少手を加えたぐらいであい変らずそれを使っていた。それでミッドウェー海戦等で解かれている可能性が強い。これはもう一艦隊、一師団どころではない、大変な損失なのです。

■長崎原爆を知っていた

ところで、日本側の暗号解読の成果はどうか、ということですが、日本には、外務省と、参謀本部と、海軍軍令部と三カ所に暗号解読のセンターがありました。

私は、海軍軍令部の特務班という海軍のブラック・チェンバーにずっと勤務していたのですが、列強のあいだでは、中国の暗号が一番簡単でした。

いちばん歯が立たなかったのが、遺憾ながらアメリカの暗号で、実際、手も足も出ない。ついにまあ一語も解けなかった。

それでも、解かねばならないからといって、毎日神経衰弱になるような作業ばかりをさせておいても仕方がない。そこでもう一つ別の方法、電波をキャッチして船の位置を知る、いわゆる通信諜報作業ということをやったわけです。

これはどういうことかというと、今、南のある点から、アメリカの船が電波を出しているとしますと、東京からでもどこからでも、方位測定ということはできます。ところが距離はわからない。そこで別の所から、たとえば、トラック島からとか沖縄からとか、同時にその電波をキャッチして、三点ぐらいから、その方位に線を入れると、交った点に船がいることがわかる。それから、順々にたぐって相手の動きを察知するのです。

この電波の方位測定の他に、呼び出し符号とか、緊急電報、ウナ電とか、それよりもっと急いだものであれば「大切なことをいってるナ」ということなどがわかり、そうしたものを、いろいろ組み合せて判断する。最後にこの、呼び出し符号の例で、エピソードをひとつ申し上げましょう。原爆が投下された時のことです。

その頃、テニアンにB29の基地があって、東京、横浜、名古屋など、都市の空襲にやってきて

いました。日本側では、これらの飛行機の呼び出し符号、機番号を、全部、一機一機チェックしている。たとえば〇〇七X、〇〇八Yというふうに、何百機もの機番号の構成がわかっていて、今日はどれとどれがくるか知ることができた。もっとも、わかっていてもお手上げで、どうしようもなかったのですが……。ところが、その基地に不思議なことに、日本には絶対こない変った機番号のB29がきている。「これはなんだろう」と考えたが、わからなかったのですが、すると、八月六日の朝に、広島の上にこいつがあらわれた。

それで、これは原爆搭載機だということがすぐわかったわけです。九日の朝、九州の上に再びこれがあらわれたとき、すぐ電報を打ったのですが、長崎の原爆投下には、間に合いませんでした。

阿川　弘之（あがわ・ひろゆき）

大正九年十二月生れ、昭和十七年東大国文科卒後海軍に入り、兵科予備学生として三年間軍務に服し、同二十一年三月復員。以後著述生活に入り、三十年十二月よりロックフェラー財団の援助で米国に留学。代表作に「雲の墓標」「山本五十六」がある。

終戦始末秘話

敗戦という未曾有の難局に直面、日本の指導者たちは何を考え、どう対処したか。当時の立役者が語るその内幕

木戸　幸一

■戦況をご心配の陛下

終戦について何か話をするようにということですが、鈴木内閣ができた頃からだんだんと進んで行った終戦のいきさつを申し上げたいと思います。

鈴木内閣が誕生したのは、昭和二十年四月七日であります。戦況は次第に悪化しておりましたので、それまでの内閣でももちろん、なんとかして早く戦争をやめようという気持はあったのですが、いろいろな事情で、そういった空気が盛り上がるまでには至りませんでした。そこでいよいよ小磯（国昭）、米内（光政）の連立内閣が総辞職を申し出たので、この機会に、今度できる内閣はぜひともこの戦争の最後の内閣にしたいと考え、岡田（啓介）、米内両元総理あたりとも内々

相談をいたしました。そして重臣会議を開いた後、鈴木貫太郎大将を奏請して、鈴木さんに組閣をお願いした次第です。

この時、私は鈴木さんに「もし今度、あなたが組閣をなされるならば、きわめて重大なるご決意を願わなければならん時期だと思う」と申しましたら、鈴木さんも、「まったくその通りである。私はその点についてはしっかり考えて行きたいと思う」と語っておられました。

しかしながら、なかなか戦争というものは、そう簡単に片づけられるものではありません。だんだんと時がたつばかりで、内閣も、とくに目立った動きをしておりませんでした。そのうち五月八日には、ドイツが全面降伏をしまして、日本は、これからは単独で世界と戦わねばならないという、一つの重大な時期を迎えたわけです。

内閣でも、この時期になると、終戦について研究する必要を認めたとみえて、五月十一日から三日間にわたって、最高戦争指導会議――これは小磯内閣の時にできたもので、統帥部と総理、外務大臣といった人たちで構成されているのですが――この会議の構成員だけで相談が行なわれました。そこではじめて、ソ連との関係をなるべくよく維持して、機会があらばソ連を仲介にして和平にもって行こうという案が、一つ出てきたのです。

ところがどうわけか、そういう決定があったことを、私は少しも知らされておりませんでした。従って陛下も、実はご存じなかったように思うのです。しかし、この決定がいつの間にか洩れたとみえて、内閣はどうも弱腰だという声が起ってきまして、鈴木内閣は初めて臨時議会を開

くに先立って、六月八日に御前会議を奏請してきました。

これは、戦争の見通しおよび今後における戦争指導の方針というようなものを決めたのですが、この会議の決定を、私は陛下からお見せをいただいたのです。いままで御前会議の決定というものは、内大臣とは関係ありませんので、ほとんど見たことはないのですが、この時は、陛下が「これを見ろ」とおっしゃって、お手渡しになられたわけです。これはおそらく、政府はまだこんな強いことをいっておるんだ、ということが言外にあったろうと思うのです。

そんなわけで、私がそれを拝見しますと、もちろん国力め限界というものについては言及しておりますが、しかしながらなお非常な強気で、要するに本土決戦の体制に向って行こうというものでありました。私は、それを見たり、また陛下がご心配になっていらっしゃるご様子を目のあたりに見まして、どうにもじっとしていられなくなりました。そして、これは内大臣の職権外ではありましたが、その日のうちに、私は「時局収拾対策試案」というものを書きました。

その構想は、要するに、沖縄の戦況はもう末期的状態だし、戦争もいつ終るかわからない。また御前会議に付属した書類を見ると、日本の国力は、やがては実質上喪失してしまうような状況である。そして一方、アメリカの様子を見ると、その頃は毎晩のように飛行機が飛来して、ほとんど毎日一つ、二つの市が消されていくような状態で、おそらく秋ごろになれば、日本の市で無傷なものはなくなるのじゃないかと思われる。そうなると、何千万という日本の国民が、ほとんど衣食住を失い、大混乱に陥って、とうてい戦争などはできない状況になる。

そこでこの際、陛下のご親書を奉じて特使を仲介国に派遣し、いっきょに戦争を終らせるという方針を決めたらどうですか、という試案を作りまして、翌日、これを陛下にご覧にいれました。ところが、陛下はたいへんご機嫌うるわしく、「ぜひ至急に手をつけろ」というお言葉がありました。

■〝難物〟阿南陸相を説得

そして六月十三日、臨時議会が終って閣僚が参内してきたとき、まず米内さんに私の部屋へきてもらって、この試案を示し、どうだろうかという話をしたのです。だいたい米内さんは、一刻も早く戦争を収拾しなければいかんという意見を持っておられることを、私はかねがね知っておりましたので、きわめて率直に話ができたわけです。

そうしたら米内さんも、「もちろん賛成だ。ただしかし、いまもって鈴木総理の意向がはっきりしないので、閣内でその方向に動くことができず、ちゅうちょしているんだ」という話です。そこで私は「後刻、総理とも会ってよく話をするから、あなたもひとつ尽力していただきたい」ということで別れました。

総理は、その日の午後私のところにこられましたので、さっそくその話をしますと、総理も、「もちろん異存はない。ひとつ至急に手を打とうじゃないか」という答えでした。そのとき私は

「実は先刻、米内さんにお目にかかってこの話をしたところ、総理がまだなかなか強気だから、というような意向だった」といったところが、鈴木さんは笑い出されて、「いやそんなことを米内がいっていますか。実は私は、米内がまだそうとう強いんじゃないかと思って、心配しておったんだ」という話でした。とにかく私がその話をしたために、このご両所の意見が一致していることがわかったのは、たいへん幸せでありました。

それから十五日に、今度は東郷（茂徳）外務大臣に会って話をすると、「もちろん異存はありません。ただしかし、つい最近、御前会議であれだけ強いことを決定しているんだから、実は外務省としても動きようがないんだ」というのです。そこで私は、「いや、それだから私が、こうやって動いているんだ。その点はうまく行くように処置するから、あなたはとにかく、この方針がいいと思うなら、どんどん進めていただきたい」といって別れました。

そこで、私は、どうしても前の御前会議の〝呪縛〟を解きほぐさなければいかんと考えたのです。そして戦争指導会議の構成員をお召しいただいて、その席で陛下から、その旨のお言葉をいただこうと思って、陛下に申し上げましたら、「それはよかろう、やれ」という仰せでした。そこで政府と打ち合わせをして、六月二十二日、陛下のご親臨のもとに会議が開かれたわけです。

その席で、陛下から、「戦争の遂行についての指導方針はすでに前の御前会議で決定しているが、また一面、早く戦争を終結する和平の方針についても、従来の観念にとらわれず、充分研究するように」というお言葉があり、ここでいちおう、前の御前会議の事案とは別に動け、という

ご命令をいただいたわけであります。

ところで話は前後しますが、これより先に、戦争の早期終結について総理、海軍大臣、外務大臣とは話をしましたが、実はまだ阿南（惟幾）陸軍大臣とは話をしておりませんでした。それというのも、今まで話した方々とちがって、これはなかなかの難関でありますので、私も何となく出足が鈍ったわけです。

その阿南さんが、どういうわけか十八日になると、私に会いたいといってきたのです。私としては、ちょうどいいと思って、部屋にきてもらったところが、阿南さんはいきなり、「君は辞めるという話があるが、本当かね」というんです。これには私もびっくりしまして、「いやそんなことはない」と否定すると、「それなら結構だが、辞めちゃいかんよ」という。

しかし、私はハタと当惑いたしました。これから話そうという矢先に、「君辞めちゃいかんよ」なんていわれたので、どうもいいにくくなったわけです。だがこの機を逃してはと思ったので、「これから君に話そうと思うことは、いったらおそらく君は辞めろというだろう」というと、「いや、そんなことはない」という。

そこで私は、例の試案を示して、「僕ら素人だから詳しくはわからんが、もう戦局ははなはだ急迫しているから、この方針で行ったらどうだろう」と話しましたら、阿南さんは、「もっともだ、その通りなんだ。だから、戦争は一刻も早く止めなければならんと思うが、それには、いっぺん敵が上陸してくるのを叩き伏せた時のほうが、有利な条件で終結できるんじゃないか」とい

朝日新聞

るさ發渙詔大の結終爭戰

聖必　帝新

（上）昭和20年８月15日の朝日新聞
（下）焼土と化した東京（神田上空から）

う意見でした。

それで私は、「仄聞するところによると、まだ三千機ぐらいの特攻機が温存されていて、最後に使われるということも聞いているが、しかし、それはそれだけのことで、一回敵を追い払っても、重ねてやってきた時には、もう何もできないで、結局上陸されてしまうことになるだろう。それではいけないので、どうしても敵が今まさに戦線を展開しようと苦心している矢先に、こちらが何らかの手を打つべきじゃないか」と申しましたら、阿南さんはうなづいておりましたが「ああ、そういえば、今日のはその話かな」という。何かと聞きますと、「実は総理が、最高戦争指導会議の人たちにくるようにいってきているんだが、これかな」という話です。

私は、「おそらくそうだろう。だからこの

際はぜひ協力して、戦争を終結に導くような方法を考えてもらいたい」といって別れたのですが、私はそのときに、ほんとにホッとしました。もし、阿南さんが、私に会いたいといってこなかったら、その会議に阿南陸相だけがつんぼ桟敷におかれたまま出る結果となり、感情的にも非常にむずかしい問題があったろう。それで、私はその時に、ああ、やはり物事がすらすら行く時というのは、こんなものだな、と感じたものです。

ポツダム宣言受諾で粉糾

一方、こうした動きとは別に、おそらく五月十一日頃の相談で決まったことを実行するつもりだったのでしょうが、東郷外相は、広田弘毅さんをソビエト大使のマリクと接触させ、様子を探らせておりました。そこで、いよいよ戦争の早期終結という空気が出てきましたので、このほうの交渉をいちだんと進めて行ったのですが、なかなかつかまえどころのある話にはなりません。

そうこうするうち、六月の末には、ついに沖縄も陥落するという状況になりました。陛下もだんだんとご心配になってたしか七月七日、陛下から総理に、「あちらの腹を探る探るといっているようだが、しかし時機を失してはいけないから、いっそざっくばらんに、親書を持った特使を派遣して、仲介国に申し入れたらどうか」というお言葉がありました。総理も、まことにご英断であると思うからというので、急にこの話が進行し、近衛公爵をこれの特使にするというところ

まで決まったのです。ところが、外務省がソ連駐在の佐藤（尚武）大使にそれを訓令したところ、たまたまモロトフがポツダムの会合に出席するので、時間がないからポツダムから帰ってからということで、だんだんと引きづられて行ったわけです。

それで、いつソビエトからの返事がくるかと待っておりましたが、これがなかなかきません。そのうち、いわゆるポツダム宣言というものが出されてしまったわけです。そして八月六日には広島に原子爆弾が落ち、九日には、ソ連が参戦してきた。これは、ソ連のひどい裏切りですが、その時となっては、もう止むを得ません。

この九日に参内いたしますと、陛下から、「どういうふうにしたらいいと考えるか」というお話でしたので、私は、「もうこうなったら、ポツダム宣言を受諾して、急速に和平に向うほかはありません」と申し上げたら、陛下も、「その通りだと思うから、至急に総理とよく話し合うように」ということでした。私はただちに総理と会って、陛下の思し召しを伝え、至急に最高戦争指導会議と閣議を開いて、方針を固めて行こうということになりました。

それから閣議が開かれたのですが、最初は、四つばかり条件をつけた上で、これを受諾しようじゃないかという案が決められたのです。ところが、四つの条件を持ち出したら、恐らく向こうは、これを〃拒絶〃と見るのじゃないかということで、猛然と反対論が起りました。私のほうにも、重光（葵）前外務大臣とか、あるいは高松宮様あたりから、いろいろご注意があり、この際は、そういう条件などをつけないで行くという方針にしてもらいたい、ということでした。

また、その後閣議でも、いろいろ異論が出ている様子なので、私は、その状況を陛下に申し上げ、もし四つの条件でということできたならば、さらにもういっぺん反省をお求めになっていただこうという段取りを考えて、待ちかまえておりました。ところが幸いにして、総理の懸命な努力で、天皇統治の大権を認めるというだけの条件で受諾する、というところまで一度は漕ぎつけました。

しかし、結局これにも反対する者が出て、閣議はいつまでたってもまとまらない。そこで総理から、この上は陛下の思し召しを承るほかはないということなので、この九日の夜十一時五十分から翌十日の午前二時三十分ぐらいまで、ご文庫の防空壕の中で会議が開かれ、両方の意見を申し上げたのち、陛下のご聖断を仰いだわけです。その結果、陛下はやはり、「いろいろの議論はあるだろうが、この際自分は、明治天皇の三国干渉の際のお心持をしのび奉って外務大臣の案に賛成する」というお言葉がありまして、ここにその方針が決まり外務省は関係筋を通じて、連合国側にそれを申し入れたのです。

■われわれが死ねばすむ

これに対して、十二日に、アメリカの国務長官バーンズの回答がきました。ところが、これには、日本の国体である天皇統治の大権というものは、人民の自由意志によって決定する、と書い

てある。それを見て、いわゆる国体論者、右翼方面から猛烈な反対が起り、そんなことじゃ日本は亡国になる、もうこの戦争を止めるわけにはいかんという声がだんだん出てきました。

私は、バーンズの回答を奏上して帰ってきた東郷外務大臣に、「外務省としては、いったいどう考えているんだ」と聞いたら、「外務省はさしつかえないと思う」という返事です。私としても、これで腰くだけになるなら、むしろ初めから焼土作戦で行ったほうがはるかにいい、これはぜひとも押し切らねばいかんと思いまして、その日の夜九時半ごろ総理に会いました。

この時、総理は「実はたいへん困っているんだ」という話なので、私は「もうここまできた以上は、やり通さなければいかんと思う。もしそのために動乱が起ったとしても、われわれが数人殺されれば、それでことはすむ。ところが、これでもういっぺん戦争ということになれば、それこそ何千万の国民が殺されなければならん。この際ぜひやろうじゃないか」といいましたところ、総理も「やりましょう」といって、力強く賛成してくれました。

ところが、十三日の朝七時頃だったと思います。阿南陸軍大臣が私のところにとび込んできまして、「このままでは亡国だから、ぜひもういっぺんやりたい。やらせるように、ひとつ陛下に申し上げてほしい」というのです。私は、「それは駄目だ。この条件では亡国だというが、国はこれで助かるかも知れない。責任ある外務省が、これでさしつかえないというんだから、この言葉を信ずるほかないじゃないか。それに状況が客観的にどれだけ変化しているかというと、ひとつも変化していない。しかも日本の天皇が、これで受諾するとおっしゃって、また急にもういっ

ぺん戦をするぞとおっしゃったら、これでは天皇を、まるで気違いか、ばかにしてしまうようなものだから、私は賛成できん」といって話を終りました。これまで阿南さんと私の間は、ごく親しい仲でしたので、この時も、「まあ君の立場はよくわかっているよ」といって、最後には握手して別れたのですが、阿南さんは、その二日後とうとう自刃してしまったのであります。

■防空壕内で〝最後の断〟

そうこうするうち、十四日になると、アメリカの飛行機が、バーンズの回答をビラにして、全国にばらまいたのです。これは大変なことで、もしそういう交渉が行なわれ、あんな回答をよこしているということが津々浦々にいる軍隊に知れたら、もう収拾のつかん状態になります。

私は驚いて、すぐ陛下のところへ伺い、「もう一刻も早く、最後の断を下すほかはないと思います」と申し上げましたら、「自分もそう思うから、至急にそれを取りはからってくれ」との陛下のお言葉です。それで、ちょうど総理も参内してきましたので、相談したわけですが、この時総理に、「最高戦争指導会議はいつ開けますか」と聞いたところ、「実は、陸軍は午後一時まで待ってくれ、海軍のほうも必勝の作戦を考えているから少し待ってくれといっておる」といわれる。それで私は「それは大変だ、こんな時期に必勝の作戦なんてあるもんじゃない、こうなったら最高戦争指導会議と閣僚の全員を至急にお召しになって、陛下から最後のご決意をお示しいた

だくほか方法はないと思う」といったら、総理も、「いや、自分もそう思っているんだ」ということです。

そこでさっそく、陛下に状況をご説明申し上げ、十時半に、再びご文庫の防空壕で最高戦争指導会議と閣僚の会合が開かれたわけです。この席で陛下からは、「バーンズの回答を受諾して、戦争を終結しよう。ついては終戦の詔勅を書くように」とのお指図があり、ここで戦争の段階もいちおうケリがつく状況になりました。そして内閣は、すぐにその詔書案を起草し、鈴木総理は午後八時頃、それを持って参内、陛下のご允裁を得たわけであります。

ところがその日の夜、近衛師団の一部が叛乱を起し、陛下のご放送になる録音盤を奪おうと努力しました。だが、これはついに成功しませんで、八月十五日の正午に陛下のご放送は無事に行なわれまして、ここに戦争は終結したというのが、当時のいきさつであります。

木戸　幸一（きど・こういち）

旧侯爵・元貴族院議員。明治二十二年七月、〃維新の元勲〃木戸幸允の養嗣子・孝正の長男として生れる。大正四年、京大政治学科を卒業。その後、農商務省参事官、水産局北洋水産、工務局工務課長、商工省会計・文書課長、臨時産業合理局一部長、内大臣秘書官長、文部、厚生、内務各大臣を歴任。昭和十五年、内大臣に親任せらる。

戦後二十年の内幕

〃世界の驚異〃奇跡の復興をとげ、戦後経済の高度成長を日本にもたらしたものは何か

大宅　壮一

■奇跡ではない高度成長

実は一昨年（昭和四十一年）の六月、私は、一カ月ばかり東南アジアの国々を訪ねましたが、その前にもアジア、アフリカの新興国を回って歩いて、これらの国々の大統領とか首相、元首といった人たちと会ってまいりました。私が日本人だということがわかると、こういう人たちが、まず第一に、だれもが等しく発する質問は、「日本は、この百年の間に異常な進歩をとげた。つまり、有色人種のなかで白色人種に負けないような文化、文明をつくり上げた。これは日本民族だけである。いったいこういう奇跡が生まれた原因はどこにあるのか」ということで、それを説明してくれというわけです。

また聞くところによると、こういったアジア、アフリカの元首たちは、日本の明治維新について、自分ではやらなくても、部下に研究させて、そうとうの知識をもっている。維新の元勲の名前なんか知っているのが、何人かおります。

そこで私は、そういう質問を受けた時に、いつもこう返事をするわけです。

「なるほど日本は、明治以後百年間に、このようなすばらしい発展をとげた。だが問題は、明治以前の徳川三百年というものにある。この三百年に、日本はどういう状態にあったか。封建時代という形をとってはいるけれども、この間に日本は、一度も外国と戦争をしたこともなければ、外国に侵略されたこともない。つまり日本人が、日本人自身の手で、日本の国家、日本の民族を治めてきたという実績があったからこそ、明治以後百年間に、このような発展をとげることができたんだ」

たとえば、いま東京は、人口の点で世界一だといわれていますが、元禄時代の江戸も、当時世界最大の大都市であったロンドンよりも、人口が上回っていたし、市民の生活程度、文化の程度からいっても、けっしてロンドンに負けてはいなかった。こういう実績をもって、日本は開国を行ない、新しい国際社会に入ったのであります。だから、いまこのような発展をとげたといっても、けっして奇跡でもなんでもないわけです。これに反して、近頃独立しつつあるアジア、アフリカの国々は、独立したものの、そのあとがなかなかうまく行かない。どれもこれも、内乱、暴動を起し、革命、クーデターをくりかえしている。ということは、これらの新興国、これらの民

族は、いまだかつて自分の民族の手で、自分の民族を治めたという経験を持っていないからです。それが急に国際情勢の変化でもって独立したからといって、国家の統一を行ない、治安を守っていくということは、そう簡単にできるはずがないのです。そういう過去の歴史と伝統を考えなければならないということを私はいうのですが、これをいうと、彼らは非常に機嫌が悪いんです。だが現実に、これらの国々は、みんなどこもうまく行っていないんですね。

そして、これらの国々の指導原理になったものは何かといいますと、ほとんどみんな非同盟主義、中立主義というものです。つまりこの中立主義というのは、新興国の宗教みたいなものですが、最近になって、その教祖もしくは准教祖たちが、ほとんど姿を消して行った。インドのネールをはじめ、インドネシアのスカルノ、ガーナのエンクルマ、エジプトのナセルなどがそれで、死ぬか、大失敗をして、ほとんど実権を失いました。こういうふうに非同盟主義、中立主義の輝かしい指導者が、次々にみんな失脚したり、姿を消してしまったのであります。

これはどういうことかといいますと、これらの新興国、低開発国は、独立しても自力ではやって行けない。どうしても先進国の援助を受けなければならない。ところが、第二次世界大戦後のいわゆる先進国というのは、共産主義国と資本主義国——具体的にいうとアメリカ系とソ連系の二つに分かれ、その二つが激しく対立した。〝冷たい戦争〟と呼ばれているものがそれであります。そこで、一国の援助を受けるだけでは足りなくて、二国以上から、つまり敵対する両陣営から、最大限の援助を受けるにはどうすればいいかという、その戦略戦術から出たものが、非同盟

主義であり、中立主義だというふうに私は考えるのです。

だから、これらの二つの対立する勢力が、互いにいがみ合っているときは、これをうまく利用して、両方から援助を受けることができたんだけれども、近ごろになって、中共という妙なものが現われてきたため、ソ連とアメリカという二大勢力がどこかで手をつなぎ始めた。その結果、この二つの争いを利用して、両方から援助を受けるという戦略戦術がうまく行かなくなり、これらの新興国は事実上破産に近いような状態に、どれもこれも陥っているというのが現状です。そこで、アジアの問題については、われわれはもう少し新しい目で見て、新しい解釈を下さなければならないというふうに、私は考えております。

■〝二号〟の手放し方

これに対して、日本の場合は、戦後異常な発展をとげておりますが、この理由を探るには、今度の第二次世界大戦の果たした歴史的役割というものを考えねばならないと思います。要するにこの戦争の結果、これまでの人類の歴史にないような現象が起ってきたということです。

その第一は、戦争に敗けた国が、勝った国よりも、かえって経済の発展が早くて、国民生活の水準の上がり方が大きいという現象です。それから二番目は、植民地というものが、みんないっせいに独立してしまったということです。植民地というのは、国家にとっては、いわば二号さん

みたいなものでして、金と力のある強い男性は何人でも二号さん、三号さんを持つことができる。ところが問題は、そういうものを持つことよりも、そういうものを持ち切れなくなった時、つまり会社が左前になるとか、家がうるさくなったということで、二号、三号を手放さなければならなくなった時に、その手放し方が非常に難しいということです。

その手放し方が、とくにうまいのはイギリスであります。つまりイギリス系の植民地は、独立後においても比較的順調に育っているわけで、そのいちばんいい例はマレーシアです。要するにイギリスは、女をつくることもうまいが、女と別れることも水際立ってうまいということです。

ところが、フランスとかオランダ、ベルギーといった国々は、どっちかというとケチな国なんです。女と別れるとき、つかみ合いの喧嘩みたいになって、これもあれも俺が作ってやったんだとばかりに、旦那の方でカマドの灰までかっさらって帰るようなやり方をする。その結果、つかみあいの喧嘩となり、女からすっかり愛想をつかされ、顔中傷だらけになって、二度とあんな旦那とは口をきかんというような状態に陥るわけです。

これに反して、イギリスの場合を考えてみますと、どうしてもこの地域を手放さなければならんという場合、その最後の総督とか弁務官といわれる連中は、いち早くその形勢を察して、原住民の独立運動に若干首を突っ込み、その指導者と一緒になってワッショワッショやるんです。その結果、原住民の側からいうと、イギリス帝国主義は、多年にわたってわれわれを搾取したけれども、なかにはわれわれの味方もいる。独立したあと、せめてあなただけでも残って、われわれ

の成長を助けてくれ、ということになる。例えば、ガーナが独立した時も、最後の総督は、なんでもトラックに三杯ぐらいの餞別をもらったという話です。

こういうふうに、独立後、旧支配者側の人物が若干あとに残るということは、その国にとって一種の家庭教師のような役目をするわけです。というのは、これらの国が急に一人立ちをしてもうまく行かなくて、とかく暴走しがちだからです。そのいちばんいい例が、インドネシアのスカルノの場合で、自分の実力を考えないで暴走しすぎた結果、国全体が支離滅裂に陥ってしまったんです。そこへいくと、マレーシアなんか、比較的順調に育っていて、アジア、アフリカでは順調に行っている唯一の例といってもいいでしょう。このように、イギリスの役人が家庭教師のような形であとへ残るということは、同時にまた、イギリスの権益があとへ残るということであります。そういう意味でも、イギリス系の植民地は、独立後においても比較的にうまくいっているわけで、私がこういうことを書いたら、東京のイギリス大使館から使いがきて、そういうものの見方をするのは珍しい、一席設けるから、ひとつ話してくれといってきました。

それはともかく、こういうふうに植民地というものは、第二次大戦後、ほとんど意味をもたなくなってしまった。日本なんかの場合も、満州、朝鮮、台湾の一つでも、いまだに持っていたらどんなによかろうと考える人がいるんですが、これはとんでもない間違いです。こんなものを一つでも持っていようものなら、日本は今えらい目に会っているにちがいない。必ず独立運動、内乱、暴動が起って、これを鎮圧するために、日本から大量の軍隊を出して、大量の血を流し、莫

大な金を使って、なおかつこれらの地域は、必ず独立するのであります。だから日本が、敗戦の結果、強制的にこういうものを失ってしまったということは、お産のついでに盲腸の手術をやったようなもので、結果において、むしろ民族の健康のためによかったわけです。

■手持ち資源は無用

そして、またこういうこともいえる。そもそもこういう植民地を必要としたということは、手持ちの資源が必要だという理由からです。つまり、資源はなるべく手持ちがあった方がいい。自分の国、もしくは自分の支配できる地域にあった方がいいという考え方が、長いあいだ人類を支配していたわけです。ところが最近になって、資源という概念がすっかり変ってきた。

資源のなかでいちばん重要な資源は、エネルギー資源ですが、そのなかでも重要なものは、これまでは石炭だった。それがいまでは、石炭がすっかり斜陽化して、石油にとってかわられた。そのために、炭礦を国内や支配圏にたくさん持っている国が、かえって困っている。イギリスも、ベルギーも、そのいい例です。日本も、石炭山を三分の一ぐらいに減らしてしまったけれども、その残っている三分の一を維持して行くのに非常に困っておりまして、最近では、ああいう坐り込み戦術といったものまで現われているわけです。

このように資源というものは、ある時点では必要であったものでも、次の時点には、その必要

性や必要度が変ってくる。あらゆる必要な資源を全部その国のなかに抱え込んでいる場合はいいかもしれないが、そうでなければ、もっとも必要とする資源が変ってきた場合、むしろ資源を持たない方が便利なんです。たとえば日本は、石油資源をほとんど持っていないけれども、最近では、石油を輸出するような状態になっている。つまり、外国からどんどん原油を買って、ここで精製して、さらに外国に出している。鉄鋼の場合も同じです。

こうなると、問題は、手持ちの資源ということよりも、その資源をいかに加工し、いかにこれを利用するかということに、重点が移ってきている。ですから、資源そのものを獲得することよりも、その資源を利用することに長じた民族のほうが強いということになるわけです。

そのうえ、最近では、輸送機関がおそろしく発達して、五万トン、十万トンという船がどんどん動いている。出光などは、すでに二十万トンの船を作ったし、これをキッカケとして、三十万トン以上の船の引き合いが、いま三十ぐらい日本にきているそうですが、この輸送機関の発達という点からいっても、以前のように国内に資源を持つ必要がなくなってきた。

このようにして、第二次世界大戦後の日本には、いままでとはちがった面、ちがった要素が出てきている。その点を日本民族は最大限に利用して、世界の驚異といわれるような経済的発展を示すことができたんじゃないかと思います。

■〝国内植民地〟の解放

とくに戦後の日本についていうと、国外ばかりでなく、国内においてもまた、植民地の解放がなされたと思うんです。その国内の植民地とは何かというと、まず第一が農村であります。農村は、日本国内における後進地帯、低開発地帯で、ここには文化があまり届かなかった。それに農村の生活水準は非常に低くて、植民地的な状態にあった。そしてこの国内植民地が、日本の戦力の大きな源泉になったのです。

日本の軍隊の戦力の中心になったのは下士官です。この下士官はどこから出たかというと、ほとんど農村から出ています。貧農の子弟にとっては、ふだんの生活が余りにもみじめだったから一度軍隊に入ると、軍隊のほうがかえって楽しい。ふつうの者ならなるべく早くやめて帰りたいと思うところを、農村の青年は、徴兵期間が過ぎても、なおかつ現役志願をして、五年も十年もおって、これが下士官になる。この下士官が、日本の戦力の中心であって、いわば戦争の熟練工みたいなものです。そしてこの連中は、都会に出て工場に入ると、組合運動の指導者になり、これがまた左翼運動の熟練工にもなるわけですね。

その原因はなにかというと、やはり農村の貧困にある。場合によってはこれが右翼の源泉にもなる。昭和の初め頃起った日本の右翼革命、クーデターの計画は、みんなこの農村の貧困ということに原動力を見出しているんです。戦後にこれが、農地解放という形で解放された。つまり植民地解放が、国内においてなされたということです。

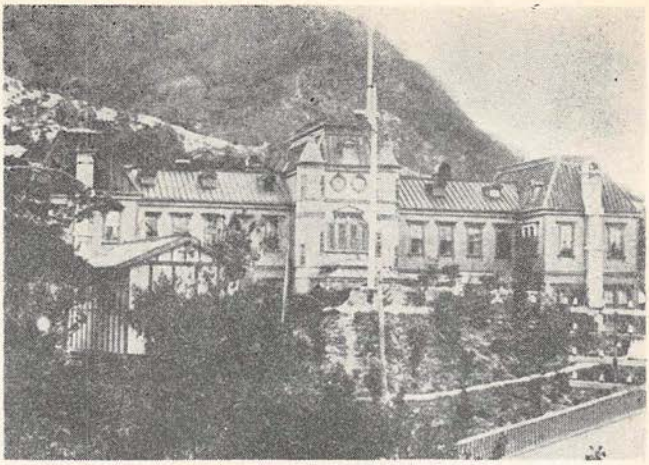
それからもう一つ、農村が国内における植民地であるとすれば、家庭の中にも植民地があっ

た。それは何かというと、女性であります。女性は、日本のこれまでの家庭においては、もっとも軽んじられていた。自分でもって、自分の欲望を満たすということのできないような状態で、長い間、家庭のなかの陽の当たらない場所におかれていた。いわば家庭のなかの後進地帯、低開発地帯だった。これがまた農村と同じように、戦後いっせいに解放されたわけです。

この二大植民地の解放が、結果において、思いがけない、いろんな効果をあげた。というのはこの層がどんどん職場に動員されて、自分で働き、自分で給料をとって、その金を自分の意思で使うという状態におかれたため、ここへいろんな商品がどっと流れ込んで行った。要するに、この層に購買力が発生したのです。

現在の日本の産業というのは、ソ連やアメリカなんかとちがって、国内に資源らしいものはなにもないので、ほとんど加工産業です。原料、材料、燃料をはじめ、特許もデザインも、なんでもかんでも外国から買ってきて、これを加工し、その大部分をまた外国に出す。そして、その加工料、手間賃でもって一億の国民を養って行くという立場におかれているのが現在の日本の状態ですが、その場合、国際的な競争に勝つためにはなるべく大きな施設を作って、経営を能率化して行かなければならない。つまり大量生産、大量消費ということを前提にしなければ、日本の産業は、国際的に立ち行かない状態なんです。

ところがいかにこの商品は売れるという見通しをつけても、それだけで、いきなり工場を拡張して、たくさんの従業員を雇い、新しい機械をどんどん取り入れて大量生産にとりかかっても、



韓国統監府　併合までの日本の植民地政策の中心であった

その商品がはたして外国で売れるかどうかということは疑問なわけです。そこでまず国内でテストしてみる必要がある。

この場合、国内で農村とか女性という広大な植民地が解放され、そこに大きな購買力が発生したということは、戦後の日本の産業発達の上に、大きな役割を果たしたことになる。つまりここでテストを終えて、これなら売れるという見通しのついたものを大量に生産して、外国にどんどん売り出すというようなことが、実際において可能になってきた。そこへもってきて、ラジオとかテレビとかいった大衆の消費的な欲望を強く刺戟するものが現われてきて、そういうものの力によって、大量生産、大量消費の時代に入ってきたわけです。

このように、日本は戦争に敗けた結果、予

想外に敗戦成金のような現象を生んだのです。

各世代の間で主導権争い

そこで問題になるのは、これからの日本をどういう方向に持って行くかということですね。

現在の日本の人口を構成しているものは、年令的にいうと、まず第一がいわゆる戦前派といわれる人たちで、そのなかでも、明治、大正時代に生れて、人間形成のなされた人たちです。だいたいその明治、大正というのは、国家が「富国強兵」というスローガンのもとに動いてきたのでありますから、当然そのなかの人間も、ほとんど「富国強兵」というもので教育され、訓練されてきている。よく明治の人間は筋金が通っているといわれるのも、国家そのものに、「富国強兵」というバックボーンがあって、しかも戦争をすれば、必ず勝ってきたからです。

これまで日本が戦った戦争というものを見ると、例えば日清戦争は、野球でいうと一回戦、日露戦争が二回戦、第一次世界大戦が三回戦で、第二次世界大戦がいわば四回戦です。この四回戦は、地球全体のスケールからいうと、準決勝みたいなもので、これで日本とドイツが負けて、アメリカとソ連が決勝に残ったという形になっている。そして日本は負けた結果、さっきいったような現象が起ってきて、ここにあらゆる面で性格の変った、新しい日本が生れてきたわけです。

ところがいわゆる戦前派の、明治、大正時代に人間形成のできた人たちには、古い日本に対す

る憧れといったようなものが残っていて、もういっぺん戦前のような日本にしたいという気持も、そうとう強い。

これに対して、いわゆる戦中派といわれる人たちは、大正の末期から昭和にかけて生れ、人間形成ができた。この年配の人たちは、ほとんど大部分が戦争にもっていかれ、たいていは弾丸の代りに使われて、死んで行った。その中で戦争には使いものにならない人たち、あるいは幸運な人たちがあとへ残ったわけで、そういう面から見ると、現在四十前後の戦中派といわれている人たちは、一種のローズものみたいなものですね。だから職場においても、他のあらゆる面においても、非常に弱い。戦前派の明治、大正人と、戦後派と称する新しい教育を受けた連中との間にはさまって、肩身の狭い思いをしている。だから戦中派というのは、いわば戦争の最大の被害者層ともいえます。

それからいわゆる戦後派というのは、つまり戦後に人間形成ができた人たちですが、近ごろでは、このセン後という意味が若干変ってきたといわれます。というのは、セン後のセンという字が、〃戦〃ではなくて、赤線の〃線〃だというわけです。売春防止法が布かれてから人間形成のできたものと、布かれる前にできたものとでは、頭の構造が非常にちがうんですね。つまり売春時代に人間形成のできたものは、女性というものは金を出して買うものだというふうに考えたが、そのあとのものは、女性というものはただで手に入れるものだと考えている。

その上に最近は、戦無派というのが出てきた。これは戦争とぜんぜん無関係の連中で、人間形

成が完全に戦後にできて、戦争というものがどんなものかという経験や実感を持っていない。そしてほかにエネルギーのはけ口があまりない。いま大学などで、大いに暴れている連中は、ほとんどがこの戦無派です。

こういう三つの、あるいは見方によっては四つ、五つの断層によって、現在の日本人は構成されているわけですが、これらの間に、さかんに日本という船の舵のとり合いが行なわれている。つまり、日本をどっちに引張って行くかということで、いたるところで争いが起っているわけで、これが戦後二十年の、日本の実態ではないかと思うんです。

大宅　壮一（おおや・そういち）

明治三十三年生れ。東大社会学科中退、新潮社編集部嘱託、毎日新聞社友、明大講師、満鉄弘報課嘱託などを経て、昭和十五年理研科学映画常務兼製作部長となり、さらに満州映画協会参事、ジャワ映画公社理事長を歴任。戦後は新聞、雑誌などの政治社会時評、文芸評論などで活躍し、現代日本のジャーナリズムでは大御所的存在。「世界の裏街道を行く」「日本の裏街道を行く」「炎は流れる」など多数の著書があるほか、〃マスコミ塾〃をつくってジャーナリストの養成に一役買っている。

2

日本百年の回顧

三代宮廷秘話

日本に栄光の時代を築いた明治天皇から学者今上天皇まで、皇室三代の知られざる生活模様を公開

入江　相政

■和歌の記録保持者

「三代宮廷秘話」という題をいただきましたが、明治天皇のことと、貞明皇后のこと、それに今の陛下の三代にわたって、お話し申し上げたいと存じます。

明治天皇につきましては、皆さんも先刻ご承知でしょうから、表向きのことについては別に申し上げる必要もありませんので、いくらか裏話めいたことをご紹介してみようかと思います。

これは、裏話というほどのことでもありませんが、明治天皇は、ご承知のように、歌がたいそうお好きで、ご一代の間に九万三千首およみになりましたが、これは、日本の和歌史の上でのレコード・ホルダーです。その次はおそらく昭憲皇太后の三万首、この両陛下で、第一位と二位を

占めていらっしゃるわけです。その他にもだいぶ歌の数の多い人もおりますけれど、九万三千首には遠くおよびません。斎藤茂吉なども、一万五千首ぐらいだったと思います。べつに、数が多いから良いということでもありませんが……。

また、実にふしぎなことには、だんだん晩年になるにしたがってたくさんお詠みになるようになったということです。明治三十七年といいますと、日露戦争に踏み切るかどうかで、お正月から御前会議が開かれたりしていますので、まる一年戦争にあけくれしていたのですが、この年が一ばん多くて、七千五百二十六首、毎日平均二十首強、お詠みになった勘定になります。いったい、いつお詠みになったのだろうかと思われるようなものですが、それには、こんなエピソードがございます。

そもそも明治天皇というお方は、非常にこわい方だったらしくて、閣僚などとお話をなさる時陛下は、しきりに掛けろとおっしゃるのだけど、誰もおそろしくて坐れない。腰かけて、ゆっくりお話したのは、伊藤博文と、山県有朋が少しばかりできただけだったと伝えられております。その頃、陛下のお側で、華族の子弟がボーイのようにご用をしていました。その人から、後に私が聞いた話ですが、ある時、その人が何か陛下のお気に召さないことをしまして、大変叱られたのだそうです。まだ子供でしたが、どんな悪いことをしたのか、勤めぶりが悪かったのか、陛下は、お怒りになって「そこに立っていろ」とおっしゃった。

そして、その子供が立たされております間、陛下は、内閣や陸海軍省などから上奏書類を入れ

て届けられた大きな封筒をお広げになりまして、そこに薄墨で歌をお書きになっている。どんどんお詠みになっているので、もういいのかと思って、ちょっと動くと、「動いてはいかん！」とおっしゃって、また続けていらっしゃる。そのようにして一日二十首もおできになったのかも知れません。

その時の人は私の先輩で、先年亡くなりましたが、「あなたがもっといろいろな悪いことをしてくれたら、明治天皇の記録はどんどんふえたでしょうに」といったりしたものでございます。

■中山一位局が大の苦手

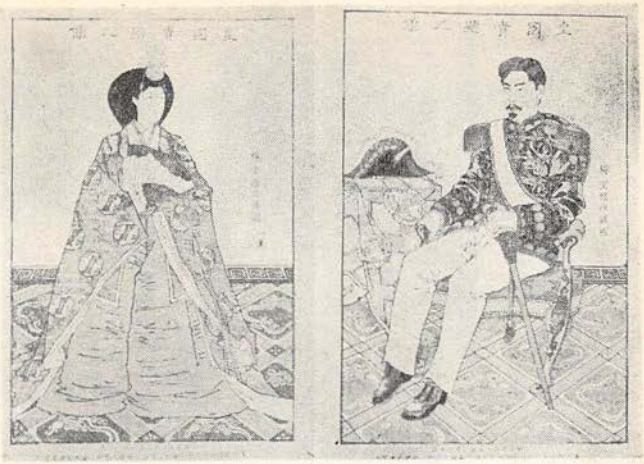
いま御所で歌会始めというのがございますが、これは、明治七年に明治天皇がおはじめになったものです。最近は、盗作などという、あまり良くないことで有名になりましたが、私が寄席に行きましたところ「宮中の歌会始めにさえ盗作があり……」といった、のんき節のようなものまでできていたりして、びっくりしました。そのせいというのでもないでしょうが、このごろはたくさん歌が集まるようになりました。

それはさておき、西南戦争の前に「一般の詠進歌をどんどん出すように」とおっしゃって、明治十二年からは、そのうちのいいものを予選歌とするようにお定めになったので、それをずっと今日まで踏襲してきているわけです。今考えてみましても、明治七年に一般の詠進をというの

は、大変なことだと思いますが、一方、明治時代というのは、宮中と国民の間が、こまやかに結びつけられていたようです。その後だんだん窮屈な時代になってきて、今日のようなことになってしまったのです。

明治天皇はまた、非常におもしろいところがおありになりましたので、私がおもしろいと思ったお話を二つしたいと思います。その一つは侍従の話で、私が明治天皇の侍従だったら、たちまちそういう目にあわされたろうと思いますが、侍従がどうも怠けていていかんとお思いになると、大きなブロンズの唐獅子の像の引っ越しをお命じになる。そこに立っている唐獅子を向こうにやるわけです。またしばらくして、怠け癖がはじまり「どうもいかん」ということになると、また「唐獅子を向こうに動かせ……」というふうに、唐獅子が実に頻繁に引っ越したのだそうです。それで、表御座所の縁の下に、丸たん棒と縄など、唐獅子の引っ越し用の道具が入れてあったといいますが、それも、昭和二十年にみんな焼けてしまいました。唐獅子の方は、明治天皇が最後の引っ越しをお命じになったそのままの場所に、大正・昭和と立ち続けていたのですが、最近、新宮殿造営のために、明治天皇のご命令に関係なく引っ越しましたのが、ちょっと惜しいように思います。

それから、もうひとつおもしろいのは、そのように非常に威厳がおありだった明治天皇にも、苦手があったということです。それは、ご生母の中山一位局で、このお方はまたとてもこわかったらしいので、明治天皇も、二目も三目も、それどころか井目ぐらいおいていらした。それで、



皇国貴顕之像　（右）明治天皇　（左）昭憲皇太后

「中山一位局が上りました」と申し上げると「今ちょっと忙しいから待たしておけ」とかおっしゃる。どう考えてもあまりお忙しいはずはないのですけれども、なるべく難を避けて先へ延ばそうとなさるのです。

一位局がなにをおっしゃるのかわかりませんが、おそらく、明治天皇はお酒がとてもお好きだったので「大事なお身体にそれはよくない」というようなことでもおっしゃるのでしょう。「また、それをいわれてはかなわない」というので、一寸延ばしに待たしておきになるらしいのです。日露戦争に勝って、世界の一等国になった日本で、明治天皇も五十いくつにおなりで、押しも押されもせぬお立場であるのに、こんな苦手がおありになったというのは、なんともこたえられないようなことです。

■救ライ運動にご尽力

次は貞明皇后に話をうつしますが、いまの明治天皇のことは、先輩などから聞き伝えたことばかりですが、貞明皇后は、何べんも御前に出ていろいろお話を承ったりいたしました。また、こちらの話もよく聞いて下さる。世間でよくいう聞き上手でいらっしゃったので、あまりおしゃべりをしないで帰ってこようと思うのですが、ついみんなしゃべってしまうというような工合でございました。私自身のレコードでは、貞明皇后さまの御前に三時間半いたことがありましたが、「暗くなってまいりましたので、この辺で失礼致します」と申し上げると「まあ、もう夜でなにも用がないからいいじゃないか」とおっしゃって下さったのです。ところが、そんなに長く御前にいながら、帰りがけに「ああ今度いつここに出られるだろうか」と思ったりするのです。ほんとうに、いかに心がひかれたかがわかると思います。

貞明皇后さまは、夜お休みになるのが非常に遅く、一時とか二時とかいう時まで起きていらっしゃる。夜ふかしでは有名だったのです。それでは、いったい何をして遅くまで起きてらしたのかと女官さんたちに聞きましたら、ご自身で鶏をお飼いになっていらして、その鶏の生んだ卵に一つ一つ、何年何月何日とゴム印をお押しになっていらっしゃる。そして「明日はだれがくるから、この新しい卵を食べてもらいましょう」とおっしゃって、卵を並べ、モミガラをお入れにな

るのですが、あんまり多く入れると日付が見えなくなるので、多からず、少なからず……ということなどをやっていらしたようです。それはつまらないことのようですが、そういう精魂を傾けて、その人になにか報いようというお気持の表われだと思います。

こまた勤労奉仕団にお会いになる時には、分県地図をお持ちになっていて、明日は何県何郡何村だというと、それをすっかりお調べになった。そして「ああ、こんな山のなかからきてくれる」とおっしゃって印をなさる。翌日、勤労奉仕の人にお会いになる時に「大変な山のなかのようだが、どうして出てきましたか」というように、いろいろお尋ねになったそうです。

この、いちいち印をなさった地図は、貴重なものだと思われますので、京都の東山御文庫というところに、ご歴代の方々がお書きになったものなどと一緒に納めてございます。

さらに貞明皇后は、救癩運動を一所懸命おやりになりましたが、そのような時もふつうの役人ふうのやり方ではなくて、いよいよお気持がまとまった時に、渋沢栄一さんをお招びになって、「自分はこういうことを考えているのだけれども、なんとか一肌脱いでくれないか」とおっしゃった。それで渋沢さんが非常に驚いて一所懸命やって、ああいう盛り上りがあったのだそうです。

皇后陛下でいらした頃には、世界中の外交官にもお会いになったわけですが、それらの外交官たちは「日本にくると、あの皇后陛下にお目にかかれる。それが非常にインタレスティングだ」といったそうです。また皇后陛下も日本の文化の粋を見てもらおうということで、ずいぶん骨をお折りになったそうです。細かいところにまで良いセンスをお持ちだったようですが、その一つ

の例として、貞明皇后に仕えておりました私の父から、こんな話を聞いております。

ある時、ご陪食やなにかの時に使うボンボン入れの意匠を、ご自分でお考えになって「今度は鼓でやってみよう」とおっしゃった。父は絵心がありましたので、図案をかいてごらんに入れたところ、それで良いとおっしゃって、やがて見本ができてきました。鼓の調緒は朱でございますから、朱の紐がついてきた。すると、これをじっと見ていらしたが「ほんとうは、調緒は朱だけれど、銀に朱だと強くなるから、これは桃色にしたらどうか」とおっしゃった。それで桃色の調緒のボンボン入れができたのだそうですが、そういうこまかいところにまで気をつけていらした方で、なんとも忘れられないお方でいらっしゃいました。

大変なご旅行の〝行事〟

さていよいよ今度は、今の陛下のところに移りますが、陛下についてはよくご存知だと思います。とにかく、精魂傾けてというご性格は、皇室の皆さん、よく似ていらっしゃいます。

昭和二十四年でございましたが、九州七県を全部一ぺんにお回りになりましたので、大変なご日程になりました。朝八時半ごろお発ちになって、夕方六時ごろお宿にお着きになるという強行軍になりました。それにわれわれの旅行とは違って、陛下のまわりにはたくさん人が集まってまいりますから、汽車の中がたいへんな行事になります。こちら側の窓に立っていらして、人が尽

きると、反対側にもいやしないかと気を配っていらっしゃる。そこで「こちらに現われたら申し上げますから、それまでどうぞそちらにおいで下さいませ」と申し上げる。そこで、こっちにだいぶ人のかたまりが出てくると、今度は「こちら側におりますから……」というわけで、急いでこちら側にかけておいでになる。ふつうの旅行者には、そういうことはない。それで九州の旅を二十七日もお続けになったわけです。

その間のお食事がまた、大変な騒ぎでございまして、汽車の中で、お弁当を召し上っている時に駅に着いたりすると工合が悪いものですから、少し早くても、お立ち寄り先で召上れるように計画しました。ところが、ただ一日だけどうしても都合がつかない。いろいろ考えましたが、打合せで乗っていた汽車が、大変な山の中を通ったので、国鉄や県の人に聞いてみたところ、「この辺は誰もいやしない」ということなので「それでは、この日は汽車の中で召し上っていただこう」ということになりました。その前日に、陛下に申し上げたら「それは困る」とおっしゃる。しかし、困るとおっしゃられても仕方がない。やがてお召列車がずっと山のなかにわけ入ってまいりましたので、これは大丈夫だと陛下にお弁当をさし上げて、私は隣りの部屋にいって、自分の弁当を食べました。出てみると、陛下はもうおすみになっていてなにもおっしゃらないので、やっぱり工合よくいったのだと思っておりました。

ところが翌々朝の新聞に投書している人がいまして「陛下がお通りになるのをお迎えしていたら、陛下はどうやらお弁当を召し上っていたらしく、私たちに気がおつきになると、左手にナプ

キン右手におはしをお持ちになって出てきて下さった」とある。そういうことがよく起りますので、陛下が「明日は汽車か」とお困りになったのですが、まことにお気の毒でございました。

しかし、これなども、われわれにいわせれば、ただ会釈しておおきになればよいところだろうけれど、それを、やはり出なければすまない、というところが陛下の陛下らしいところです。自動車などでいらっしゃる場合も何時間もソフトをお取りになって右手をあげていらっしゃる。右手が疲れると左手をおあげになるというふうに全力をあげていらっしゃるわけです。「まあ、これでいいや」ということが、ぜんぜんおできにならない。

■テレビもご愛好

この頃は、だんだん忙しくおなりになりまして、朝から晩までいろいろな行事がありますが、たとえば、外国人にお会いになる度数がだんだん多くなった。それも、お誕生日とか、園遊会などのような時に、まとめてたくさんの人にお会いになるのを除いて、多い年には一年に三百人からになっております。

そして、一所懸命でお会いになって下さるのが、向うにも通じるらしいのです。ドイツの高分子化学の学者でノーベル賞を受けた人ですが、その人にお会いになった時、いろいろ研究の労苦をお察しになって、細かくお尋ねになったらしいのです。それをその人が「わが研究の思い出」

という本に書いているのをみると、「自分の学究としての労苦をほんとうに察して下さった最大の方は、日本の天皇陛下である」といっています。陛下はご承知のように生物学を研究していらっしゃるわけですが、いつも「自分は素人だから」とおっしゃいますが、とにかく学問研究の熱意にかけては、非常に強いものをもっていらっしゃいます。

たとえばハイドロゾアという、ごく下等な動物の分類が陛下のライフ・ワークで、今年その一部が発表されましたが、土曜日など、何も行事がなければ、午前も午後も御研究室にいらしゃいます。そうして終日ご研究になる。ほんとうは夜までなさりたいのでしょうが、お相手をする人のことも考えて夕方おやめになるわけです。そこから、御所にお帰りになって、上奏書類がきていたりすると、それを持って、御前に出るのですが、陛下は早くももう、ほかの研究をなさっていらっしゃるのです。

いつ御前に出ても、たいてい勉強していらっしゃる。そして、実にふしぎなことには、それほど勉強していらしても、芸術院賞の受賞式とか、園遊会の時などに、いろいろ芸能人にお会いになりますと「この間芝居を見たよ」などとおっしゃっている。森繁にお会いになれば「七人の孫を見たよ」などとおっしゃったり、エノケンを園遊会にお招きになった時には、「この頃、ちっともテレビに出ないじゃないか」などとおっしゃる。

要するに、いろいろな方面の国民の活動に接しなければ申しわけない、というお気持で苦心していらっしゃるのだと思います。

そのように何に対しても非常に精魂を傾けて、いろいろまじめにやって下さるわけだけど、決して固苦しい感じはなく、たいへんおもしろい方で、人には寛大で、ご自分自身はしょっちゅう責めていらっしゃるようなところが、おありになります。

幸いに非常にご健康で、老人性の疾患などはなにもおありにならないそうで、いつまでもご丈夫でいて下さることが、すなわち日本のしあわせだと思っております。

入江　相政（いりえ・すけまさ）

侍従。明治三十八年六月、子爵入江為守の三男に生れる。昭和四年東大国文科卒業。学習院講師、教授を歴任。同九年、侍従を拝命。著書に随筆集「侍従とパイプ」「城の中」「天皇さまの還歴」「濠端随筆」「今日の風」などがある。

三代宰相論

明治・大正・昭和の日本近代史を
身命かけて闘い築いた政治家群像

御手洗辰雄

■鍛え上げられた志士たち

明治十八年に内閣制度ができましてから、今年（昭和四十二年）まで八十二年間に、総理大臣が三十九人代わっております。初代は伊藤博文で、通説は三十八人とされていますが、よく調べてみますと、三条公が二カ月ぐらいつなぎをやっている。ですからこれを入れると三十九人になるのです。

明治が八人、大正が八人、それから昭和になって二十三人で合計三十九人。この三代の宰相たちを比べてみて、共通の時代の変化とか特徴を考えてみますと、まず明治の人はなんといったって〝創業者〟、非常に気迫に満ちた、共通の理想をもって突進したという人々です。そこに行く

と大正の人たちは、やはり普通の二代目と同じで、守成の人々という点で八人ともだいたい似ている。昭和になりますと、二十三人。残念ですが二、三人を除きますと『売家と唐様で書く三代目』で、とかく三代目というのは、どうも仕方がありません。気迫もなく、理想もなく、数人の例外を除きますと、みんななっておらん。

はなはだしいのは、「俺がいったい総理大臣になったのか」と、ほっぺたをつねってみるような人すらも、ちょうど昭和十年から二十年頃までの間には何人か続いた。それが、日本をああいうばかばかしいことに追いやったひとつの大きな理由であったと思うのです。もし明治時代の宰相のなかで、一人か二人でもあのころに生きていて、局に当ることができたら、あんなばかなことは起らなかったのではないかと思われます。

明治の宰相を見てみますと、西園寺さんと三条さんが身分の高いお公家であった以外、ほかの七人というのは、最下級の武士か、あるいは武士のうちにも入れなかったかも知れないような人もいる。しかしいずれも、古い儒教の道徳で鍛えあげられており、しかも当時の風潮から申しまして、日本をどうにかしなければならんという青年時代の志、命を賭けて奔走した志士としての志を宰相となってももち続けていた。これは公家であると足軽出身であるとを問わず共通しています。

むろん、個人的に見れば、酔っぱらって奥さんを刀で切り殺したり、そこら中に子供を作ったりする不品行、不道徳の人たちもいましたが、皆、要するに経国済民の志士、ひとつの共通の理

想をもっておりました。これはやはり、明治維新前後の日本の国情がそうしたのでありましょう。

当時は、帝国主義が東へ東へと伸びていて、最後に残された日本にもその爪がかかった。これは幕末の歴史を読んでみるとよくわかることですけれど、幸いに当時の志士たちが日本を守った。その志士たちが長じて総理大臣になったのですから、明治の新政において、よく開国進取という言葉がいわれますが、同時に富国強兵がこの人たちの共通目標だった。まず国を富まして、それから国防を充実する。それでなければ、とても国がもたない。西欧帝国主義への抵抗です。

この共通の理想でも、やり方、順序について意見が分れた。そこで、その結果が西南戦争その他の内乱にまで発展したのです。やり方は決してほめるわけではありませんが、そういう理想、主張について国をどうしようかという志においては、ほんとうに命がけでやった。これが、大正にも昭和にもみられない大きな違いだと思います。

■本当に命がけだった

もう一つ、明治の八人の宰相、「俺が総理大臣になりたい」と思ってなった人なぞ一人もいない。順序でなったという人もあったかも知れませんが、だいたいはやむを得ない、今日を救うためには……「乃公出でずんば」というので、回りから押しあげられ宰相になった。だから、自分の地位に恋々とするなんていうものは一人もありません。これは実にあっさりしたものでした。

これを物語る話のひとつですが、昭和の政治家としては、ちょっと異色の人だった安達謙蔵さんに直接聞いた話があります。昭和六年の政変（若槻内閣）の時のことです。安達内相が西園寺公の所で話をしてきた日、私が「いったい西園寺さんはこの際どうしろといわれましたか」と安達さんに聞いたのです。すると安達さんは「いや、今のことは、とてもおっしゃる人じゃない。ただこういうことをいったんだ。『自分が総理大臣になる時（明治三十九年）に、先輩の伊藤公から戒められたことがある。お前、今、総理大臣になろうとしているんだが何をいったいやるんだ。この時局においてなにが必要なのか、それをまず決め、党にはかって決定しろ、そこでその目標に向かって直進してほかのことを考えちゃいけない。もしそれが成功したらすぐやめろ。失敗してもやめるんだ。総理大臣とはそういうものだと戒められたが、残念ながら、わたしはどうも進退がまことに下手くそで、失敗ばかりしては汚名を残した』こういうことを西園寺公がいわれた」という。

いったい人間自殺することと辞職することを人に相談するなんて馬鹿があるものじゃない。西園寺さんが馬鹿といったわけじゃないでしょうが「今ごろ私のところにやめたものでしょうか、どうしたものでしょうかなんて聞かれたって、私は返事ができないよ」といわれたとのことでした。こういうことを見ましても、明治の宰相というのは、どんな志を持ち決意をもって局に当っていたか、非常によくわかる気がするのです。

明治の宰相にはいろいろ偉い人がおりますが、その筆頭はもちろん初代の伊藤公でしょう。そ

の伊藤公が宰相に関して論じたものがあります。これは明治二十二年に、全国府県議長会議で演説したものですが「宰相たるものは、君主の任命するところにして、いっさい他の干渉を許さざるものである。したがって宰相たるものは、国政の全部について、君主に対し、その責任を負うべきものである」といっている。今は、この君主のかわりに国会をおきかえるとぴったりあてはまる。そんな心がけのありそうな総理大臣、また総理大臣候補者は、残念ながら昭和には二、三人を除いて見出すことはできません。これが間違いのもとだろうと思うのです。

こういった伊藤公ですから、はじめはもちろん超然内閣論者であったのですが、明治二十四年の松方内閣の時の議会の騒ぎをみますと、これはいかん、とても超然内閣などといっていられない、いやしくも国会を開いた上は、やはり政党の力によってやるべきだ、というふうに考えを変えています。

その時は、政党を作るという議論は、まだ時期が熟していなかったが、この素志をどうしても捨てず、ついに明治三十三年政友会を創立した。そのために、当時は元老の筆頭であり枢密院議長でありましたが、これをふり捨てたのです。この政党を作る決心をすると、急に内大臣府に、元老の仲間、山県、松方、井上などを集めてその決意を告げた。その時、全元老が反対しました。親友中の親友、井上侯爵も反対。なかんずくひどく反対したのは山県公で「君の議論は、乱臣賊子に通ずるものだ」とまでいった。山県公から見れば、政党を作って自分が総裁になり、内閣を作るなんて、乱臣賊子、陛下の大権を犯すものと思ったのでしょう。ともかく、もう二十年

早ければ内乱が起きただろうと思いますが、そのくらいひどい、命がけの激論を戦わして政友会を創立し、みずから総裁になった。

■矢面に立って〝反戦論〟

また「伊藤公伝」によりますと、その中の直話として憲法が制定された時、こんなことをいっています。「まあこれで、自由過激の議論を用い、世の中を乱そうとする人々に対し、これを克服する道理と手段を獲得できた。よって、もう自分としても死所を得たのだからいつ殺されてもよろしい」まったく驚きます。憲法を作り上げて新日本を作れば、反対者に殺されてもいいという決意をもって作っている。それにくらべ昭和敗戦後の憲法はどうでしょう。アメリカ人に原案を作られてほとんどそのまま。志は天地の差です。

さて伊藤公が日露戦争に最後まで反対論を唱えたことはご承知の通りです。しかし、ほんとうに反対だったかというとそうではない。戦争論者を激化させ、国民の志気を高揚して、これを挙国一致にもっていくためには、何人かの反戦論者がいなくちゃならない。自分がその矢面にたって国民の憎しみを一身に引き受けよう、という命がけの決意だったのです。

最後に、二月六日の夜明け、陛下が急に伊藤公をお召しになって「いよいよ、戦争するほかはない、お前の決心はどうか」とおっしゃると、伊藤公は「今日になってはもう仕方ありません。

私も開戦にご同意申し上げます。つきましては、この戦争は、五分に戦えればよい方で、ひょっとすると敗けるかもしれません、陛下としても容易ならんご決心がいりますぞ。私も、もしわが艦隊がやぶれて、敵が上陸してくるようなことになりますれば、およばずながら、老いたりといえども、錆びた鉄砲の一挺もいただいて、奇兵隊の昔にかえり故郷長州の海岸を守ります」というすさまじい決心を申し上げた。

伊藤公はこのようにして、およそ四十年間、内閣制度を作ったり、憲法を設定したり、あるいは条約の改正にと終始一貫努力をしていた。そして明治四十三年に殺される一年前の演説で「近来、大和民族は、なにか特別な民族のように思いあがって、他の国民の正当な権利を無視し、傍若無人な振舞いが多くなってきておる。こういう考え方は、国を誤ること火を見るよりも明らかである。驕るものは久しからず、喬木風多しというたとえは、今日の国民がよく考えなければならないことである。国を滅ぼすのは、人に滅ぼされるものではなくて、みずから滅びるということをよく戒心せよ」といっている。

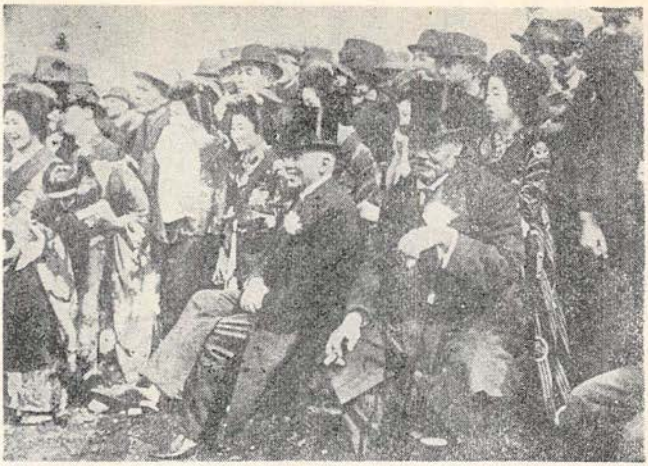
伊藤公という人はこういう人でした。こういう人たちがいたので、明治の日本が立派な進歩をとげたのは、あたり前だと思うのです。その他どの宰相を見ても、それぞれ特徴がありますが明治時代は伊藤公を代表にして、ほんの寸感を申しあげたわけです。

■信念で進退した人々

大正時代は、守成の時代ですが、代表者は原敬さんだといってよいでしょう。山本権兵衛伯、加藤高明伯爵などもそうとうな人材だったと思います。これらの総理大臣を見ますと、先輩の苦心をよく知っている。青年時代に見てきた先輩の志をついで、おのれを慎しんでいる。自分自身というより、日本人として国を慎しみ、伊藤公のいうように驕りを非常に押えた考え方が、大正時代に共通している。そして、寺内、清浦という特別の人がおりましたが、これを除くと他の人人はなんとかして、藩閥や、軍閥の勢力を打倒して政党内閣を確立したいというのが、共通の目標だった。そのために苦しみ、また責任感も非常に強かった。それはいろいろなことに現われましたが、加藤高明さんについて、ちょっとエピソードを申し上げてみます。

普通選挙法問題での〃独立の生計〃論争の時です。野党三派が共通の普選案を出そうとしたが、加藤さんは「独立の生計が営めんような国民に選挙権を与えてどうするんだ」といってきかない。しかし、三派がやかましくなって非常にもめたので、憲政会の幹部たちもそれに同意して加藤さんの同意をせまった。ところがやはり〃独立の生計を営む帝国臣民たる男子〃ということで、どうしても譲らない。するとある日の夜、加藤さんは麹町二番町の屋敷にお医者を呼び、その後、急に幹部会を開いて、「医者に見せたら、俺は体が悪いので総裁をやめる」といった。本当の理由は体じゃない。〃独立の生計〃という自分の意見がいれらないものだから、「そんな普選案は危険だ、そんなことさせてはいかん」という信念から出た切り札だったのです。

皆はビックリした。加藤さんにやめられたら憲政会はつぶれてしまうのです。金の道がなくな



政党内閣成立祝賀会の原敬首相(左)　大正7.東京芝公園

るんですから。そこで、われわれも総裁に同意しますということになった。この気迫、この信念の固さ、総理大臣はこうでなければいけない。近頃のように、ちょっと手紙でももらうと、すぐにあれやれ、これやれとまるで芸人のような総理大臣じゃだめです。

原さんは、外務省系官僚の出身。妥協の政治家といわれて、いろいろ批判を受けていましたが、それはやはり政党政治を確立するまでの足固めの苦心なのでした。山県公などに対しては、必要以上に忍耐を重ねて、明治三十三年から大正七年まで、二十二年間下積み生活にあまんじた。ずいぶんつらかったろうと思います。そしてひとたび政権を取ると、すばらしいことをやったのです。

内務大臣時代にやった大きなものを拾ってみると、まず郡制の廃止をした。当時、内務

省が、日本の政治を押えており、県庁、郡役所、町村長を押え、警察部をもって二重に押えていた。そのうちの郡役所を廃止したわけです。これはたびたびやろうとして貴族院官僚や山県さんに反対されてできなかった。原さんは、これに政治生命を賭すとまでいって、大正八年、自分の内閣の時に廃止したのですが、これは日本の自治制度の発展と官僚退治にとって、とても大きなことでした。

■読書家だった原敬

その次が地方官の大更迭。古い官僚を引退させやめさせて新人役人を入れ、文官任用など大改正をやっています。それらの中で、一番大きなことは、山本内閣の内務大臣として軍部大臣の現役制を廃止して、予備、後備軍人までを任用できることにした。これは大正二年の話ですから大変な改革だったのです。これも昭和になって広田内閣で逆転させられて妙なことになってしまった。軍部大臣が現役軍人でなければならないということでは、内閣の死命は陸海軍に押えられるのは当り前です。後の極東裁判でも、この急所をついて、検事が盛んに突っこんだのですが、とにかく軍部大臣の現役制が、昭和にいたるまで政治のガンだった。これを原さんが大正二年に改正したということは、当時の情勢として命がけだったはずです。

それから、それまで現役大、中将に限られていた朝鮮総督、台湾総督、関東都督を文官にした。

そして関東都督府を廃止して関東庁にしたのです。さらに選挙権の拡張では、直接国税十円以上という制限を三円に落し、それまで百四十万人だった有権者を一挙に三百万人にふやしております。また、四大政綱と称して国防の充実、産業の拡充、教育の普及、それから交通網の拡充をかかげたのですが、実のところ、これは党勢拡張の手段です。「お前の村に鉄道を引いてやる、お前の県に高等学校を作ってやる……」ということで党勢を拡張したのですが、ポリティシャンとしては大したものです。こうしておいて、小選挙区法をズバッと抜きうちに採用した。この小選挙区法については誰にも知らされず、床次内務大臣と潮地方局長しか知らなかった。潮さんにまかせて作らせて、できたものを床次さんと三人で検討し、党の政務調査会に出してそのまま国会に出し、アッという間に通してしまった。現在の小選挙区問題ではどうでしょう、私も委員になって十年になるが、一度は区割までつくって答申したのにまだできてない。やる腰がないのです。総理大臣に、もしほんとうの理想があり経綸があるなら、もうとっくにできているはずです。

個人として見ると、冷たい人だという人もいますがそれは嘘です。私も当時、政友会担当記者としてよくお目にかかりましたが、一人で会ってみれば、良いおじいさんでした。それに読書家でした。大正八年に政友会総裁になってはじめて故郷の盛岡に帰られた時、私どもも一緒に出かけ、原さんの昔の屋敷で書斎を見せてもらいました。「あなたは東京に住んでいるのに盛岡に書斎があるとはおかしいじゃないか」といったのですが、「なんでもよいからちょっと見てみろ」という。下駄をはいて庭に出てみると、石造りの別棟があって、それが図書室、書斎なのです。

二階建てで上下合せて二、三十坪、ぎっしりと本がつまり何万冊あるかわからない。見れば和漢洋、洋書はフランス語が多かった。「総理あなたまさか、これ全部読んだのではないでしょ」と聞くと「どれでもよいからとって見ろ」という。私どもも二十七、八のいたずら盛りですから本を抜いてみると、どの本をとっても赤でアンダーラインが引いてあり、ところどころに批評が入っている。全部読んでいるのです。これには驚きました。そんな総理大臣が今の時代にありますか。

統率力が強かったことは、原さんの特徴ですが、いつでも命がけだったのです。東京駅で刺された後、自宅に夫人に「死んだらこれを開けろ」といいおいた遺書が二通ありました。一通は、死後ただちに開くべしとして、葬式のことだけ書いてある。葬式は質素にすべし、大きな墓を建ててはいけない、花輪などを受けてはいけないというようなことです。あと一通は財産処理とか、その他が書いてある。これを見ても、いつでも死ぬ、殺されることを覚悟してやっていたことがわかると思います。

■ふるわない昭和後期の宰相

昭和の人々はだいたい三期に分けていいだろうと思います。昭和十年頃までの前期、田中、浜口、犬養、斎藤、この辺までは、まだ大正時代の総理とだいたい似ていると思うのです。目標ももっておりましたし、やろうとする経綸もあった。田中総理は満蒙問題の解決を最初から掲げて

おりました。浜口さんは、金解禁、それから欧州戦争でふくれ上った産業に対する合理化をやろうとした。犬養さんにいたっては、当時起っていた支那との紛争の根本的な解決を自分だけでしようとしていた。「この問題は蔣介石と俺とで解決する」といって、あの陶々亭の創設者菅野長知翁を密使として上海に派遣して、あの事変の解決、進んで日中提携をしようとした。これが成功すれば、日支事変どころか、世界の情勢は一変していたはずです。

ところが、これを憲兵隊のスパイにキャッチされ、総理の身辺もたちまち危くなった。五・一五事件が起きた主因はこれなのです。軍に内緒で、日中事変を自分と蔣介石と対々で解決しようとした。これは大経綸です。斎藤さんは五・一五後の人心の鎮撫が使命ですが、これもいちおうやりとげた。当時の状況からいって軍備縮少をやるなどといい出せば、殺されることを覚悟しなければならなかったのですが、それをやりとげたのです。

昭和中期の総理たちは全部ロボットで総理どころではありません。近衛さんは、大変聞き上手で知識を広く求めていたけれど、決心のできない人でした。人気は軍人だって反対することのできないほどあったのですが、決断力がなかった。

その他の人は、夜が明けて、「俺は今日から総理大臣になったんだそうだ」といって、ほっぺたをつねってみたのではないかと思うほどです。無我夢中でやっていたのだと思います。

戦後の総理大臣も大したことはありません。吉田さん、鳩山さんぐらいが、やや出色といえるのでしょうが、吉田さんはなりたくてなったのではなかった。いやだいやだといって逃げまわっ

ていたのを、とにかく当分留守番をしてくれ、といってたのまれた留守番総理大臣だった。それがおもしろくなってとうとう居座った。間違いはここから始ったのです。

鳩山さんは、日ソ条約を最初から目標にしていた。自分を盛り立てて総理大臣にしてくれた三木武吉がこれに強く反対したのですが、それをはねのけて「これは俺が総理になる目標だった、それをやらないでどうする」といって実行した。その辺は、明治的な臭いがします。

役者にしろ、芸人にしろ、芸をみがいて真打ちになる、名題になるということが目標です。それには芸が伴っている。政治家になれば、総理大臣になるのが目標と思うかもしれないが、それは違います。役人になって課長になり、局長から次官、大臣になって、その出世の最後が総理大臣になる、これを人生のゴールだと心得ている。そんなのはとんでもない話です。よって国のため何をするか、その目標がまず大事です。ねがわくば、これから先の総理大臣には、国民を率いる理想をもち、リーダーシップのしっかりとれる人、そしてほんとうに国を思い、命がけでやってくれる人になってほしいものです。これも国民の考え方次第ですが。

御手洗辰雄（みたらい・たつお）

政治評論家、選挙制度審議会委員。

明治二十八年三月二十三日大分県に生れる。大正二年慶応大学中退、後、報知新聞社会部長、京城日報社長、東京新聞論説委員長を歴任する。著書に「政界夜話」などがある。

三代蔵相外伝

新聞記者として、筆者が身近に接触した歴代大蔵大臣の意外な裏ばなし

小汀　利得

浜口ライオンうなる

ものの本で読んだ大蔵大臣は、ずいぶん数多いですが、じかに大蔵大臣として接触した最初は、勝田主計氏でした。

勝田主計さんは、私が衆議院の議長の秘書をしていた時に、寺内内閣（大正五年十月成立）の大蔵次官、寺内さんが大臣を兼任していましたので、事実上の大臣でした。たしか、後から大臣になったと記憶しています。

この勝田さん、非常に顔が若く見えるので、おもしろいエピソードがあります。当時、勝田さんの秘書官は、有名な黒田英雄という後の次官で、これは頭がツル禿で、ヒゲはきれいだし、わ

れわれをつかまえて、もっともらしい顔をしながら悠々と話す人だった。だから、田舎に行ってこの秘書官がカバンを持ってついて行くと、宿屋の主人も誰もかれも「どうぞ」といって、その黒田さんを大臣に当てがった部屋、つまりいちばん良い部屋に入れるのです。

それから浜口雄幸蔵相。この人は、あだ名が浜口ライオンというので、誰でもライオン、ライオンと呼び、新聞に書く時だって必ずあとにライオンをつけたものです。新聞記者の悪趣味で、浜口さんなんていったことはない。大きな鼻から鼻息きを吹きながら、ガーッとやるものですから、浜口さんに話を聞く時は、いかにもライオンがうなっているという感じなのでした。ただ、非常に責任感が強く正直だった。

これは半分自慢話になって恐縮ですが、昭和二年の金融恐慌の時だったと思うが、神戸の鈴木商店の関係の手形問題で、永田町の大蔵大臣官舎に、私が材料を追って行った。飛び込んで行ったところが「浜口さんは帝国ホテルで開いている憲政会の総務会に出て、説明することになっているので時間がない」というのです。そこで僕は、「なにをあなた、党の幹部がなんですか。僕は国民を代表してここへきたんだ。この事件を新聞に発表しないで、フラフラ帝国ホテルに行って、くだらぬ連中に報告することとどっちが大事だと思いますか」といった。すると浜口さんは「うう一ん」といって、何ともいわずに先に立って大臣室へ入って行くので、僕もそれに続いて行ったというわけです。

それを見ていた給仕が、「あの浜口大臣がやられて部屋につれ戻された、新聞記者というのは

偉いものだな」といったという余談がありますが、浜口さんはそういう人でしたから、ずいぶん批判を受けても、やはり新聞記者は、その人柄に頭を下げたのです。

■金解禁にふみきる

次は、有名な井上準之助さん。

これはまことにいいにくいのですが、ちょっと弁解かたがた申しますと、われわれ新聞記者とか評論家たちにとって非常につらいことは、いかに個人的な興味を持っていても、あるいはまたその人の立場にいくらか理解を持っていても、評論する場合はあくまでも仕事を中心に評価しなければならない。ですから、ほとんど始終、僕は井上さんと敵対関係に立った。残念ながら、今でも公的には好意が持てないのです。

井上さんは、いわゆる喧嘩をするとなかなかおもしろい人でしたが、結局、日本銀行という無風状態の室で育つと、よほど偉くともバカになる。井上さんはその典型的なものだったのです。本人は非常に偉いつもりでいたのですが、ものの見方というものがたいてい狂っている。つまり是非、善悪、黒白が判別できない。日銀から出て大蔵大臣になったりするということは一万田君でおしまいになったと思いますが、日銀総裁をやれば大蔵大臣がつとまるという迷信は、断固やめなければ、これは日本の将来を暗黒にするものです。

井上さんについては、僕は御子息さんも知っているし、またその人がいい人であいすまんと思うのですが、どうもこの考え方を枉げるわけにはゆきません。

ただ井上氏は、逸話になると、非常におもしろいことがあるのです。

昭和四年の七月九日、浜口総理（昭和四年七月二日浜口内閣成立）が天皇陛下にお目にかかって言上したことがあった。われわれは、まさか金解禁ではないだろうと思ったのです。というのは、ちょうどその二週間ほど前に、井上さんが、「近頃、金解禁論をとなえるものがあるけれど、今金解禁をやるということは、肺病患者にマラソン競走をやらせるようなものだ」といっていた。その井上さんが大蔵大臣になったのだから、彼が金解禁などというバカなことをやるはずがないと確信を持っていたのです。

ところが、「どうも今夕発表になるものはあぶないぞ、金解禁らしいが……」というような臭いが出先からくる。その頃ちょうど経済部長をしていた僕は、デスクでその刷りもののくるのを手ぐすねひいて待っていた。それが意外にも金解禁で、しかも書いてこそないが、われわれ新聞記者の印象では「ああ、これは非常に近いぞ！」と思わせるものでした。むろん十日や二十日でできることではない、年内とは行くまいが、来年早々やるなと思った。

さて、明けて昭和五年正月十一日に金解禁を断行したわけですが、そういうことだから十日の朝の新聞から、浜口内閣攻撃、井上蔵相攻撃を毎日のように書いた。

そのかわり、井上さんの反響がまたおもしろい。僕の方の記者が行くと「どうじゃ、小汀君は

健在かね」とこうやるのです。「ええ健在で、毎日あなたの悪口を書いています」「ひとつことづけしてくれ、いや小汀君はたいへん株の悲観論、経済界全体を悲観的に見ているが、株はここ一両日あがっている。これはどう思うかとね」といった調子です。

あれぐらい大家になると、そんなくだらない、といってはなんですが、そんなことで若い新聞記者なんかと喧嘩しないものなのです。たとえ腹のなかでは煮えくり返るほどおこっていても、一介の記者なんか歯牙にもかけないという顔をしたいものだけど、この人だけは必ず応戦してくる。それがまたおもしろいものだから、こっちは、こいつを持っていったらひっかかるだろうということを書くと、必ず反響がある。

井上さんは非常に大事なことで理解力を失っていた。大変なヘボ政治家だったと思うけれど、ただ〃相手にとって不足はない〃というおもしろい喧嘩相手であった。新聞記者から見ると、やはりああした人が当局にいてくれると、非常にネタが取りやすかったしおもしろいのでした。

〃救世主〃として招かれる

さて次に、大蔵省の官僚から鰻登りに大臣になった藤井真信君がいました。この人は真面目そのもので、かりそめにも非難するような人柄じゃなかったのですが、私は中外商業新報に評論を書いて、「藤井君は残念ながら、あまりに若く、経歴が単純である上に病身であるから、これは

大蔵大臣としては成功しない」というようなことをいろいろ述べたことがあって、事実その通りになりました。

これに対して「なんだ小汀は、若いものが大蔵大臣になれば成功しないなどという」と文芸春秋に悪口を書いたものがいた。その筆者は島田晋作といって、当時僕の部下で後に社会党から代議士に出たが、つまらぬ男で匿名で半頁位、毎号書いていたが、結果は僕の予言の通りになりました。それというのも、藤井君は胸が弱いし、軍部に無理をいわれるから気の毒でしたが、彼は悲惨というほどではなかったが、はなはだおもしろからざる情勢の下に、とうとう短期の大蔵大臣に終りました。

それから非常に大物では高橋是清さんがいますけれども、この人は逸話だけでも普通の人の四、五倍ある人で、会ってみるとおもしろいし、自分の不品行でもあまり隠しもしない。懇意になると、いろんなことをある程度までいう人でしたが飄々として大変立派な大蔵大臣でした。

右から2人目井上蔵相
左端浜口首相

浜口総理が、東京駅頭で愛国社の佐郷屋留雄にピストルで撃たれ（昭和五年十一月十四日）、その傷がもとで亡くなられる前に、先輩の

若槻礼次郎さんが総理になって、第二次若槻内閣を組閣した（昭和六年四月）。この時は、あい変らず井上さんが大蔵大臣をやっていたわけですが、この内閣は、同年の十二月十三日に総辞職し、犬養毅内閣が成立したのです。この政友会内閣の大蔵大臣が高橋さんだったのです。

高橋さんはそれまで葉山の別荘で悠々自適の生活を送っていたのですが、出てくるとすぐ金輸出再禁止をしておいて急きょ国会を開き、そこで法案が通って十七日には法律で正式に金本位から離脱したのです。すると、その晩に、これはわれわれのほうが驚いたのですが、大蔵大臣の高橋さんがわれわれ新平価論者を招待してくれました。

当時の大蔵大臣官舎は永田町の永田小学校の手前、路地を一つおいた赤煉瓦塀の中で、呼ばれたのは石橋湛山、高橋亀吉、山崎靖純、――山崎君は、もと時事新報にいたが、金解禁に反対して社内でいびられていたのを、読売の正力君に迎えられて、彼のために新設した経済部の部長になった人でした。それに、三浦銕太郎という東洋経済の社長、現在数え年九十四歳でまだ元気ですが、この五人でした。いずれも金解禁反対論者で、三浦氏は表に立たなかったけれど、われわれの行動を助けたという意味で呼ばれたのでした。

食堂にごちそうが並ぶと、高橋さんが立って「おまえたちは救世主で、日本を救った人間である。自分は大蔵大臣として、今日、金再禁止の法令が議会を通ったことを、まっ先に報告する義務があると思うからお呼びした」と挨拶をした。そこまではいいのですが、そのうちにいろいろ話していると、すぐ議論になるという論客でした。

■人気があった石渡蔵相

それから今度は、ずっと若いところになりまして石渡荘太郎君。この人は、ざっくばらんな江戸っ子で、お父さんが敏一といって、西園寺内閣の書記官長なんかをしていたので、あまり激しい競争などをしなくて、のん気にやっていた。この人については伝記も出ていて、お読みになればわかりますけれども、とにかく変り者で、なんでもしゃべっちゃうのです。極端なことをいえば、最高機密も平気で漏らすのです。そのかわり人と場所をわきまえていて、懇意であるのと、この人は書かないとわかっている時だけだったようですが、非常に特徴のある人でした。

われわれは、この石渡君とは主税局長をしている頃からこの人と会うと、私なんかが肝いりになって「おい今日の石渡の話みんな書いちゃいかんぞ、これとこれだけは書かないでおこう」というようなことをいって、頼まれもしないのに番頭みたいな役をやった。すると、もう一人、二人、「ああ、それがいい、あいつのいうことをみんな書いた日には、あの野郎、首がいくつあっても足りない。あんないいやつを失脚させちゃいかん」という。ところが若い記者の中には不満な者があるんです。「あいつら大きな面をして、大蔵省はおれのものだというような顔をしている」といっていたらしいのですが、何をやっても評判のいい人物で、これを失脚させるということは、なにか日本から人材を失うように思えて、われわれも一生懸命大事にした大臣でした。

そのあとで賀屋興宣君が出た。これは津島次官のもとに、賀屋主計局長、石渡主税局長などと一緒に活躍した人です。この時代になると、時世も変ってきて、たえず軍部の圧力がかかるようになる。だから、援助といえば大げさですが、われわれのところに応援を求めてきたものです。

われわれもなんとかして、大蔵省を助けて、この軍部の横暴をやっつけたいということですから、その点では考えが一致した。ですから、たいへんやりやすかったわけです。現存の人物で大蔵大臣をやった人は津島寿一、青木一男、賀屋興宣、一万田尚登、向井忠晴の諸君がいますが、生きてる人は遠慮いたします。

■〝ウマが合わぬ〟でクビ

さて、もう一人おもしろい人物がありました。それが市来乙彦氏です。この人は非常に評判の悪い人で、僕ら毎日会ってた人間としては、そんなに悪いとは思わなかったけれど、かなり変った人でした。ちょうど、その当時内閣をガタガタいわせた問題に地租委譲論というのがありましたが、この問題で変な活躍をした怪物がいた。穏田の神様といわれた飯野吉三郎という行者で、この男が、どういうわけか、まあ本人は松方老公の関係だといっていましたが、市来氏に大きいインフルエンスを持っていたのです。

ある日、飯野はわれわれ大蔵省の受持記者、報知の鈴木宇市君（現フジテレビ専務）朝日の前田

繁一君等十人余を日本クラブの晩餐に呼んで「あなた方は、私を怪物怪物とお書きになるが、ごらんの通りに平凡な人間です」といった。

僕は「いや、あなたがそうおっしゃっても、僕たちはやはり怪物だと思う。どういう出身で、どういう経歴をもって、現在なんで食ってるかということがさっぱりわからない、われわれはそういうのを怪物と呼んでいる」といいました。すると、えらいもので、穏田の行者は、「ああさようでございますか」といって「自分は長州の関係もあって軍部に関係があり、一方薩摩とも関係があったから薩長両方、つまり陸海軍になんとなく出入りしていた。とくに、長州の長老伊藤公にかわいがられて、そのうちになんとなく勢力を得た」ということを、ちっとも無理なく説明しました。それでも僕は、「今なんで食べているかわからないのでは、やはり怪物だ」といって笑ったんですが、それもちゃんと申開きをしましたが、これは省きます。

さて、市来蔵相は、その飯野に喰いつかれて、非常に困っていたのです。それはなかなか大きな問題になっていたわけですが、市来さんは、必ずしも無能とはいえなかったけれど、はなはだふるわない大蔵大臣でした。

その市来さん、後に東京市長にかつがれるが、それというのも〃ふだんからいくら借金しても変な手形を書いてでも、つまらぬ政治ゴロにどんどん金を出してやっていたから〃だというのですからおもしろい。当時も、今と同様に東京市会が腐っていたわけです。

また、市来さんは、その東京市長になる前に日銀総裁になっていたわけですが、これはまたひ

どいものでした。例の金融恐慌があった頃、高橋蔵相がきて公債を下請けする普通銀行の「国債シンジケート」の会議をやったのです。その時、高橋さんが会議室から市来さんをちょっと、と呼び出して、「君とおれとはウマが合わない。君辞表を書いてくれ」といった。われわれも驚いたけれど、ほんとうにそこで首になっちゃったのです。

無趣味の結城豊太郎

馬場鍈一氏は法律の大家で法制局長官をやり、勧銀総裁、貴族院研究会の領袖等を歴任して、「前軍部時代」ともいうべき時に大蔵大臣になり、話題も豊富、話もおもしろかったですが意外にもろく早死にしました。

池田成彬さんは三井をやめた後、日銀総裁をやったり、蔵相、商工相をつとめて話題豊富な人物ですが、この人については僕との対談等が何冊かの単行本になっていますので割愛します。

次に結城豊太郎氏は日銀理事、大阪支店長から初代善次郎亡き後の安田財閥の代表者となり、日銀総裁、大蔵大臣等を歴任しましたが、豪胆な人物で話題に溢れていますが、たった一つこの人の困った事件があるのです。ただしそれは日銀総裁時代です。第二次大戦を始める直前ですが全国の銀行を大整理して一県一行に制限することになった。その時のこと、僕は友人に頼まれて秋田県の羽後銀行の助命に行った。

無頓着な結城氏は総裁室へ通して「何だね？」という。こちらは頼みがあるから、ちょっとお世辞に、総裁の後にかかってる額を見て「ふうむ、これは長興山人のツツジだ、小室翠雲さんですね」というと、無頓着の上に無趣味な結城氏「そうかね……」といった切りで、自分の部室にかけてある絵にも何の興味も知識も持たなかった。かえってこれで結城氏に惚れたくらいです。

ちょっと道草をくいましたが、その剛胆な結城氏、結局僕の頼みをいれてくれたが随分困ったらしいことがわかって、まことにすまなかったと思いました。

けだし、銀行整理の火元は大蔵省でも日銀でもなく軍部だったのです。

以上のほか、広瀬豊作君（勝田氏女婿）も大蔵大臣となり、僕は彼の若き書記官時代から懇意でしたが、非常に短命だったので特にご紹介することもありません。

小汀　利得（おばま・としえ）

政治経済評論家、日本経済新聞社顧問。

明治二十二年十二月生れ、大正四年早大政経学部卒業。後、島田三郎衆議院議長秘書、横浜増田貿易勤務を経て、日経の前身中外商業新報の経済部長、編集局長、常務、副社長を歴任、日本経済新聞と改称し社長に就任。昭和四十年勲一等を受く。

三代軍人魂

日清・日露の将軍から山本元帥まで、そのサムライ精神をさぐり、敗戦の原因をつく

高木　惣吉

■戦場では後を見るな！

明治の軍人と昭和の軍人の一般的に見て違ったところと、違わないところはどこにあったか。

七十三年前の日清戦争当時、陸軍の知恵袋は、参謀次長であった川上操六、次いで田村怡与造、それから十年たった日露戦争では児玉源太郎というような知将が代表したといえると思います。

海軍では日清戦争当時、中央では官房主事をつとめていた山本権兵衛、連合艦隊の作戦は英国帰りたての島村速雄というような中堅将校たち。

日露戦争になりますと、大本営では軍令部次長の伊集院五郎、作戦部長富岡定恭、連合艦隊の方は島村速雄、加藤友三郎、秋山真之、こういうそうそうたる名士がその知能を傾けたのでござ

います。

昭和の陸軍では、例えば軍務局長で不慮の死をとげた永田鉄山、石原莞爾、武藤章らの諸将軍は、知謀の点で明治の諸先輩に勝るとも劣っていたとは思われない人たちだったし、海軍でも堀悌吉中将は、秋山提督に劣らない頭脳で、その視野の広い点ではむしろ秋山以上だったと信じます。また私の親しく知っている範囲でも、山本大将と同じ飛行機で戦死した樋端中佐、またマニラで飛行機事故で殉職した岡田啓介大将の長男貞外茂中佐のごとき、秋山参謀に劣らないすばらしい頭脳の持主でした。

それでは戦場における度胸とか判断という点はどうであったかといえば、これまた少しも昔に劣っていたとは思えません。一、二の実例を申しますと、昭和十九年十月十五日、アメリカ機動部隊がフィリッピン沖に押し寄せたとき、わが第二十六航空戦隊司令官の有馬正文少将は自から先頭機に乗りこみ、いわゆる特攻戦の先駆を身をもって示し、またタラワ島の防衛戦でアメリカの海兵師団に悲鳴をあげさせたくらい善戦健闘した司令官は柴崎恵次少将。

右の二人とも、実は私と同級でよくその性格などを知っておりますが、広瀬中佐や白石少佐など、旅順閉塞隊の勇士たちの武勇に勝るとも劣らない力量をもっていた。

それから無名の一大佐で戦死した佐藤康夫という駆逐隊司令がいました。太平洋戦争の初期、十七年の二月二十七日にスラバヤ沖海戦が二回にわたって行われましたが、第一回戦の末期に水雷戦隊の突撃が命ぜられた結果、英、米、蘭、豪連合艦隊の重巡一隻落伍、駆逐艦二隻沈没して

壊乱状態となりました。

この突撃戦の時、水戦旗艦の巡洋艦は一万六、七千メートル、駆逐艦もせいぜい八千から一万メートルくらいから酸素魚雷を発射していました。ところが佐藤司令だけは第九駆逐隊を率い、旗艦「那珂」も友隊も後に残して、勇敢に敵の方にむかって突進してゆきますので、艦長が敵の集中射撃を心配すると、彼は、

「艦長、戦場では後なんか見るな!!」

とたしなめ、友隊の射程距離の半分の四千メートルに迫って発射し、悠々と引きあげたのです。敵の被害の大半は佐藤司令の働きといってもよいだろうと思います。

■サムライ根性の喪失

ある有名な軍事評論家の名筆で紹介されて、不沈艦として名を知られた駆逐艦「雪風」があります。「雪風」は〝幸運の艦〟といい、新艦長もまた〝幸運の人〟というように、ラッキーの言葉で塗りつぶした形となっています。人生の万事に運・不運はつきものでありまして、ことに戦いとか勝負ごとにはそれが非常に目立つのです。

しかし、「雪風」のばあい飛田、管間、寺内ら諸艦長以下乗組員の、まったく人間離れしたような勇敢奮闘が、ラッキーの一語の陰にかくれてしまっては主客顛倒ではないか、という気がい

たします。その実例として寺内中佐の戦闘指揮ぶりをみると、いよいよ戦闘となると艦長は鉢巻きをして、二十六貫の大男がわざわざ司令塔の上に乗りだし、六尺のカシの木の棒を手にもって、一々その棒であの飛行機を撃て、この飛行機を撃てと砲員に指図したものです。

敵機が急降下しながら掃射を始めると、高射砲や、機銃射手は本能的に首をすくめて眼を敵機からそらすので、銃口が外れて命中しなくなります。ところが、艦長が司令塔の上にがんばって指図してるのを見ると、砲員たちも負けてはおれず、勇気百倍して襲いかかる敵機をバラバラと撃ち落すことになったのだと思います。高射砲も機銃も艦の方が多いのですから、飛行機は高速でも一発当ればそれで一巻の終りとなるのです。

さらに、それからこれは映画化されて非常に有名になりましたが、キスカ島三千人の引揚げを無事成功させたのが木村昌福司令官です。この司令官（当時少将）は信仰の厚い人で、学校の成績は下から数えたほうが早いくらいでしたけれども、戦場では実に名司令官として令名をうたわれました。

キスカ島撤収は十八年七月下旬でした。十九年の十二月、フィリッピンのミンドロ島沖夜戦で駆逐艦「清霜」が撃沈されたのです。戦い終ってその乗員の海に落ちているのを救助しなければならないが、夜が明けると敵機が襲来してさらに味方の被害を多くする危険がある。そこで司令官は麾下の巡洋艦、駆逐艦を全部西の敵機圏外に避難させ、旗艦（駆逐艦「霞」）だけが一隻残って「清霜」の乗員を拾いあげました。艦長や幕僚たちは、あと何分すると敵の艦載機来襲の時刻だ

と予測できるので気が気でない。ところが司令官は双眼鏡で前後左右の水面を探し、あそこに一人いる、こっちに一人いる、と落ちつき払って引揚げ命令をださない。

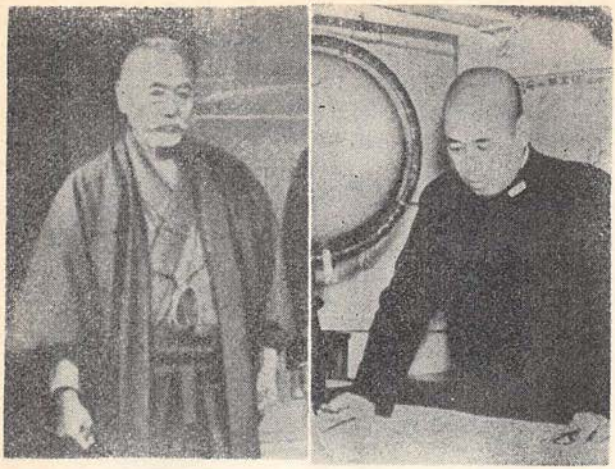
ついに敵機襲来の時刻になったが、あれを救え、これを救え、となかなか御輿をあげない。いよいよ浮いている乗員を救いおわると、これでよし、針路西戦闘全速。信念の人に神助あり、でついに敵機にも見舞われずにすんだのです。

戦場における戦いぶりも見事なうえ、頭脳的にも光っていた小沢治三郎中将、ミッドウェー海戦で戦死した山口多聞中将など、例をあげると、決して昔に劣らない方が多かったと確信しております。

それでは、頭の良いのがいた、勇敢な将兵もいたとすれば、なぜあんな惨めな敗戦に終ったのか、という疑問が起ると思います。負くればこれ賊で、なにもかもボロクソにいう人がありますが、それは誤解に基づくものです。敗戦の原因は政治、軍事、経済、技術各界にわたりたくさんあると思いますが、軍事関係では一言につくせば、武士根性の喪失、これはマナーというより魂（アーム）の問題、それも一部だけでなく国民的レベルにおいて、といえるでしょう。

■戦争屋の出現

連合国占領軍司令官だったマッカーサー将軍は青年将校時代、日露戦争の大山、黒木、乃木の



(左)東郷元帥　(右)山本司令長官

諸将軍や東郷大将らに接した印象を、その回顧録中に「……偉大なる指揮官たちに会って日本軍人の大胆と勇気とに初めてふれたのであった。日本軍人の狂信に近い皇帝への崇敬の念は私に忘れられない印象を与えた」と述べていますが、一方また「日露戦争当時の諸将軍の印象と、こんどの戦争の日本の将軍連の印象とまるで違ってしまったのはどういう訳だろう」と吉田茂氏に語ったということです。

すぐれた将軍たちは無理な戦さで戦死したり、自決したりしてしまいましたから、マッカーサー将軍の印象は一面において当っているし、他の面では眼鏡違いもあると思われますが、内部から見ても、昔と非常に違った点が決して少なくなかったのです。

まず下のほうから申しあげると、兵隊の軍

規、士気がまるで比較にならなかった。日清戦争や北清事変ごろまで日本兵は天兵と称されており、戦いに勝っても一般住民に危害を加えたり、略奪したり暴行を働くようなことはなかった。日清戦争の初期、朝鮮の成歓牙山の戦いの時、大島旅団の一中隊が進軍の途中で休息したが、時は七月二十七日、炎天に隊員はのどが渇いて焼けつく思いをしていたが、路傍にあった西瓜畑にただ一兵も踏みこむものがいなかった。管野中隊長（後の大将）は持主を探して西瓜を買いとり、縄で小隊ごとに区分し、全員を整列させてから「西瓜くい方始め！」の号令で、一同ようやく渇きを凌いだという逸話があります。

また桂太郎中将の第三師団は一万足らずで、夏服のまま山県軍司令官の命で海城に突進しました。時は十二月の厳冬、加えて三方から清国の大軍約六万に包囲されて苦戦二カ月半、大本営では退却させるか、救援するかで十二月末まで方針が決定しなかったくらいの危機。ところが海城の市民は日本兵の温情と軍規の正しいのに信頼して、食糧の補給など非常な協力をし、日本第一の名将は桂師団長だという評判を売ったくらいで、これは当時の下士官兵の行動が立派だったおかげであります。

日露戦争の頃になるとだいぶ質が落ちてきましたが、しかし日本の信用をひどく傷つけたのは軍隊よりも、後から入っていった軍属とか、民間の利権屋が多かったことは反省すべきだと思います。

それでは中堅以下の幹部はどうであったかと申しますと、民族の素質は急に変るわけはなく、

昔と大して違っていないと思われます。昔は習うことが少かったが、近年は憶えることがむやみと多くなった。そこで物知りという点では昭和の軍人のほうが昔の軍人より上になりましたが、一番問題なのは近年の軍人が、まず善良なる日本人であることよりも、強い軍人、向う意気の強い軍人を育てることに傾きすぎたということです。そのために視界の狭い、専門の職人的戦争屋になったのが大きな違いで、月を見ても、花を見ても、人生の悲しみも笑いもなくしたような人が多くなったように思われます。まして白昼公然と、制服で上官を斬殺して平然たるような軍隊が、どうして厳しい対外戦ができると考えられましょうか。

■指導部の老化現象

陸軍のほうも同じと思われますが、明治の先輩は一応東洋のクラシックも身につけ、同時に欧米の新知識を吸収するに非常な意欲を発揮しましたし、海軍の大先輩である佐藤、秋山のような兵術研究家はもちろん、八代、井出、山梨、野村、大谷その他の諸提督など、私の知っている範囲の先輩方でも実に想像以上の読書家であり、大変な勉強家でございます。

ところが近年はどうかというと、東郷、秋山が神話化したためか、あるいは日本海海戦がモデル化したせいか、海戦要務令とか陸戦教範とか、各種学校の教科書に執着して、それ以外は読ませない、考えさせないようになってきました。私の体験でも、海兵時代など英語の辞書でさえお

許しの検印がないと読めないありさまで、図書室はありましたが、蘆花の『不如帰』や『寄生木』はむろんのこと、漱石も鷗外も露伴もなく、ましてトルストイ、シェクスピア、ゲーテなど姿も見せていません。幼年学校や陸士のほうも、おそらく海兵と似たような馬車馬式教育だったろうと思われます。こういう教育からどんな人種が輩出するかは、想像にかたくないところでしょう。

日清戦争の時、北洋水師の丁汝昌提督が敗戦降伏の責任をとって自決した遺骸に対し、わが伊東連合艦隊長官は捕獲した運送船「康済」をわざわざ返してやって、その柩を運ばせ、半旗をかかげ、わが艦隊に見送られて威海衛を離れていきました。

また日露戦争の時、乃木将軍はステッセル将軍を辱めるに忍びないと、旅順開城談判の写真撮影を禁じ、調印後ロシア側代表に帯剣を許し、両国代表が友人として肩を並べたところの写真一枚だけを許したという逸話があります。ところが近年は、どうもこういう人間味が欠けてきた恨み――これは決して日本の軍部ばかりとはいえないが――は隠しきれないように思われます。

次に軍部、とくに海軍の指導部の老化現象があげられます。日清戦争で連合艦隊の作戦を計画した島村参謀は当時三十六歳。日露戦争で連合艦隊の作戦計画をたてた秋山参謀は日本海海戦の時三十七歳。加藤友三郎参謀長が四十四歳。陸軍の満州軍総参謀長児玉大将は奉天戦の時五十三歳、第一～第四軍の各参謀長はみな四十三歳から四十九歳のあいだの働きざかりでした。

太平洋戦争の山本大将と、日露戦争当時の東郷大将の年はほとんど同じくらいでしたが、参謀長になると宇垣少将が開戦時五十二歳、古賀大将の参謀長福留少将がやはり五十二歳、連合艦隊

の一番若い参謀がすでに三十九歳になっていました。体力と気力の頂点は三十から四十歳。それに近代戦では敵と接触するまで連日連夜、空襲とか潜水艦の攻撃で不眠不休の指揮に加えて、警戒、補給、通信、状況の変化に伴う計画の変更など言語につくせぬ苦労を重ねる。そのスタッフの十年近い老化現象は目にこそ見えませんが、致命的影響を与えていることは確かです。

参考に、日清戦争当時、西郷海相は五十一歳、出征前の大山陸相も五十一歳、日露戦争当時の桂首相が五十七歳、寺内陸相、山本海相ともに五十二歳、石本陸軍次官五十歳、斎藤海軍次官四十七歳で、この老化現象はどうも海軍ばかりではないようです。

■人材配置の失敗

独創性を窒息させた戦術万能に戦略の不在、補給、偵察、暗号の軽視など専門事項を並べるときりがありませんが、最後に最大の問題点だけを申しあげると、それは適材適所がメチャメチャであったことです。対米戦争は無理だと強調する山本大将と、敵は優勢でもわれに勝算ありと確信して出征した東郷大将とでは、スタートがまったく違います。一方はこの無理な戦いで、一発のホームランに逆転の勝負を賭けざるをえなくなり、他方はいかに堅実な個々の敵を撃破しようかという合理的戦略の差が出るのは当然の話で、また開戦反対の山本大将が総長とか、海相ならおそらく好戦派いがいの国民の多くは納得できたのではないでしょうか。

また東郷大将は心から信頼のできる島村、加藤、秋山ら第一流のスタッフを持つことができましたが、山本大将は人事局のお仕着せのスタッフをあてがわれ、一流と思われるのは末席の参謀たちで重大計画に対する発言は難しい立場でした。また大事な機動部隊長官も参謀長も、いつも山本大将の大胆な計画に不安やるかたなく、および腰で戦場に向っていくというありさまであり、士官名簿の順位と、経歴本位で動脈硬化した海軍人事は病膏肓だったといえましょう。米内連合艦隊長官、山本機動部隊長官もよし、山本総長、小沢連合艦隊長官、山口機動部隊長官というような夢がもし実現していたら、もし負けたにしても、それは後味のよい負け戦だったろうと思います。

日露戦争の時、中央は全幅の信頼を連合艦隊において、五月十五日の前後、「初瀬」「八島」「吉野」「宮古」「大島」諸艦の沈没、「龍田」の坐礁、「春日」の損傷などで、一挙に艦隊主力の三分の一以上を失った時でさえ、中央は一言半句の注意がましいことをいわなかったのです。出征中の将に干渉をしない、という建前だけでなく、中央と出先、国民と軍部の戦争に対する考えがまったく一致していたからです。山本、古賀、豊田各大将、いずれも三国同盟や対米英戦に反対した提督たちですが、君命もだしがたく、無理に前線にかり出されて、あるいは戦死し、あるいは戦犯に問われるにいたったことは運命の皮肉というほかはありません。

伝聞にすぎませんが、東條陸相の時、石原、多田、西尾らの諸将軍がぞくぞくと現役を追われ、ライバルとウワサされた山下奉文大将が、外地から外地へ、転任また転任を重ねたのは、はたして適材適所の純粋な意図であったのか大いに疑問に思われるところであります。古語に「国

に和せずんばもって軍を出すべからず、軍に和せずんばもって陣を出すべからず」とありますがこれは現代にも生きた教訓ではないでしょうか。

時代がすすみ、技術革命とか何とかいわれていますが、組織も技術もそれをいかしたりするのは人で、新兵器や新戦法を創案しだすのも人であります。蒲の冠者範頼と、九郎判官義経の率いた源氏の軍勢の鋒先がどんなに違ったものであったか。ところがいずれも関東の荒武者たちからなる精強な軍勢でした。指導者が変るとその組織の特質とか気構えが一変することは決して珍らしいことではありません。ただ兵器器材が進歩すればするほど、下級幹部の素質の向上が大事となってくるのです。第一次大戦と第二次大戦のちょうど真中ごろ、第一次大戦休戦記念日における英、仏軍のパレードは実に華々しいものでした。が、しかし、第二次大戦後、痛感するところは、軍隊はスポーツ用ではないから、記念日や閲兵式のマスゲームがいかに立派でも、その真価を表わすものでないということです。

高木　惣吉（たかぎ・そうきち）

軍事評論家。明治二十六年十一月生れ。昭和二年海軍大学卒業。同三年一月よりフランス・ソルボンヌ大学に留学、同五年一月帰朝、少将に累進。その間海軍大臣秘書官、海大教官、海軍省調査課長、舞鶴鎮守府参謀長、海軍省教育局長を歴任。軍令部出仕兼海軍省出仕となり、同二十年九月初代内閣副書記官長に就任、その後著述に専念。「太平洋海戦史」「終戦覚書」など著書多数。

三代の官僚山脈

「官員さん」から「官吏」、「国家公務員」へ、戦前・戦後に見る〃官僚組織〃の実態

細川　隆元

■三十二人に一人は役人

私のテーマは「日本官僚論」ということですが、これは、簡単にお話するというわけにはなかなかいきませんので、ひとつ、そのサワリといったところだけお話したいと思います。

まず「官僚」という言葉ですが、これはもともと中国語であって、唐の時代の「旧唐書」に、「政粛二官僚一、恵及二黎庶一」という言葉があります。つまり立派な政治は立派な役人を作り、その恩恵は庶民におよんでくる。現代のいわゆる民主主義的な思想が述べられているわけですが、ここで初めて「官僚」という字が使われたようです。

そしてこの時の「官僚」は、ただ〃役人さん〃という意味で、これが日本語として採用される

ようになった。あとで申しますように、その後、日本の「官僚」という言葉は、〃官僚政治〃とか〃官僚制度〃というように、とかく〃官僚主義〃という言葉と並んで、官僚に対する風当りの強い用語として使われるようになりましたが、そもそもは〃役人〃というひらったい意味です。

私は明治三十三年、ちょうど一九〇〇年生れですが、もの心ついた頃、私どもはお役人のことを「官員さん」と呼んでおりました。そしてたいてい官員さんはというと、ヒゲを生やして、山高帽をかぶり、紋付きの羽織を着て、袴をはいている。あるいはフロックコートを着ている。そういう姿を、私どもはよく見かけたものです。

それが、明治の後期から大正にかけて、だんだん「官吏」という言葉に変った。さらに戦後は、新しい憲法のもとに、この「官吏」は「国家公務員」に、また地方の役人である「公吏」は「地方公務員」に変った。いわゆるガバメント・オフィシャルというのが役人になったわけです。

それでは、この役人が日本に何人ぐらいいるのか。だいぶ前なので、数字は多少動いているけれども、私の調べたところでは、国家公務員と名のつくサラリーマンの数は六十九万人。だがこの中には、自衛隊の軍服を着た、いわゆる制服職員や国鉄、専売公社などの公社職員六十六万人、それに府県市町村などの地方公務員百三十六万人は含まれていないので、これらを全部含めると、国民の税金で生活している役人という人種は、日本に二百七十万人以上いることになる。

これを外国の例に見ると、アメリカは七百十二万人、イギリスは百三十九万人、西ドイツは百十五万人、フランスは百二十三万人、イタリアでは七十七万人。人口比率にすると、アメリカは

二十二人に一人、イギリスは三十六人に一人、西ドイツは四十人に一人、フランスは三十三人に一人、イタリアは六十五人に一人。これに対して日本は三十二人に一人だから、いいかえれば、われわれは三十二人で一人の役人を食わしている計算になる。

ドイツの官僚制度を模倣

いずれにしろ、どこの国の、どの政治の歴史を見ても、役人組織、役人制度のない政治、行政はありません。昔の十九世紀的な宮廷政治時代は、いわゆる側近政治そのものでしたが、近代国家の様相をそなえてきますと、やっぱりそこには、ある場合は政治に従属し、ある場合は政治と対立し、ある場合には政治以上の力を振るう役人組織が生れている。それはその時々の時勢、その国々の情勢で相違がありますが、ともかく役人制度というものは、政治には不可欠なものであります。これは現代もそうであり、今後も、おそらくそうであろうと思います。

戦前の日本の役人組織というものは、明治十七年の近代的な内閣制度に基づく行政組織によって発生したものであることは、いうまでもありません。つまり明治維新によって、従来の藩制にかわる行政組織が、ドイツの官僚制度をそっくり模倣してつくられた。

そしてこれは、いわゆる〝官僚主義〟という言葉がそのまま当てはまるような、たいへん強権的なもので、役人さんは、まさに〝お上〟であったわけです。

というのは、明治維新は、庶民革命ではなく、士族革命でしたので、あの当時の官員さんはみんな士族の出で、従って非常に気位が高く、横柄である。それに非常に秘密的である。

イギリスやアメリカに、「レッド・テープ」という言葉があります。これは、書類ばかりいっぱい作るので、その書類が散らばらないように赤いテープで束ねておくところから、官僚組織の大きな欠点としての書類行政を意味する言葉として使われますが、明治の官僚組織も、この「レッド・テープ」と同様に、繁文褥礼、手続煩瑣で、しかも画一的である。

敗戦によって、お上という言葉がなくなり、日本の官僚組織も、形の上では民主主義的なものになりましたが、それまでは、いわゆる〃お役人風〃とか、〃お役所風〃を形作るお上的官僚組織が、ずっと続いてきたわけです。

■役所に喰い込んだ河野一郎

この日本の官僚制度がどんなものであったかは、諸外国、とくにイギリスの官僚制度と比較してみると明らかになります。というのは、世界でもいちばんパブリック・サーバント的な役目を勤めているのが、イギリスの官僚制度だからです。

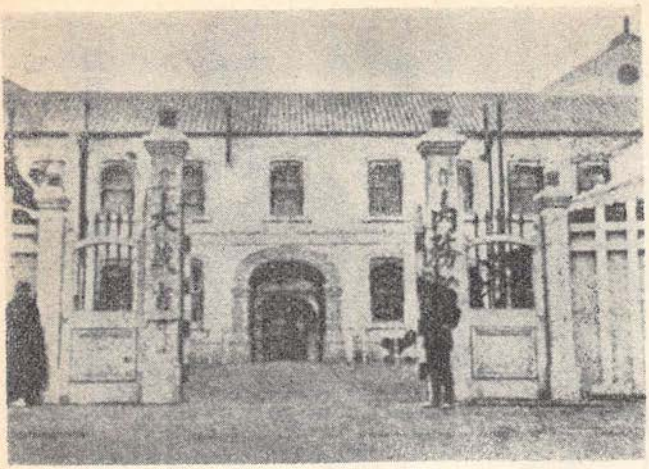
イギリスにおいては、ガバメント・オフィシャルとパーラメント・セクレタリーというものとを、厳しく区別しておりまして、ガバメント・オフィシャルがポリシー・メーキングに参加する

ことは、厳重に制限されております。

だが日本では、国会に提出するいろんな法律も、役所のスタッフが起草している。だから新聞なども、官庁ダネ、お役所ダネというのは、たいへんなニュース・バリューを持っておりまして、次官はもちろんのこと、局長、課長、係長といったところにも、いろんな政策上の、あるいは政治上のニュース・ソースがあります。それでは官庁におびただしい新聞記者が詰めかけて、毎日お役人さんたちと公式、非公式に会うことによって、政策上、政治上のニュースを獲得する。そしてAの新聞が官庁ダネを抜いたというと、明くる日はB、C、Dの新聞が官庁に手を伸ばして、タネを取るという過当競争をしているのが、日本の新聞です。

政界の実力者だった河野一郎君は、朝日新聞で、私と何十年か一緒に仕事をしていましたが、もともと彼は、字のヘタなことにかけては、吉原女郎のカナクギ文字みたいなものでした。私はずいぶん河野君の署名を代筆してやったことがありますが、自分の署名を人に代筆させるという人間もちょっと世の中には珍しい。それに文章というのも、ぜんぜん書いたことがない。ヘタで書けないのです。

その彼が、どうしてあんなに新聞記者として活躍したのかというと、官庁から原案の青写真というか、謄写版刷りの官庁ダネをパッと持ってくるからです。ああいう男ですから、どういう方法で取ったか知らないが、これだけは本当のホット・ニュースだし、新聞に載ると大変です。彼は、こういう官庁の秘密を盗んでくる専門家だったし、こういうふうに日本では、新聞と官庁組



大蔵省と内務省　明治5年の建物

織とは、切っても切れない関係にある。

ところがイギリスでは、パブリック・サーバントというものは、そういうポリシーに関するニュースを外にもらすべきではないという厳重な慣行がありますので、新聞社のニュース・ソースでないところからニュースを取ったということは新聞記者の非常な恥とされている。役所から取ったタネを書いた新聞というものは、たいへん下品な新聞として侮蔑され、過当競争どころか、村八分にされる慣行がある。

このことは、イギリスの官僚組織というものが、日本と非常に違っている証拠です。つまりイギリスの官僚組織は、純然たる、文字通りのパブリック・サーバントであって、国民に奉仕する分野の仕事しかさせられない。いわゆる対外的接触を許されないという慣行

を持つ官僚組織であって、同じ官僚組織でも、日本とはそういう点が非常に違うわけです。

目覚ましい政界への進出

ところで、日本で「官僚」という言葉が、役人を非難するような意味に使われ出したのは、やっぱりデモクラシーの思想が日本に入ってから、つまり、大正から昭和にかけてであろうと思います。もちろん現在も、「官僚」という言葉が、役人組織なり、官僚機構なりを批判する当てつけがましい用語として使われていますが、その内容は、戦前とはちょっと違うようです。

考え方によっては、戦後の新しい民主主義時代のほうが、戦前のいわゆる官僚主義時代より、むしろ官僚主義的であるという皮肉な現象も起っているのではなかろうかと、私は思っているのです。というのは、戦後になって、官僚がおびただしく政界に進出しているからです。そして総理大臣も、大臣も、圧倒的に官僚出身者が多いのは、ご承知の通りです。

もちろん戦前にも、総理大臣、大臣で官僚出身の人はたくさんおります。だがこれらは、ほとんど国会議員ではなかった。国会に進出する役人さんというのは非常に少なかったわけです。

大正十三年の加藤高明内閣から、昭和十二年の林内閣の総選挙までの十五年間に、六回の選挙が行なわれていますが、国会に出た官僚というのは、わずか三十名ぐらいです。ところが戦後においてはこれはたいへんな数です。何倍という多数の官僚が、政界に進出しています。

これには二つの原因があって、戦前は政界に出ると、かえってなかなか大臣になれなかった。だが戦後は、新憲法の規定などもあって、政界に出なければ大臣になれない。だからみんな大臣になるために政界に出てくるわけで、今や日本の政界は、官僚に占領されつつあるのではないだろうか。これは具体的な実例を見れば、非常にはっきりします。

吉田さんが総理大臣になってから、自分自身が官僚出身であるだけに、いわゆる野人とか民間人を極力避けて、どんどん官僚出身を起用した。それで吉田さんのもとに、官僚が異常な政界進出をとげている。

それから、鳩山さんと石橋さんは別ですが、そのあとの岸、池田、現在（昭和四十三年）の佐藤と、三人とも役人出身が圧倒的に多い。ということから、かえって戦後の民主主義のもとのほうが、官僚主義であるといえる。

そして、官僚から出てこられる人たちは、みんなお役所を背負って出てこられる。選挙そのものが一種の役所選挙です。そのいい例が、専売公社の小林章君の問題で、彼は専売公社の利益代表、代弁者として出ているわけです。

また大蔵省は、池田勇人君はじめおおぜい進出しているし、農林省、建設省、自治省関係もそれぞれ出ている。出る時には、やっぱり選挙運動という原省の援助、裏打ちがあって出るわけですから、出てからは、その利益代表的な役目をしなければならない。だから今の日本の民主政治というのは、政治と官僚組織、政党と役所とが完全に一体となっている。そういう点で、役人が

単にパブリック・サーバントであるイギリスのような民主政治と非常に違う。

そして戦前、お役人は国会議員にならずに大臣になって、政治を牛耳っていたが、戦後は、政党を通じ、国会を通じて政治を支配している。そういう点で、戦前よりも、むしろ戦後のほうが、もっと本質的に、日本は官僚政治になっていると見ていいのじゃないでしょうか。

一般的には、逆の見方になってますが、戦前の官僚は、表面的に力があるように見えるだけで、本質的には、形をかえて実力を見せる現代の官僚の方が、知能犯的といっていいでしょう。

■左翼的官僚組織の出現

それからもう一つ、戦後、官僚の特質を変えたものに、官公労、三公社五現業の公労協などの、組員組合と称する労働組合があります。こういう左翼的な官僚機構が、官僚組織の中に厳として打ち立てられ、戦前とは違った新しい官僚意識をもたらしたわけです。

そしてその代表が社会党とつながり、また社会党にも、どんどん官僚が入っている。社会党では、よく政治の粛清とかいいますが、共和製糖事件（昭和四十一年）だって、バナナ事件（同年）だって、社会党も非常に有力な一翼をになっているわけです。

以前に、私は総評の事務局長の岩井君と座談会に出たのですが、この時私は、「社会党というのは、いわゆる社会主義政党としての観念論は述べているが、その実体は、やっぱりお役人組織

と合体した社会党である。そういう役人の職員組合組織から出てくる人たちが、非常に有力な比重をもって、社会党を占めている。その社会党がお役人組織と提携するのは当り前で、これが日本の社会主義政党の、ほかの国では見られない一つの大きな特徴ではないか」という本質論を述べましたら、岩井君も素直に賛成していました。

かつて私は、片山内閣の時に代議士をしておりましたのでよく知っているのですが、鼻クソみたいなのがみんな大臣になっておって、政策の経験はゼロなので、お役所に行くと、知能程度はちょうど係長と対等ぐらいなんですね。おそらく、今でもそうではないでしょうか。労働組合でピケラインを張った連中が、だんだん委員長とか書記長にあり、あとがつかえるものだから、トコロテンみたいに押し出されて、お前、参議院に入れ、お前、衆議院に出よといった具合いに出てくる。

なんにも政策的知能も、広い意味の政治経験も人生経験も持たないのが国会議員になっている。その集団である社会党が、たまたま多数をとって第一党となり、内閣を組織したら、まるで役所の小使いになるんじゃないかと思うのです。そして社会党になったほうが、日本の官僚制度はますます偉力を発揮して、行政機構の改革などといっても、行政機構の〃行〃の字にも手を触れられないのじゃないか。なんとなれば、社会党的な官僚組合組織が、今の官僚組織の中に、厳として打ち立てられ、社会党の中にも官僚組織が入ってきているからです。

■当分続く？　官僚政治

そこで、この官僚をどうすべきかという議論が、当然起ってくる。民主主義になったのに、官僚が依然幅をきかしているのはおかしい、けしからんじゃないかというわけです。

しかし、いわゆる政党が、今日のように無力であって、知能の程度が低ければ、やっぱりマテリアルを持っている役人に牛耳られるほかなかろうと、私はいつもいうのです。

政党そのものが国民政党的なものになり、保守党も社会党も組織が近代化し、そしてポリシー・メーキングの能力をそなえない限り、官僚の政治占領というものは、決して弱まらないと私は思う。ところが保守党も社会党も近代化と口ではいうけれども、なかなかこれは簡単にはいかないのじゃないか。とすると、ますます官僚は政治に進出して、日本ではますます官僚政治が発展してくるだろうと、私は見ているのです。

これまで日本が一流の国としてともかく経済の繁栄を続けているのは、役人と警察の力であって、これがなかったら、日本はゼロになるのではないかぐらいに、私はいっている。

それは、民主政治の根本からいえば、政党政治の貧困がそうさせているといえる。ですから、ちょっとすばしっこくて、小知恵のある役人がサッとそこへ出てくる。のろまでボンクラの政党は、役人に占領されて、あれよあれよといっているだけなんです。

そしてむしろ、役人と結託してうまいことをしたほうが得だという、逆のほうに廻っているのが、最近の、あい次ぐ〃黒い霧〃の汚職で、この根本が解決しない限り、この汚職もなくならないのではなかろうか。

非常に逆説的なことばかり申しましたが、私はファクツというものを大事にするクセがありまして、イギリス式というか、いつも事実というものをつかんだ上に、自分の理論を立てるというのが、私のやり方です。一般に日本人というのはドイツ式の観念論者でありすぎるので、せめて自分の評論ぐらいは、非日本人的な現実的考え方をしたほうが、日本の政治その他を批評する上に役に立つのじゃないかと思って、私流の日本官僚論を述べさせていただいたわけです。

細川　隆元（ほそかわ・りゅうげん）

明治三十三年生れ。大正十二年東大法学部卒業、ただちに朝日新聞に入社。昭和九年政治部長となり、ニューヨーク支局長を経て、同十九年編集局長に就任。同二十二年には衆議院議員に当選、その後政界を退いて、現在は政治評論家として活躍するかたわら、選挙制度審議会、中央教育審議会などの委員をつとめている。主な著書として「昭和人物史」「朝日新聞外史」「日本官僚論」などがある。

三代疑獄史

裏から見た明治百年史の真相

河井信太郎

■〝疑獄〟の起り

私は、明治、大正、昭和の三代にわたって、日本に発生したいろいろな疑獄事件のうち、代表的なものを取り上げ、そのあらましを申し上げたいと思います。

これらの事件の内容は、いままでに新聞、雑誌等で公表されたことで、職務上の秘密は入っておりませんが、百年もたってみると、案外忘れられている事柄も多いようです。

そもそも〝疑獄〟という言葉は、どうしてできたのか、私の調べた範囲では新聞造語らしい。「証拠があいまいである、犯罪になるかならないか、よくわからない、裁判の結果を見ないことにはどうもよくわからない」というようなのを、疑獄事件と呼んでいたようです。そして、そう

いう事件は、たいてい政財官界等の、主として偉い方々が連座するという特徴があります。

歴史を追ってみますと、まず、明治二十三年に鉄管事件というのが起きています。これは東京市が、水道設備の改良計画を立てた時、水道の鉄管を民間の日本鋳鉄合資会社に納入させる際起きたものです。

鉄管を納入する場合に、東京の水道の水圧に耐えるだけの鉄管でなければ合格にならない。ところが、この会社は、次から次へ、不合格ばかり作り出し、あわや倒産という事態にまで追い込まれてしまった。そこで、試験をする役人、係員等に賄賂を贈ったり、あるいは、暗夜ひそかに忍び込んで行って、不合格のマークを削り取り合格の検印を押して合格にしてしまったのです。

昔はずいぶんひどいことが、平気で行なわれたものです。それが明治二十八年に発覚した。その結果、当時の東京市参事会員、市の吏員、鉄管を製造した会社の役員が起訴されて、有罪の判決を受けています。

その後、明治三十六年に、教科書事件が起きています。これは、小学校用国定教科書の審査採用にあたり、書店が文部省の役人に賄賂を贈って、採用を依頼したという事件です。

このために、時の文部大臣菊池大麗が引責辞職をしたというところまで発展したのですが、文部省の役人をはじめ、富山房、金港堂、など多くの書店の主人も起訴されました。

そして明治四十二年になると、日糖事件が起きた。これが、日本における疑獄事件の初めと申しますか、代表的な事件として、はじめて世に喧伝されました。

それは、当時の大日本製糖の酒匂社長が、輸入原料砂糖戻税法の期限延長を国会で通過させようとして、国会議員に働きかけたという事件です。

どういうことかというと、当時、沖縄や台湾で作っていた砂糖（粗製糖）を擁護するために、外国から入ってきた砂糖には、それを精製糖にして再輸出する場合でも税金をかけるということになっていました。しかし、これでは、日本の精糖業がなりたたないという申し入れがあって、「外国の粗糖を輸入して、精製し、再び外国へ出す場合には、はじめ輸入する時に払った税金だけは返してやる」という法案を設けた。ところがこの法律は明治三十五年から四十四年まで、と期限を切られていたものですから、その期限を延長してほしいということで、代議士諸公を買収したのです。結局、起訴された代議士等が二十四名にのぼるという大がかりなものでした。

私は十数年前に、逐一その記録を読んだことがあるのですが、その当時、供述を拒否している代議士もある。〃供述拒否〃ということはアメリカがおいて行ったことで、今日非常に不自由になっていますが、これを当時の国会議員も使っているのです。被疑者には供述の義務はありませんから「これ以上申し上げることはできません」といった。もっとも、その人は弁護士でしたので、訴訟法をよく知っていたということもあるのですが。

この事件では、とくに会社の金を小切手で引き出して、それを買収資金にばらまいたということが問題になった。当時は、賄賂の目的で小切手を切りますと、それが有価証券の偽造になるという、まことに都合のいい法律の解釈が行われていた時代でしたので、そこから捜査が行われた

のです。予審終決決定になった時、本件の酒匂社長はピストル自殺をされ、その後、この会社は藤山雷太（元外務大臣藤山愛一郎氏の父）さんが受け継がれました。

決死の捜査

さて、大正時代になりますと、大正二年にシーメンス事件というのが発生しております。

当時、日本海軍は、ドイツのシーメンス・シュッケルト会社から軍艦を買い、イギリスから発電機を購入していた。そして、三井物産がシーメンス会社の総代理店をやっていたのです。この三井物産の重役が、当時の海軍艦政本部長であった海軍中将に賄賂を贈ったという事件です。

ことの起りというのは、シーメンス会社の東京特派員（当時、明石町に日本支店があった）が、ドイツにかえってから、業務上横領の罪が発覚した。このため、ベルリンの裁判所で、裁判を受けている時に、公開の法廷で「なにも悪いことをしているのは自分だけではない、東京のシーメンスの支店の人たちだって悪いことをしているじゃないか、現職の海軍の軍人に賄賂を贈ってるんだ」と暴露したのであります。その当時の新聞によりますと、このことが、ロンドン特電という形で、朝日、毎日新聞に「ベルリンでこういうことがあった……」と報道されている。

ところが、たまたま国会開会中であったので、ケンケンガクガクの論議になったのです。そこで、政府も捨てておけないので、捜査を命じた。当時、東京地検の次席検事をしておられた小原

直さん――あとでしばしば大臣もやられた立派な方ですが、この小原さんが、主任検事になられて、捜査が行われた。小原さんは、三井物産の帳簿を調べ、その中に、十五万円と、二十三万三千八百円の機密費という記載が、ナイフで削り取って消してあるのを発見したのです。それを発見して、その点を追及し、その日のうちに、三井物産の重役が起訴された。当時の刑事訴訟法というのは、今のような逮捕拘留という制度がなくて一日勝負だったようです。

結局、その件が「帳簿伝票の偽造変造と小切手の振出しによる贈賄資金の引出しが偽造」で有罪になったというのが事件の根幹です。しかし、この事件については、非常に多くの派生事件がありまして、シーメンス会社の賄賂を贈った書類を盗み出した者が、新聞記者と一緒に支店長を訪問して、「金を出さなければ、これを暴露するがどうか……」と恐喝した事実などが起訴されております。結局、この事件によって、時の山本権兵衛内閣はつぶれました。

私はこの捜査を通じまして、小原先生が、いかに偉かったかということを感じました。というのは、時あたかも日露戦争で大勝を博したその直後で、当の海軍艦政本部長は呉鎮守府司令長官に栄進していた。小原検事は、その呉鎮守府司令長官の所へみずから乗り込まれまして、司令長官室で調書を取り、家宅捜索をした。そこで長官は「賄賂の金というのは借りたのだ」という弁解をしているのですが、その証拠の手形を押収しているのです。

小原さんに伺いますと「剣付鉄砲を持っているのが鎮守府の入口にいるのだから、殺されるかもしれない」ということを覚悟して行かれたようです。そういうことを、私どもが茶飲み話に聞

昭電疑獄の公判で証言台に立つ西尾末広前国務相

くと「ああそうか、えらいことをやったものだな」というくらいですが、当時の人としては、なかなかしがたいことであるということを、非常に深い感銘を受けて聞いたものでした。

■検察側の敗北

シーメンス事件の後、大正七年に、京都豚箱事件というのが起きております。といっても、なにも豚箱に入れたわけではありません。検察庁のなかに仮監と申しまして、六尺四方ぐらいの小さな房がある。取り調べが一時終って、検事が食事をしたり、証拠品を見るとき、「一時下がっておれ」ということで、容疑者が入る場所なのです。仮りの拘置所で花井卓造先生がつけられた名前のようですが、

これを称して豚箱というのです。

この豚箱事件というのは、当時の京都府知事が、京都府立女子師範学校を移転する議案を府議会に出したところが反対が多い。そこで、金で府会議員を数名買収した。その知事のもとに、県警察部長がいて、この人も一、二名の府会議員を買収したということで、知事とか県警察部長が贈賄、府の議員が収賄という事件があった。

ところが、この事件の取調べの途中で、検事が机の上に足を投げ出しておいて、「オイッ、コラッ」というやりかたをしたり、煙草をふかしながら、顔に煙を吹きかけて取り調べる。あげくの果てに「いわないなら仮監に下っておれ」といったということで、いやしくも知事や警察部長を調べるのに、そういうことはけしからんということで、人権侵害事件として取り上げられた。

調べた検事に聞きますと、「そんなことはしていない。あれは嘘だ」と盛んにいわれるのですが、記録以外には判断できない。これが、大正における検察の汚名の一つの例でございます。

その次に、大正十年には、満鉄背任事件というのが、起きました。これは、Kさんという、後に運輸大臣をやられた方が、偽証でひっかかった事件です。もと政友会の理事長をしていた森氏が塔連炭鉱というのをもっていた。たまたま選挙をやるのに金がいるが、政党には金がない。そこで自分の持っている炭鉱を、満鉄に売ろうとしたのです。

満鉄で評価すると、最高百五十万である。これは、技師が何回も鑑定しておりますが、百二十万、百三十万、百五十万という三種の鑑定書が出ています。ところがその評価上げをして「二百

万円で買え」と満鉄副総裁に交渉をした。

そこで満鉄は「まあやむを得ないだろう、時の政府がいうことだから」というので、五十万円プラスアルファをした。これは、満鉄という株式会社の任務にそむいて五十万円の財産上の損害を加えた背任罪だということになります。今日ではおそらく二億ぐらいになりましょうか、あるいは十億になるかも知れませんが、Kさんは、その予審判事のもとで証言したことに嘘があったということで、偽証罪に問われたのです。

その後は、東京市会疑獄・東京市ガス疑獄・東京の板舟権事件などの事件がたくさん起っています。とくに、昭和八年に起きた帝人事件はかなり問題になりました。

これは、検察が全面的に敗北を喫した事件であります。判決書のなかに、「水中の月影を掬するようなものだ」とある。猿が水に映っている月影をしゃくるようなものだという、こっぴどい判決を下されたのにもかかわらず、それについて控訴できなかったという事件です。

簡単に申しますと、この事件は、昭和八年五月二十五日に台湾銀行が、鈴木商店がつぶれた時の貸付け担保流れとして持っていた帝人株のうち十万株を、一株百二十五円で買受団の人たちに売った。ところが、その後、株式市場は活気が出てその年の暮になりますと、百九十円ぐらいまで値が上ったのです。だから高く売れるにもかかわらず、安い値段で売ったということで告発された。一株少なくとも、その当時百五十円で売れたものを、百二十五円という安い値で売ったのは、十万株で二百五十万円の損害を台湾銀行に与えたことになる。そこで捜査の結果、台銀の頭

取以下首脳部の背任罪として起訴された事件です。

ところが、たくさん押収された証拠品のなかに、東京の台湾銀行の支店と、台湾の基隆（キーシン）の本店とのあいだに「先方は、百二十円までは買うというがどうか」とか「百二十一円までは買うというがどうか」「百二十三円までどうか」というような、本店の指示を得ているたくさんの記録があった。その証拠品を検事が見落したということが、致命的な結果をもたらしたようです。

この件は私ども自身にも、後輩にも、証拠品をよく見るようにという教訓ですが、判決書にいうように「株式会社台湾銀行の役員が、この担保流れの株式十万株の売却について、真摯なる努力をなしたるあと顕著なるものあり」という結果が出た。犯罪事実の不存在で全員無罪でした。どうにも手も足も出ない、いわゆる全面的に検察が敗北を喫したというのが帝人事件なのです。

■取締役の隠れミノ

この後は、昭電事件とか造船疑獄事件になるわけですが、これは記憶に新しいことだと思います。戦後の荒廃したなかで、財界確立が叫ばれた時の自己資本では、とうてい会社の再建はできない。そこで、基幹産業については、財政投融資を行わねばならないということで、まず電力、鉄鋼、船舶、肥料、石炭などが対象になり、復興金融金庫ができたのです。

食糧増産のために肥料工場を建設して、肥料を増産しようということで、昭和電工に復興金融

金庫から融資をしました。ところが、「世は〝五百円生活〟といわれる窮乏時代なのに、一部の人々が金を取ったり、あるいは飲食遊興に使ったりしている。けしからんから検挙しろ」という声が出た。これが世論の反響を呼び、汚職に発展したのが昭和電工事件なのです。芦田内閣は、いうなればこのためにつぶれました。

造船事件というのは、その後、昭和二十九年に起きたものです。昭電事件が発生して、復興金融金庫が廃止された後、そのかわりに見返り資金特別会計という制度を作って、その金から融資をすることにした。その後、開銀融資となるのです。

見返りは、アメリカの指示によってできたのですが、アメリカから無償で食糧の輸入を受け、国内には有償で頒布する。その販売で得た金を日本銀行に特別会計で残し、基幹産業の開発資金にあてるというものです。とくに、昭和二十四年以来、その制度で、外国航路の船舶については三年据えおき、十三年年賦償還、しかも年六分の低利という好条件でした。

そのため、ただの金を借りるようなものだということで、われもわれもと、船会社を作った。あちらにも、こちらにも、岐阜の山の中にまで船会社ができるという状態でした。これが、船会社に特別の利益をもたらすための不当なる行為として、世論の反響を呼んだのです。

以上申し上げたように、明治、大正、昭和の三代にわたる事件を考えますと、裏から見る日本は、汚職の連続であります。

明治から百年の日本経済の歩みは、極端にいうなら、役人と政治家と財界人との、なれあいに

よる賄賂で築かれてきたところが多分にあることは否定しがたい。しかし反面、思想的な運動によってこれを破壊しようとする、三・一五事件をはじめとする多くの事件があったことも否定できません。

さて、そこで、明治から百年を迎えて、いったい今後の政治経済のいき方はいかにあるべきかということですが、私は私なりの意見を申し上げてみたい。

会計原則で真実性の原則ということをさかんにいいますが、ご承知のように「もうかった時には、費用の繰り延べを少なくしろ、逆のときは引当を少なくしろ」とさかんにいいます。今度商法で規定されましたように、開発費や試験研究費というものの繰り延べを認める引当金の計上を許すことは、損益操作を自由にできるという幅が非常に広くなったということです。

ところが、今日の日本の会計処理の実情はどうかといえば、この真実からはみ出た、法律上許されないものが非常に多いのです。

たとえば、公認会計士が「公正妥当な決算である」と、意見をつけておくものが山陽特殊製鋼のようにぱっさりと倒産してしまう（昭和四十一年）。そこで、公認会計士の責任を問おうと思ったところが、すでに廃業届をして公認会計士の仕事をやめている。

また監査役についてもしばしば問題になります。取締役が選んだ監査役が「今期の決算は公正妥当なものと認めます」と、なれあいだから当然そういう。こういうことを繰り返しています と、日本経済は、自ら墓穴を掘る結果になると思う。

取締役の任務を免れるための、隠れミノのような法制を作って、企業の経営者がそれに安住している時、若き世代の者はこのような矛盾をどう見るか。どのような感覚を持ってそれを受け取るかということが、これからの一つの課題なのではないでしょうか。

河井信太郎（かわい・のぶたろう）
東京地方検察庁次席検事、中央大学講師。
大正十二年生れ。昭和十三年高文司法科合格、翌年中大英法科卒業。同十九年東京地検検事となり、同四十年九月現職に就任。その間、昭和電工事件、造船事件を、また東京地検特捜部長として、吹原・森脇事件などを担当。

三代財界人かたぎ

激動の時代を生き抜いた経営者たちの猛烈な闘志と不屈の魂！

三鬼陽之助

■粒々辛苦の創業時代

私は、明治、大正、昭和、三代の財界人気質について申し上げるのですが、これらの実業家の活躍は、いつも、それぞれ時代の環境によって支配され、特徴が出てきます。

そこでまず明治ですが、私は一言にいって、明治の財界人、経営者の特徴は、創業者であるという点だと思います。

周知のように、日本の産業革命というのは、イギリスなどと違って、自然発生的なものではなくて、外国から輸入されたものでした。そして事業の多くは官営で、それが後に民間の手に移った。たとえば、現在の日本セメントの前身である浅野セメントにしても、官営のセメント事業を

浅野総一郎が引きついだのです。一般に当時の事業の規模は非常に小さかったのですが、これが日清、日露の戦争によって急激に伸びた。それが明治時代の特徴だと思います。

それからいわゆる財閥ですが、三井の場合は金持ちの商人、三菱の岩崎家は、明治十年の西南戦争に前後して、日本郵船の前身を手に入れ、土佐などに船を納めて伸びたのです。その他、浅野にしても、大倉、安田、古河、根津、服部というふうな財閥も、いずれもだいたいそのような経過をたどってきていると思います。したがってこれらの人は、いわゆる創業者であるというのが共通点です。

創業者というのは、むろん誰にでもなれるというわけではない。非凡なのですが、この創業者に共通したことは、彼らが金をつくるまでには、自分の生活を犠牲にし、粒々辛苦をして資本を蓄積したということです。だから、金のありがたさというものを身を持って体験している。二代目の方々には想像もできないような体験をしているのです。したがって、会社の経営上においても、無駄な支出を省き、無駄というものを極端に排撃したのでした。

これは有名な話ですが、鐘紡を創業した朝吹英二は、鐘紡の経営にたずさわっていた時、ずだ袋を作っていつも胸に下げて歩き、工場に落綿とか古綿が落ちていたら拾ってその袋に入れ、もう一度打ちなおしたというエピソードがあります。このようなエピソードは、当時の経営者には数限りなく展開されていると思います。

私が、昭和六年、ダイヤモンドの記者になってまもない頃、当時の社長だった石山賢吉さんに

「金もうけというものはどうすればよいか、偉い財界人に話を聞け」といわれた。そこで私はまず、当時、電力界の大御所だった福沢桃介さんのところに出かけました。

そこで、「どうすれば金はもうかるか」と問うと「それは君、使わないことだよ」というふうなことを一言いわれました。現在なら、私もそのぐらいのことでも多少ごまかすことはできますが、当時は、非常に若くて純真だったせいか、ただ「使わない」ということで、原稿用紙を二枚も三枚もうめることはできなかった。

そこで福沢さんに、使わないということはどういうことですか、と、もう一度たずねると、

「入った金をつかわないことだよ」

「それでどうすれば金はもうかるのですか」

「いやそれだけでもう金はもうかるんだ」という調子です。その記事は石山さんに助けられて、どうにかできたのですが、この福沢さんも明治の経営者としての血を受けていたのです。私は最近長い記者生活を通じて、やっと、使わないということが貯蓄だ、蓄積なのだということを非常に遅ればせながら、感じました。

■借金政策を恐れる

このような精神と同時に、創業者である明治の経営者というものは、その事業に対する最大の

出資者でした。だから、今日でいう経営者であり、大株主であるのですから、「自分はこの会社と運命をともにするんだ」という信念が強い。だから無駄な金を出すことは身を切られるようにつらいので、今日のような社用族的な存在は、原則として考えられなかったのではないかと思うのです。

そして、こういう人には、何年たったら自分が職を退くという、いわゆる定年ということはなかった。だから常に経営者としての責任から解放されるということもなく、また自分の仕事というのは原則として自分の息子か、あるいは非常に近しい人に譲るということになっていました。したがって、自分の在職中に自分個人の名声をかち得るとか、形式的な名声を形づくるために市場のシェアを拡大するなどということには、非常に臆病であったということがいえると思います。ですから必然的に、事業は外見よりも、内容の充実を大事にし、自己資本の拡張につとめ、借金政策を恐れた。また銀行も貸金に対しては厳しい態度をとっていたので、金融機関から借りた金は、必ず自分の在職中に返済するのが原則になっていました。

明治の特徴的な経営者の例ですが、私が、藤原銀次郎さんにお目にかかった時「藤原さんの伝記を読むと、慶応大学に藤原財団を作って、そこに何百万円、今でいえば何億円という金を寄付したとか、どこに寄付したという話ばかり書いてあるが、どこでもうけたとは一度も書いていないけど、一体あなたはどこでもうけたのですか」と聞くと、「俺は王子製紙から月給やボーナスをもらった」という。

そしてそれを全部自分の会社の株にしたら、それが拡張・膨脹・増資ということになって、知らず知らず増えたのだといわれましたが、これなどは、大変、明治的な話です。もっとも当時、王子製紙の重役全体の賞与は半期で二十万円、現在なら五百倍としても二億円ぐらいにはなりますが、その七割を藤原さんがとり、あとの一割を副社長の高島さんがとり、残りの二割を十六、七人の重役で分けたという、今では想像もできないことでした。

■戦争成金の出現

明治の創業者は、多くの人材を生みました。いわゆる財閥には使用人というものがいましたが、私はこの使用人も創業者だと考えて良いと思う。特に三井はご承知の通り番頭政治でしたから、使用人から幾多の人材を出しています。たとえば益田孝だとか、中上川彦次郎、藤山雷太、藤原銀次郎、そして早川千吉郎など、たくさんおります。これらの人は、藤山雷太のように途中から大日本製糖の復興にあたったり、藤原銀次郎にしても王子製紙の改革で名をなしたり、使用人であると同時に、一つの事業の創業者として終始しています。三菱は、岩崎家一軒が中心であり、岩崎小弥太が自身でこの事業に采配をふるった。したがって、人材はあったのですが、世間的には各務鎌吉、豊川良平、荘田平五郎ぐらいしか表われていない。

それ以外の大倉とか浅野などの中小の財閥にも、人材はそれそうとうにおりますが、やはり三

左より　岩崎弥太郎　三井八郎右衛門　渋沢栄一

井、三菱、住友に比べると人物はそろわず、財閥も大きくならなかったといえます。

明治の経営者の特徴をいくつか申しましたが、もうひとつ、明治の財閥、財界人は、政治を動かしたということがいえます。周知のように、三井には井上馨があって時の政友会を動かし、三菱の場合は加藤高明、幣原喜重郎、さらに大隈重信という人があって憲政会を動かした。さらに原敬日記などを読みますと、原敬や陸奥宗光が古河財閥といかに関係が深かったかがわかります。

これは、いうまでもなく資金のつながりで、政友会が金がいるとなると、ほとんど三井がまかない、逆に憲政会が入用の場合は三菱がまかなっていたのです。この傾向は昭和になっても戦前まで続きました。

今では、自民党が金がいるとなると、まず

経団連の現副会長である植村甲午郎に話しをする。そして、各業界に割り当てたりして金を集める。何百社という会社がひとつの政党に金を集めるのですから、昔とだいぶ違います。したがって現在は、政治が経済を動かし、昔は、すなわち財閥が政治を支配していたわけです。

次に大正時代ですが、この時代の特徴は、やっぱり第一次世界大戦で、日本が英、米とともに世界の第三国になったということだと思います。また、大正二年に、軍縮が断行されてから、軍人が文官の下風になったというのも、この時代の特徴のひとつです。さらに吉野作造博士の民本主義、鈴木文治の友愛会が生れ、労働運動が表面化してきた。またそれにともなうように「中央公論」や「改造」という雑誌も生れました。

しかし、産業人をとってみると、明治のような特徴がないのではないかと思う。たしかに、戦争によって、日本の産業界は、飛躍的に増大し、勢いがよくなった。いわゆる成金という言葉も生れたのですが、この戦争というものは、経済人の手によってもたらされたものではなかった。そこが、自分で苦労して事業を育てた明治の経営者とちがうわけです。だから戦争という大きな博打で大もうけはしたものの、その反動が大正九年の恐慌として表われると大半は没落してしまいました。いわゆる成金といわれて栄えた人々、たとえば内田信也、山本唯三郎、山下亀三郎、勝田銀次郎、さらに鈴久という男などがいましたが、いずれも末路があまりよくなかった。

また、形式的には、昭和二、三年の金融恐慌で没落したのですが、鈴木商店とか、茂木商店、川崎造船、日本製粉、高田商会、それに渡辺、若尾、村井、中井なども、戦争で大もうけをし、

その夢がさめて、倒れた大正没落組なのです。この時代には、いわゆる〝三大ラッパ〟といわれた人がいました。八千代生命の小原達明とか、星製薬の星一、葛原冷蔵の葛原某の三人だったといわれていますが、いずれも倒産している。今日は誰と誰がこれにあたるか、申し上げるかぎりでないが、この歴史が物語るところを考えてほしいと思うのです。

■新興コンツェルンの興亡

さて、第三番目は昭和時代ですが、これから先何年続くかわかりませんが、三つに分けて考えるべきでしょう。それは大東亜戦争が終った昭和二十年までを初期とし、それから昭和二十年以後区切りのよいところで昭和四十年までを中期とし、そして今年ぐらいからを後期と分けられると思います。戦前、戦後、今後というわけですが、この三つには共通点もあります。

つまり、明治、大正時代には、いわゆる優秀な役人というのは、原則として政治家になった。たとえば、若槻礼次郎、浜口雄幸、あるいは原敬というような人がいます。しかし、昭和になりますと、このような役人は、財界人、いわゆる産業界に天降るという傾向が強い。少くともこの傾向は明治、大正時代よりも昭和のほうが濃厚だと思うのです。これはなぜかというと、私がいうまでもなく、経済の統制に関係することです。戦前は経済の統制が非常に強かったが、戦後においても、この統制色はいろんな形でぬぐわれずに残っている。そしてまた、今後においても続

くとなると、やはり、役人が産業界に天降り、転身してくる率は多いのではないかと思います。

そしてこのことが、明治時代は優秀な経営者、財界人が政府を動かしたが、昭和になってからは、むしろ、政治が財界を引っ張る、という原動力になっているのではないかと考えるのです。

さてそこで、昭和第一期の戦前ですが、昭和八、九年から昭和十五、六年ぐらいまで、新興コンツェルンが栄えた時代がありました。日本曹達とか、昭和電工、鮎川さんの日産とか、日本窒素、倒れてほとんどあとかたもなくなった大河内正敏の理研などですが、三井、三菱、住友という既成財閥に対抗して華やかでしたが、これらの新興コンツェルンには共通の欠点があった。

それは、技術を非常に過信したことと、事業には常にともなっている金融ということを無視したり、あるいは金融筋に不信を買われてしまったりした。そのために、一時、華やかに咲いた新興コンツェルンの花も、多くはあえなく倒れることになってしまったのです。

戦後になりますと、いわゆる敗戦と集中排除法で、創業者が経営の第一線から去り、財閥は解体されたわけですが、資本金一億円以上の会社の常務クラスまで追放になり、やがて〃経営技能者〃の時代になった。昭和二十一年の四月三十日にできた経済同友会のスローガンでは、経営者ではなく、この〃経営技能者〃という言葉を使ったのです。

■経営技能者の登場

この同友会のトップに立ったのが、いま秩父セメントの社長である諸井貫一さんでした。諸井さんは、七十歳で勲一等をお受けになったのですが、二十年前のことだから、まさに五十歳で秩父セメントの常務として、同友会の元老であり、世話役だったわけです。

このことを思うと、やはり二十年前の経済同友会は、今の同友会にくらべて、非常な意気込みがあったのではないか。端的にいうと、経済同友会の今日の平均年齢は、当時トップだった人の年齢を越しているのではないかと思います。

それはともかく、〝経営技能者〟が登場した結果、資本と経営が分離され、株式が大衆化されることになったのですが、このことから、経営者が、自分の会社の株の所有率がすくなくなっている。松下電器、鹿島建設、ブリヂストン、本田技研などの特殊な会社は、まだそうとう大株主が社長になり、経営の首脳になっていますが、大半の会社は、株をほとんどもっていない経営者が表面に出ている。それが良い場合もあり、悪い結果にもなっているようです。

ただ、この戦後期の経営者は、新しい労働問題の処理ということで非常に苦労をしています。私が、記者生活を通して考えると、昭和六年から二十年までの時代の経営者に比較すると、それはもう想像もできないような苦労をなさってる。

また一方、社用族的な社長とか、重役が続出しております。私は、この最大の原因というのが、いわゆる給与体制にあると思う。明治の頃の話を思い出していただけばわかりますが、とにかく昔の経営者、いわゆる社長さんという人たちとは、ぜんぜん問題にならないぐらい少ない給

与です。その少ない給与も、そうとう税金などでけずられてしまうという状態です。

しかし、同時に昔の経営者というのは、今日の経営者のように、いわゆるお雇い、あるいは、成り上りというものではない。主として創業者であり、自分でその企業を切り開いたという点に劃然たる相違がある。創業者の苦労を見ると、いまの二世の苦労などは、ぜんぜん問題にならないともいえるのではないか。

最後に昭和四十一年以後の、わたくしたちとしては一番興味深い、これからの経営者ですが、ここに、現代に見るおもしろいひとつの大きな現象があります。それは、五十五歳を定年とすると、今年いっぱいで明治生れの人が労働者とか従業員とか、いわゆる雇用者として仕事の表面からいなくなってしまうわけです。したがって、一般の働く部門においては、いよいよ大正の人の時代だということになる。

同時に、青年会議所の定年は四十歳だということですが、すると青年会議所は、今年から昭和の人だけになった。

そこで、昭和の時代の人にいつも申し上げることですが、いままでの先輩経営者からはいろいろなことを学ばなくてはならない。明治の創業者からは、ブルドーザー的な、いわゆる意気込みを、そして、大正から昭和にかけてのは、ものを守って行く力、とくに終戦後の労使問題で闘った経営者については、なみなみならぬ敬意を表さねばならない。

ただひとつ、絶対に学んではいけないものがある。それは明治の人も、大正の人も、生産第一

主義であり、物を販売するということを、何かほかのことに頼ったのではないか。たとえば戦争というものに頼っていた。

終戦後の人も、生産第一主義のきらいがありました。物を作りさえすれば、売れるのだという考えがあったために、いま現に経営者は、過剰生産、過剰設備、過剰滞貨という苦しみに直面しているのです。しかも、この苦しみはいよいよ本格化して、これをまともに受けるのは、昭和以後の経営者ではないだろうか。今後は生産第一主義をぬけ出して、いかに新製品を創造し、販売するかで苦悩する時だと思うのです。

三鬼陽之助（みき・ようのすけ）

経済専門誌「財界」主幹。明治四十年八月三重県に生れる。昭和六年法政大学法学部卒業。同時にダイヤモンド社に入り、編集部記者となる。同八年投資経済社創立に参加、同十九年東洋経済新報社に入社。理事。産業部長、論説委員を兼ねる。同二十八年財界研究所を創立。この間、二十四年から三十三年まで、都労委公益委員をつとめる。「悲劇の経営者」「社長への直訴状」など著書多数。

想い出の相場師たち

相場に生命をはる勝負師たち——兜町生活六十年、シマの元老が語る三代株屋気質

遠山　元一

■十六歳で株屋奉公

お前は明治、大正、昭和の三代にわたって兜町にいるのだから、その間にどんな人が活躍したか話せ、というご注文ですから、おぼつかない記憶をたどってお話ししてみましょう。

私が兜町に入りましたのは、明治三十八年、数え年十六歳の時でした。ほかにつぶしが効かなかったということは、私自身にとって、幸せであったか不幸せであったかわかりませんが、以来結局六十数年のあいだ兜町の仕事に釘づけにされてしまったわけです。その間、朝から晩まで追い回わされ、たいした記憶もありませんが、以下、明治、大正、昭和の三代に、相場に生き、相場に消えていった人々を思いつくままに、お話ししたいと思います。

私が兜町生活に入った時、組合委員長は南波礼吉という方でした。ご承知かどうかわかりませんが、昭和二十八年に、八十三か四でなくなられましたが、まことに〃のんきなトウさん〃のような鷹揚な人でした。どことなく人徳がある。兜町におっても、いっこう株の思惑をするでもない。かといって、たいして収入もありそうにない。そのくせ南波さんが小遣いに困ったという話を聞いたことがない。まことに淡白なオジさんでした。だが、その南波さんを中心に物事を相談すると、わりあい話がまとまる。しかし、ご当人一人では、なんの話をしているのか、結論がどこにあるのか、ちっとも要領をえない。けれども、なんか相談ごとというと、やはり南波さんのところへ足が向いてしまうという、まことに不思議な風格の人物でした。

南波さんが委員長を引き受けられたのは、たしか明治四十年、大暴落のあとだったと記憶します。当時の仲買いのうちには錚々たる方々がおられました。なかでも、山一証券の先代、小池国三さん。この方は、実に立派な人でしたが、その時分はご自分で市場で手をふっておられた。取引所で手をふって売買するというのは、なかなかむつかしいものです。現物取引のほうは、その場ですぐ決ってしまうからいいのですが、長期取引となると、そのテクニックはなかなか技術を要する。指し値の注文があり、成り行きの注文がある。

それが仲買いになりますと、ほうぼうのお客さんの注文がありますから、商いの盛んな株は、すぐ伝票がたまるわけです。それは、売りと買いの注文があって、よほど頭のいい人でなければさばききれない。一種の技術なんです。私は長い兜町生活で、その商いはやったことはありませ

ん。小池さんはご自分のお店で、なかなか信用が高く、いいお客さんがたくさんいましたから、売買も非常に多かった。それだけに商いは骨が折れたと思います。それを小池さんは、ご自分でやっておられたのを覚えております。また小池さんは、明治四十年の暴落の際も難なく切り抜けられました。

■戦争景気で〝鈴久〟の登場

日清戦争時分のことは、私はぜんぜん知りませんが、日露戦争の、いわゆる戦後景気というものは経験しました。賠償がとれないということで、一時非常に失望したのですが、その後、満州の値打ちが次第にわかってくるにしたがって、償金はとれなくても「日露戦争には勝ったんだ」という実感が湧き、それから相場も暴騰したわけです。

その暴騰の時に、それを的確につかんだのが鈴木久五郎――いわゆる〝鈴久〟といわれた人です。この人は埼玉県の春日部の出で、埼玉一の多額納税者、鈴木兵右衛門という人の弟です。鈴久さんが、この暴騰をつかんだのについて、おもしろいエピソードがあります。鈴久が、ちょうどヨーロッパへ勉強に行こうとして、シンガポールまできた時、はじめて日露の開戦を知った。そこで「こういう国家の重大時に勉強なんかしておられるか！」というので、急きょ帰国して株を買いだしたわけです。

その当時、鈴木家では、鈴木銀行という地方銀行をもっておりまして、東京にも小網町にその支店がありました。むろん、銀行の資本がなくても鈴木家は相当の資産家でありましたから、それを株にどんどん投資した。つまり、国と運命をともにする、もう負けたら株も財産もありはしない、だから〃勝つ〃という一本にしぼって、それに運命を賭けるべきである、というのが鈴久さんの考え方。そしてどんどん買い進んだわけです。

それが、戦争中は、勝った勝ったで、景気は上昇、いちじ戦時補償がとれないというので失望はあったが、そのうちまた暴騰。その時、鈴久さんがどのくらいもうけたか、あまりもうけが大きくてだれにもわかりゃしない。ご本人もわからなかったんじゃないかと思うんですが、まあ、一千万円はもうけたでしょう。当時の一千万円というのは、大変な値打ちのあったものです。

私の奉公しておりました半田庸太郎商店というのは、この鈴木家の注文を受けておりました。私が鈴久さんを初めて見たのは明治四十年一月四日、東京証券取引所の仕事はじめ。九時半頃でしたか、鈴久さんが、さっそうと店に入ってきました。背が五尺八寸ぐらいあったと思います。非常に長身で、顔色のいい美男子でした。それが、黒紋付の羽織に仙台平の袴をはいて、鹿皮の草履といったいでたち。そして大いに気炎をあげる。「今、お前たちは、一日五十円高といって驚いているけれど、一週間もすれば毎日百五十円ぐらいずつ上るのだからこんな相場でびっくりしてはいかん」身ぶり手ぶりのジェスチャーまじりで話をする。その手には大きなダイヤの指輪がキラキラと光っておりました。

明治四十年ですから、私は数え年十八ぐらい。同じ埼玉県から出た人で、こんな偉い人もあるのかと思いながら、鈴久さんの話に耳を傾けたものです。いや実際、そのころの証券市場で、鈴久さんの勢力は大変なものでした。

それが、一月の十五日を頂上としまして、十八日から暴落をはじめ、三月にはあれほどもうけたといわれた鈴久さんも、もうどこへ行ったかわからないほど激しい暴落でした。たとえば、東株が、一月十五日頃、高値七百八十円、鐘紡六百円だったものが、年末にはただの九十円にまで落ちたのです。いかにこの暴落が激しかったかがおわかりでしょう。そのため、私の世話になっていた半田商店も、大きな被害をこうむったことはいうまでもありません。

■相場でもうけて世界漫遊

ところで、その当時、変った仲買いに富倉林蔵という人がいました。この人は、まったく目に一丁字なしでしたが、頭のいいこと。人の話をよく聞く。いや聞くばかりでなく、それをよくそしゃくして自分の血肉に消化する。実に偉い人でした。

富倉さんは、株ばかりでなく、正米もやり、外米の輸入もやり、八方に手をひろげていました。当時の富倉さんの資産も一千万円は下らないだろうといわれたものです。この富倉さんも、この時の暴落で非常な痛手を受け、爾来、浮ぶ瀬がなかった。明治時代の相場師にはいろいろ話題が

大正初期の証券取引所（大阪）

残っておりましょうが、私の鮮やかな記憶は、今の鈴久さんと富倉さんの二人です。

しかし、この暴落で、逆にもうけた人もある。その筆頭が、望月軍四郎という方です。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、この方は、村上太三郎という人の入丸商店の番頭さんだった。四十年の暴落の時は売り方に回って非常にもうけ、その金で世界漫遊に出かけて、兜町では大評判になりました。そして帰ってきてから、支那の留学生の施設に三百万円寄付した。相場でもうけた金だといってしまえばそれまでですが、当時の三百万円といえば、大変なものです。しかし、これはなかなかいい点に目をつけたと私は思うのです。というのは、当時、支那からずいぶん留学生がきておりましたが、帰国するとみな反日になってしまう。これは、留学中、日本人

からチャンチャン坊主ということであまり大事にされない。もちろん敬意をはらわない。ですから、学問はしても居心地はかならずしもよくなかった。

そんなところに望月さんが目をつけて、留学生のために三百万円も寄付されたことは、日本国家のために大きな意義があったと思うのです。

望月さんは、その後もずっと手堅くやっておられて、日清生命でしたか、生命保険会社を経営したり、安田系の第三銀行の頭取にもなられ、京浜電鉄の社長にもなり、実業界にも非常に活躍をされました。

明治の仲買いには、私が知る限りでも、いろいろ変った人がおったわけです。しかし、だいたいにおいて、明治の仲買いというものは、今でいう証券市場の公共性とか、委託者の保護とかいったことには、ほとんど無関心。ただもう相場で一山当てればいい。そして当てた人が偉くて、もうけそこなったものがバカだという、きわめて簡単な結論で片づけられた時代でございました。

■投機専門〝株屋〟カタギ

大正の初期は、明治天皇のおかくれのあとで、はじめは景気がまことに沈んでおりました。例の第一次欧州大戦がはじまったのは大正三年ですが、それでも半年ぐらいはまだ景気が出なかった。戦争が、いったい勝つのか負けるのか。はじめのうちドイツが非常に勢いがよかったもので

すから、戦争を楽観できるまでにいっていなかったからです。そのうちだんだん景気づいて、第一に船会社がもうかった。どんなボロ船でも、前にさえ出ればいい、うしろにさえ行かなければいい。極端なことをいえばタライにモーターをつけたものでもいい、というほどの景気でした。というのも、船がどんどんドイツに撃沈される。エムデンというドイツの巡洋艦が、インド洋から西太平洋を荒し回ったのはこの頃です。

第一次欧州大戦の好影響がはっきり出たのは大正四年の初めからです。その頃、私は毎年半年ぐらいずつ病気で休んでおって、自分自身、あまり活躍はできませんでしたが、ずいぶん成金が出ました。〃成金〃という言葉は、鈴久さんが金をもうけた時、だれかがいい出した言葉だそうですが、この第一次大戦では、いわゆる成金がずいぶんできました。

しかし、これも大正九年を境にして、またダウン。この時の東株が、親株のほうははっきり記憶しておりませんが、新株で五百五十五円というのが一番高かったように記憶しております。それが、三月幾日かから暴落がはじまって、あとは下がる一方。その年の暮には、東株が百円を割るといった暴落ぶりを示しました。その当時の株式市場の標準が東株で、この東株を中心に売買しておったわけです。

そして取引の方も、投資ではなく、投機専門でした。したがって、兜町の人間というと、一種特別な人間のように警戒されたものです。株屋をやっているんだから〃株屋〃という言葉で呼ばれるのは、なんの不思議もない。米屋さんが〃米屋〃と呼ばれるのと同じことなんですが、ただ

私どもの場合、これはひがみであったかもしれませんが、米屋を〝米屋〟というのと、株屋を〝株屋〟というのとでは、どうも意味が違うような気がした。株屋というものは油断もすきもならん、人間のように見られていなかったものでした。

それでありますから、私どもの先輩たちにも、兜町の信用を社会的に向上させなければならないと、しょっちゅう心がけていた人たちがないではなかった。徳田昂平、片岡辰次郎、南波礼吉、杉野喜精といった方々ですが、この人たちは、仲買い人の品性をあげることに、たえず努力をはらっておられた。しかし、大部分は、もうければポンポン使い、損すればいつの間にか姿を消すということが、何百ぺんも繰り返されたような時代でしたから、そういう理想的な言葉に耳を傾ける人は少なかった。いわゆる兜町気質というものは、一人や二人の力ではどうにもならなかったわけです。

〝株屋〟から〝証券会社〟へ

それが、敗戦後のアメリカの政策によって、証券市場というものが急にクローズ・アップされた。株屋が証券業者になり、また法律も委託者保護をやかましくいうようになりました。一方、産業界でも、いわゆる財閥解体などによって、企業の増資ができにくい。どうしても証券市場を相手にしなければならん。証券業者の力を借りなければならんということで、だんだん証券業者

の仕事が、社会的に重要性をおびてまいりました。そうした背景もあって、証券業者も、やっと水準の上に頭を出せる程度にはなってきたと私は思っております。

大正時代は、石井定七という人がおりましたが、この人は、株でも綿糸でも、なんでも投機の対象になるものは手がけた。米綿の思惑までやる。これは大正から昭和のはじめにかけての、一番の大勝負師であったかもしれません。

昭和になりましてからは、おなじみの佐藤ブーチャンこと佐藤和三郎という男が、終戦直後、非常に活躍したこともあったのですが、むかしのいわゆる相場師というものがかげをひそめ、市場で大勝負がみられることもなくなった。というのも、前に述べましたように証券業者自体の質的な変化で、投機専門というようなことはなくなり、また兜町以外の方が、社長とか専務として入ってこられるようになって、証券業者も大変にお行儀がよくなったといえるかと思います。

だいたい仲買いの寿命というものは、私ども小僧に入った時分は、平均して三カ月といわれました。それが半年になり一年になりまして、終戦のときは一年何カ月というのが平均。そのなかには三十年も五十年もやっている人もあるのですが、そういうのを入れても、平均すると、そんなに短い。いかに生存競争の激しい社会だったかということの想像がつくと思います。店の経営と申しましても、主人が相場を張って、もうければいいが、損すれば立ちゆかないというような経営の仕方だった。

戦後、それではいけない。証券業者もやはり米屋や八百屋のように、確実な商売をしなければ

ならんということで、その方面に政府の援助もあり、経営者自体も、だんだん自覚してまいりまして、どうやら不満足ながら安定した仕事ができるようになったわけです。

■名刺がわりに貸借対照表

私ども証券視察団としてアメリカにまいりましたのは、昭和二十五年の暮ですが、向こうの仲買いのやり方は、ほんとうのブローカーでやっているようです。まあ、もっと奥のほうまで突っ込んだらほかのこともあるかと思いますが、大部分が純粋のブローカー。ですから、私どもが証券会社を訪問すると、すぐ名刺がわりに自分の会社の貸借対照表を出す。見ると、大は大なり、小は小なりに立派な決算をしているんです。われわれも、向うが出すなら、こっちも出さなければいかんだろうということで、さっそく、二十五年の決算書を東京から送らして、それを訪問した時に出すことにしましたが、実にはずかしくて出せる代物ではなかった。

今日、私が入った明治三十八年以来の証券市場というものを考えてみますと、いろいろな変遷がありまして、非常に感慨深いものがあります。仕事の範囲においても、当時、売買銘柄というものは、旧公債と新公債と秩禄公債、この三つが売買の上場物件だった。それから証券取引所の株――いわゆる東株を売買するようになった。

明治四十年頃、東株では商いがレコードを作ると、仲買人に強飯の折詰と酒を一合つけて配っ

てくれたものです。その時のレコードなるものが、なんと八千株か一万株。一番商いができた日が十八万何千株。それが絶頂で、規模もごく小さかった。今日、商いができれば二億株とか三億株とか、一番多くできた日など出来高五億株を記録したこともある。それを比べてみますと、まことに今昔の感にたえない次第です。

証券市場が産業資金の調達と投資家保護という重要な使命を負っているのでありますから、業者も充分その使命に徹して行かねばならぬことは申すまでもありません。今後の証券市場を刮目してご期待下さるようお願い申します。

遠山　元一（とおやま・げんいち）

日興証券相談役。明治二十三年三月埼玉県生れ。小学校を出ると、すぐ上京。兜町に入って半田商店の小僧となる。大正九年独立して川島屋商店を創立、社長就任。昭和十九年、企業統合で日興証券に移り、二十七年まで同社の社長をつとめる。兜町生活六十数年、いまは第一線をしりぞき、シマの最長老的存在である。

誇り高き資本家たち

三井、三菱、住友など財閥発展の秘密は何であったか。日本経済をリードする彼らに学ぶものは？

野田　一夫

■財閥への再評価

私は本来、現代の企業経営を専攻している学者ですが、たまたま先年、外国へ行って向うの学者と接しているうちに、諸外国の学者が、自分自身の国の企業経営ないしは、その基盤となっている社会とか文化というものを知っているほどには、私が自分の国のことを知らないということを痛感しました。つまり、外国に行ってはじめて自分の国の特質、とくにその企業経営上の特質というものについて、目覚めさせられたわけです。

外国人は、われわれの先輩がなしとげた過去百年間の実績というものを、非常に高く評価してくれます。とくに産業とか経済の発展については、非西欧諸国において、初めて西欧的水準の工

業技術をものにし、また、それ相応の産業社会をつくり上げた実績を賞讃してくれるわけです。それにつけても、明治から戦前に至るまで、さまざまな困難な状況のなかで、われわれの先輩が、いったいどういうふうにして産業とか経済を興してきたかという歴史が、われわれの関心事となるわけですが、この場合には当然、この項のテーマである三井、三菱、住友といった財閥の役割が、大きくクローズ・アップされざるをえません。

財閥という問題に関しては、戦後の考え方によると、戦争責任との関連で、その功罪のうち罪の面が非常に強調されていて、私のような年頃の者も、とかく、財閥という言葉にある種の抵抗すら感じていました。だが今申し上げた理由から戦前の経済の発展というものを考えて行くうちに、財閥の功罪のうち功の面を、もう少し仔細に検討する必要があるのではなかろうかという気がしてまいりました。

そこでわれわれ学者としては、何よりもいろいろなデータを検討しなければなりませんが、私自身としては、たまたま学生時代に、小泉信三さんが「百冊の本を読むよりは、百人の人に会え」ということをおっしゃっていたのを、ある本で読んで感銘を受けておりましたので、なるべく現実の体験者にじかに接しようと決心しました。そこでここ四、五年間、戦前に三井、三菱、住友といった財閥の機構のなかでもかなり高い地位におられた方とか、相当際立った役割をなさった方々につとめてお会いしてきました。その結果、私自身がそれ以前に考えていた財閥についての概念が、いかにかたよったものであったかという反省を大いにさせられてきたわけです。

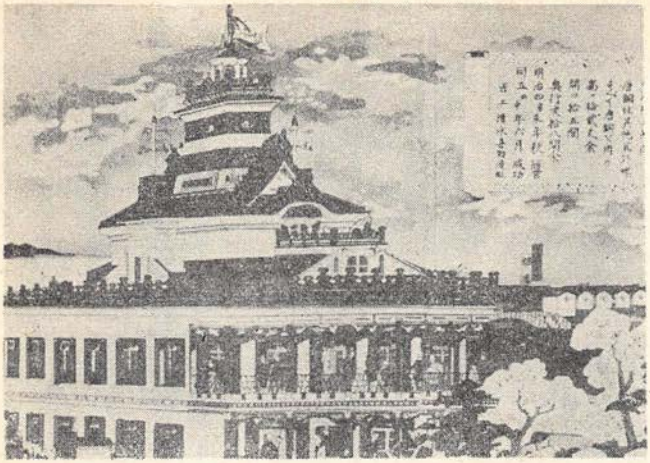
ここでは、戦前の財閥経営者が、どういう理念、どういう考え方をもって事業の経営に携っていたのか。またそれが、現在、非常に困難な状況に当面している日本の事業経営者に対して、どんな示唆を与えるかという点を中心に、話を進めていこうと思います。なお、私の言葉の足らざるところは、私の著書『財閥』(中央公論社)をご一読下さることを、あらかじめお願いしておきます。

■三井の「実績主義」

三井、三菱、住友という三つの財閥は大変大きな資本力、組織力を持ちながら、それぞれ非常に違った気風を持っていたということが、よく強調されます。俗にいう「組織の三菱」「人の三井」などは、これを典型的に表わしていると思いますが、私自身は、三つの財閥の気風を一言で表わすと、三井は実績主義、三菱は集団主義、住友は精神主義という言葉が当てはまるのではないかという感じを持っております。

まず三井の実績主義ですが、これはどういうところからきたかと申しますと、一つの大きな理由に、三井の場合は、物産が非常に大きな比重を占めていたということがあります。

戦前のあの程度の国力を背景に、なぜ商社があのように世界的な活動をなしえたのか。その謎を解きたいために、何人かの古い物産の方々にお会いしましたが、もっとも簡潔に、私にその原因を説明して下さったのは、現在国鉄総裁になっておられる石田礼助さんでした。



三井ハウス　当時の綿絵

石田さんのお話によると、戦前の物産は、ちょうど戦時体制下における軍隊と同じよう考え方で、人の配置を行なった。海千山千の海外のマーチャントを相手にして、多くのハンディキャップを負って日本の商社が戦うためにはこれしかなかったそうです。いってみれば、各営業所の主任クラスにもっとも信頼のおける、もっとも有能と思われる人材を配置して、その人に与えられる限りの権限を与えて、思いきり仕事をさせたわけです。

その当時、主任を統轄する支店長には権限の規程などというものはほとんどなかったといいます。というのは、もともと能力のある者というのは、規程で動くものではない。能力があるというのはどういうことかというと自分自身の能力を自分で評価できることだ。したがって権限の規程などは一切要らない。

まずその人間の能力を信頼し、その人間はまた自分自身の能力を自分で評価しながら、自己規制によって行動したのだと、石田さんはいっておられました。

それでは、最後までそういう権限の規程がなかったのかというと、必ずしもそうではありません。第一次大戦のブームの終り頃、ある支店長が非常に大きなスペキュレーション（投機）を行ない、それが失敗して、物産は当時の金で三千万円ばかりの損害を受けたことがあります。それでどうしても従来のようなやり方ではいけないということから、はじめて支店長に対する規程らしいものができた。しかし、それでも依然として各支店長は、およそそのようなことを気にしないで、自己規制によって思うままに活動していたようです。

石田さんなども、大連の支店長をしていた時、支店長会議の席上、ある重役から「石田は、権限をオーバーして困る」と、とくに名指しで小言をいわれた。これに対して石田さんは、「本社では、いったい権限というものをどう考えておられるのですか。自分自身は、権限というものを一つのスタンダード（基準）だと思う。したがって自分に与えられた権限の幅を十分心得て行動しているつもりだが、それを本社がお叱りになるというのはおかしい。どうも本社は、権限というものをリミット（限界）と心得ているようだ。それなら何十万円という権限のリミットがありながら、いつもアンダーで、つまり非常に消極的に、その半分ぐらしか商売をしない人は、なぜ叱られないのか」と反問したところ、たちまち重役の方が言葉に窮して黙ってしまったと、思い出を語られていましたが、私はそこに、戦前の物産を担っていた第一線の若い管理者たちの心意

気というものを、つくづく感じたわけです。

戦後、権限の規程とか、あるいは権限の委譲ということがよくいわれておりますが、権限をどんなに委譲したところで、その人間が本当にその権限をフルに使いたいという意欲のある人間でなければ、真の効果もあがらないだろう。そういう意味では、戦前の物産というものは、権限の規程があろうとなかろうと、自分の能力を会社のために、ないしは自分自身のために、フルに発揮したいという非常に意欲的な管理者を多数持ち、その人たちの意欲を信頼して、トップが思いきり活動させていた。そしてこの三井物産というものが、三井全体の実績主義、人材主義の原因になっていたのじゃないかという感じを、私は持っているのです。

三菱の〝組織〟の実体

一方、三菱になりますと、よく「組織の三菱」といわれています。それで私は組織図がガッチリできていて、さまざまな規程類がそろっており、何をするにもうかがい制度を通してやらなければいけなかったのだろうと、単純に思い込んでいたのです。ところが昔の三菱の方にうかがってみると、それは間違いだ、組織の三菱というのはそういう意味ではない、むしろチーム・ワークというか、目に見えない心の結びつきがよくできていたと見るべきで、形をもった組織がよそよりもよく整ったというのは戦後になってからじゃないか、といっておられました。

しかし、この点は必ずしもそうではないので、戦前においても、三菱のフォーマルなオーガニゼーションは、ほかの集団よりは非常によくできておりました。ただ、上に立っていた方たちの実感によると、そういうものが組織ではなく、目に見えないつながりが組織であって、三菱全体の集団意識というものが非常に強かったというわけです。むしろ自分自身を規制する規則というのはきわめて簡単だったが、おそらく三菱という集団に対する帰属性においては、ほかの集団よりはるかに強かったというのです。

三菱は、三井に較べると、人材主義というよりは年功主義の色彩が強いわけですが、ある三菱の長老にその事実を指摘したところ「いや、それはやはり一種の能力主義なのだ。毎年毎年、三菱では、一流の大学から最優秀の人材というものを将来の幹部候補生として採って、同じようなコースを歩かせているから、抜擢とか、とび越えての昇進をさせる必要はない。いうなれば、自分より一年早く入ったものは、自分と同じように非常に優秀な人間であるから、それをとび越すなどということは考えられない」と、いかに三菱というものが、目に見えない組織で幹部間の心をつないでいたかということを、われわれは理解できると思います。

■〝結束力〟支える精神主義

住友について、私がいちばん驚いたことは、お会いした古い方たちのおっしゃることが、ほと

んど同じだということです。そのもっとも典型的なものは、「今日、自分が人間としてあるのは住友人として育ったからだ」という言葉です。この住友の精神主義というものがどこからきたかを解くことは、日本人的な経営というものを検討する場合に参考になると思うのですが、その秘密は今もってつかめません。けれども、おそらくそれは、総理事をはじめ幹部の地位に就く方のもっておられる人柄が、時代は変っても、戦前に至るまで幾代も貫かれてきたからではないかと思われます。というのは、住友の人たちが、総理事とか理事、あるいは先輩から、自分はいかに人間としての啓発を受けたか、いかに多くのものを学んだかということをしきりにいっておりますので、私の推察は間違いないと思います。またある人がいっておられましたが、住友の場合、昭和に入って大財閥になってからも、おそらく幹部は、同じような地位にある三菱の半分くらいの報酬しか得なかったし、三井に較べたら足元にも及ばなかった。それを十分知っていながら、住友幹部はだれ一人として気にしている人間はいなかったということです。

そして住友の事業が、いかに世の中の役に立っているかという自信に燃えて、有能な人間が結束して仕事をして行ったという点で、住友の精神主義というものは、徹底したものがあったように思います。戦後、住友はいち早く商事部門を作りましたが、戦前において一般に、住友は工業財閥といわれてきました。例えば第一次大戦後のブームの時、各財閥は大小を問わず、すべて商事部門の積極活動で、短期的には非常な利益を得た時に、住友だけは若手が相当強い念願をもっていたにもかかわらず、総理事以下がそれを決然と押えて、「浮利にはしらず」というような理

念を貫いたといわれています。しかし、当時の総理事であった鈴木馬左也氏の側近であった北沢敬二郎氏なんかにうかがってみると、これはやや誇張された話であるということです。

■鈴木馬左也の〝先見の明〟

当時は、やはり住友の内部でも、相当な幹部までが、今、住友が堅実主義を標榜して、本来ならば絶好のチャンスであるものを逃すということは、住友のためにもならない。商事部門を大いに強化拡充して、ほかの財閥と覇を競おうではないかという声が、かなり強かったらしい。

その時、総理事だった鈴木馬左也氏が一人で、そういう下のうつ勃たる声を抑えたのですが、それはなにも、家憲に基づいてとか、あるいは経営理念に基づいてということではなしに、非常に明察な判断力によってであったことだそうです。

つまり、この時、鈴木氏の考えはつぎのようなものだったといわれます。三井は物産によって、明治初年から商事活動に対して非常に長い伝統を持ち、信用を博し、またそれなりの人材をかかえている。だからこそチャンスが到来した場合それに対応して非常に堅実な収益をあげることができる。ところが住友は、別子銅山の稼動以来、その関連事業を伸ばしてきたが、遺憾ながら商事の伝統がない。だからたまたまチャンスと見えるような時期がきて、いきなりそれをやり出したところで、長く続きはしない。もし、それをやろうとするならば、それなりの長い時間を

かけて、基盤を固めなければならないというわけであった。

その後、例の大正九年のガラ以後、大部分の財閥は商事部門で大変大きな損害を受けました。おそらく本来の意味で損害を受けなかったのは、三井物産ぐらいなもので、三菱商事ですらが大きくいためつけられたし、古河商事その他は壊滅的打撃をうけました。

その意味で、鈴木さんの見通しがまさに的中したわけですが、この年の暮、幹部の人たちを一堂に集めて、鈴木さんが格調高い訓示をなさったあとで、「年寒うして知る松柏の緑なるを」という言葉を引用されたという。松柏というものは夏のあいだ見ていると、ほかの木と変らない緑だけれども、いざ寒い冬がきてほかの木が葉を落とすと、一層青々とあざやかにみえる。

それと同じように、商売においても、真実なものと見かけだけのものとは、ある状況の下においては見分けがつかなくても、結局その状況が変ってくれば、真贋はすぐにはっきりしてしまうものだ。従って、どんな好況期にあっても、おのれ自身の分というものをよく見きわめて商売をやって行くということが結局、事業に大成することなのだということを、諄々と諭された。

こういうように、日常折にふれて、すぐれた先輩が後輩を諭し、また育成するということを、住友ほど丹念にやった財閥もなかったような気がします。戦後、三財閥のなかでも、住友の結束力がもっとも強いとされていますし、またグループとしての発展力も抜群のものがありますが、これは、戦前につちかった精神主義というものが、戦後において成果をもたらしたものであるとも考えられるわけです。

■三財閥発展の秘密

以上のように、三井、三菱、住友というのは、ある意味でそれぞれ違った個性を持っていた財閥ですが、これら三つのものを貫いているものは何かということになりますと、やはり一種の能力主義ではないかと思うのです。戦後の日本では、それもとくに比較的年の若い人間は、日本では、伝統的な年功序列が能力というものを否定していたと考えがちです。しかし、この考えは、過去の日本の実情を無視した非常に浅薄な考えであるように、私には思えるのです。

戦前においても、三井、三菱、住友はいずれも年功主義であると同時に、能力主義というものを貫き得たのではないか。西郷南洲の言葉に、「能あるものには地位を、功あるものには禄を」というのがあるそうですが、これは報酬の中で金銭的なものと非金銭的なものとをはっきり区別した考えです。つまり「人はなぜ働くか」という問題を、戦前の財閥の指導者というものは、今日よりもっと真剣に考えていたのではなかろうか。

今日、資金は労働の対価であるというようなことを簡単に申しますが、果して賃金というものだけが、労働の対価だとしたら、今日程度の賃金で、日本人がかくも勤勉に働くでしょうか。ある会社がどんなに給与条件のいい会社であったとしても、おそらくその会社が払い切れるような賃金では、人間というものはそれほど意欲的には働かないに違いありません。

従って、給与以外に、給与という形をとらないさまざまな報酬が、いろいろな形で集団から個人に対して与えられていたというのが本当だろうと思います。

例えば、地位とか、仕事のやりがいとか、将来の保証とかで、そういったさまざまなインセンティブが、非常にキメの細かい配慮のもとに、特定の人間に与えられていた。それに対して、個個の人間というものが、集団に対する献身を思い切りやってのけた。それで集団が、全体としての他に比べて非常に意欲的な活動を行ない、成果をあげることができたのではないだろうか。

その意味で、三井、三菱、住友といった財閥が、集団として目覚ましい発展をとげたのも、個人の貢献に対してどんな形式で報酬を払うかという、非常に高次元の人事管理を実施し、その成功によって、卓抜した人材、あるいはそれなりの能力を持った人が、集団に対する献身を行ない得たからだと、私は感じております。

野田　一夫（のだ・かずお）

昭和二年六月生れ。同二十七年東大文学部社会学科卒業。三十年立教大講師、三十三年同大助教授となる。その後三十五年から三十七年まで、米国マサチュセッツ工科大の客員として経営学を研究。四十年立教大教授、現在は東大講師を兼ねる。著書に「日本の重役」「戦後経営史」「財閥」などがある他、米国の経営学者ドラッガーの一連の著書翻訳者としても知られている。

三代男の花道

栄光の座を去る男の胸中には……はじめて明らかにされる財界人引退の秘話

小島　直記

■引退のタイプさまざま

私は主として、財界人の現役からの引退の姿を、伝記的視点でとらえまして申し上げたいと思います。財界人の引退の姿には、大きくわけまして二通りあると思います。一つは自分の意思による引退。もうひとつは意思のいかんを問わず、事件、その他外部の条件によって引退するものです。そしてこの意思による引退にも四十代、五十代という、六十前の引退と、六十を過ぎてからの引退という二つの型があります。具体例で見ますと、前者は住友の伊庭貞剛さん、後者の六十代の引退では三井の益田孝さんなどが、きわめて意味の大きな実例を残されました。

一方、自分の意思に基づかない引退には、第一に肉体的条件によるもの、突然の病死などで引

退のやむなきに至ったもの。第二に、経営破綻の責任を負わされて、自分自身の意思にそむいて現役を去る姿。第三は、経営の成績はよろしいけれども、ある突発的な事件が起り、そのまきぞえになって、いわば、とばっちりで引退する姿があります。この外部的条件、とくに肉体的条件で突然現役を去られたお方として、もっとも参考になるのは、住友におられた鈴木馬左也さんであろうと思います。それから経営破綻の責任をとって引退された方については、わりあいに伝記がありません。これは一般的に財界人の伝記というのは、大変言葉が悪いのですが、〃勝てば官軍〃といったところがございまして、経営破綻の責任をとって現役を去った人については、あまり書かれていない。ですから、そういった例の人をあげるのはむつかしいのですが、三井物産の山本条太郎さんは引退したけれども、後にまた復活したということで、立派な四冊の伝記が出ています。この方が三井物産の常務の時に、シーメンス事件（大正二年）のとばっちりでおやめになった。これが事件のとばっちり型の引退です。経営破綻といたしましては、北浜銀行の頭取でありました岩下清周さんが、その典型的な例ではなかろうかと思います。

さて、そのほかに、これまでのタイプをミックスした型、つまり、必ずしもやめなくてはならない事情はなかったけれど、一つ問題があって、その問題にちなんで、自分の意思でやめるという型があります。これは、財界の大御所といわれました渋沢栄一さん、それから近くは、松永安左エ門さんなどが、実例になろうかと思います。

それでは、今申し上げた方々の、具体的な引退のいきさつについて述べてみたいと思います。

最初の伊庭貞剛さんですが、この方は、五十七歳のときに住友の総理事という、住友財閥の最高の地位におられたのですが、まだ自分は元気なのに、部下のなかから四十三歳の鈴木馬左也さんを後継者にして、いさぎよく引退してしまった。伊庭さんという方は、私が日本の財界人のなかで、だれを尊敬するかといわれましたから、まず第一番目にあげたい人です。

■めくら判の大家

伊庭さんは、最初は裁判官だったのですが、三十三歳の時に裁判官をやめようと思って、おじさんに当る広瀬宰平さんのところに挨拶に行った。この広瀬さんは、明治維新の変動期に、住友財閥の中心的存在として、よくあのピンチを乗り切った方です。「まだ身をひくのは早い、日本はこれから大いに実業の面で発展しなければならない事態にあるし、住友は、その活躍にふさわしい場を提供するだろうから住友に入れ」といわれて、伊庭さんは住友で働くことになった。このように、三十三歳で、将来を約束された司法官の職を去ろうとされたほどの方ですから、もともと浮世の地位などには、執着がなかった方だったのだと思います。

さて、伊庭さんが、住友に入ってまもなく、別子銅山で大きなストライキが発生しました。その時、争議鎮圧の重任を負わされて赴任したわけです。今日でいえば労務対策です。しかし、伊庭さんは、赴任にあたって別に作戦といったものは立てないで、ただ、妻子のことを、自分の友

人のある僧侶にいっさいたのみました。いわば死を決してのぞまれた。

現地に行っても、別に政策らしい政策を見せるわけではなく、山のふもとに庵をむすび、ただ静かに臨済義玄のあらわした臨済録を読んでいた。彼は、これを非常に愛読していたのですが、これが経営者としての日常にことごとく表われていたようです。そして、いつの間にか人間的な感化で、山の争議をおさめたということです。そのように禅宗の鍛練をつねに心がけていたために、伊庭さんの言行にはまことに禅的なものがあらわれているように思います。

その一つは、盲判の大家であったこと。「盲判も押せないような書類なら作らせない方がいい。盲判のおせないような書類を作るような部下なら、はじめから使わないほうがいい。会社の重役が命がけで押す判というのは、せいぜい二つか三つだ、五つあったら多すぎる」というようなことをいっておられた。伊庭さんが命がけで押した判は、住友財閥の中核となった住友銀行、住友伸銅所、住友倉庫を作るために押したものだったようです。

それから、常にいっていたのは「人間としてもっともだいじなことは、後継者を選ぶことだ。そしてさらにだいじなのは、その時期を選ぶことである」ということです。また「後継者にいつまでも事業を引き継がないものは、自分が死ぬことを忘れた人間だ」ともいっている。

そういう思想の持主でしたので、五十七歳のとき、部下の中から、役人出身で四十三歳の鈴木馬左也さんを総理事につけ、自分は引退したのです。本人は、八十歳まで元気で長生きしています。普通ならば、なかなかそうは行かない。

次に六十歳すぎの引退では、三井物産の益田孝さんが後継者の選びかたで、参考になります。選ばれたのは、三井鉱山の仕事を担当していた団琢磨さんでした。

そもそも三井は、明治二十三年頃、非常なピンチに陥りましたために、井上馨さんが中上川彦次郎という福沢諭吉の甥にあたる人材を入れた。その中上川さんが、当時のもっとも新進の思想的持主である福沢門下生を多数スカウトした。これによって三井の改革、もっと具体的にいえば、藩閥政府、明治維新以来の役人とのいろいろな関係を絶縁しようとしたわけです。ところが、これがまた、慶応閥というか、三田系というか、一つの勢力ができて、またいろいろ問題が出てくるようになった。

財閥解体で運び出される三井，三菱の株券

そこで益田さんは、第一に学閥のない男を選ぼうと考えた。団さんは、アメリカのマサチューセッツ大学出身だから学閥に関係がない。第二の理由は、団さんが鉱山学の専門家で、技術的知識の持主である、ということでした。これは、当時、日本の資本主義は日清、日露の両戦争を経て、軽工業から

重工業へ体質を変えて行った。そういう時代の流れにのって行こうとしたわけで、ここで日本の財界は、初めて技術系出身の指導者を持ったのです。

益田さんが団さんを後継者にした第三の理由は、国際的視野の持主であったこと。これは、益田さんの伝記も物語るように、体験から痛感していたことだと思います。

■鈴木馬左也の〝永すぎた春〟

益田さんは十五歳の時から幕府につとめ、幕府が横浜開港延期についての交渉で使節をヨーロッパへ派遣した時、お父さんも会計係として随行したので、益田さんもその家来として渡欧。十五歳でヨーロッパを見ているわけです。益田さんのヨーロッパ紀行については、昭和十四年に出た「自叙益田孝翁伝」におもしろく語られております。

田舎の島国から行って絢爛(けんらん)たる十九世紀の欧州文明にふれた一行は、いろいろ失策もするのですが、「同じ人間であるというのに、かくも違うものか」といってみんな泣いたと書かれております。ホテルに入ったところ、ものすごく狭い部屋に通された。一行の人々はいきり立って「わが国がいかに小国なりといえ、こういう小さい部屋に通すとはなにごと！」と刀の柄に手をかけて怒っていると、その小さな部屋が動き出した。後で聞いて見たらエレベーターであったなどという珍談をかさねながらも、そこに文明の格差をしっかり体につけて帰国したのです。

益田さんは、その後明治維新という激変にあって禄は全部とられ、英語ができたので、横浜で通訳などをして口銭を稼いで生きていた。そのうち当時、今でいう大蔵次官だった井上馨にスカウトされて大蔵省四等出仕になったのですが、井上さんが明治六年に役人をやめて、先収会社というものをつくると、益田さんも、副社長としてこれに参加、やがて、明治八年にこれが閉社されると、九年にはその残党で三井物産を作り、益田さんは社長になった。時は二十八歳でありました。やがて世界中を三井物産の旗でおさえるのです。

このような体験から、非常に徹底したリアリズムで物事の本質を見つめ、必死に生きぬいてきた人ですから、一つのすぐれた使命感と現実感覚があったために、そのような後継者の選び方をしたのだと思います。

次は、自分の意思によらない、外部的条件による引退の例です。まず肉体的条件でやめた鈴木馬左也さん。鈴木さんは、四十三歳で総理事となり、その後ずっとその地位を動かなかった。歌人であり、住友の常務理事までした川田順さんが「住友回想記」という本の中で、鈴木さんがあまりにも総理事の地位に長くいることにたいして不満があったと書いています。しかし鈴木さんは、その地位に未練執着があったのではなく〃乃公出でずんば住友の興廃いかにせん〃というような使命感があったために続けられていたのだそうです。これが幸か不幸か、六十二歳の時、脳溢血で長逝され、ようやくその椅子があいたのでした。

その後をついで総理事になったのは、これも裁判官出身の中田錦吉さんでした。中田さんは、

すでに五十七歳になっていましたが、総理事になって第一にされたことは、停年制の採用でした。重役は六十歳、一般社員は五十五歳という停年制を作って、自分自身も三年間椅子をあたためただけで、いさぎよく、次の湯川寛吉さんに渡したのです。しかし川田さんの批評によると、この中田さんの短い春は、鈴木馬左也さんの永すぎた春に対する批判というか、そういう意識のにおいが濃いということをいっています。

〝悲劇の経営者〟たち

さて次は経営破綻の場合ですが、北浜銀行の岩下清周さんの例を申し上げます。これは、大阪にあった大阪日日新聞という夕刊だけの赤新聞が、岩下さんの関係していた大阪軌道という電車の会社を攻撃しはじめ、それが発展して北浜銀行の経理状況についていろいろ暴露記事を掲げ、最後には、岩下さん自身に対する個人攻撃をはじめたのです。

岩下清周さんという人は、最初三井物産に入り、その後、三井銀行に移りまして中上川彦次郎さんによって、大阪の支店長になった。前任の支店長は、毎日毎日巻紙に報告書を書いて、本店の中上川さんに報告するというのが唯一の仕事。夜は名士と紅灯の巷で交歓し、大阪財界の裏面事情をさぐるというのが、その仕事だったようです。

しかし、この岩下さんはぜんぜん違った生き方をした。まず人を見て金を貸す、そして、また

人を育成するということをしている。

岩下さんの方針のもとに大成されましたのが、阪急コンツェルンを築きあげた小林一三さん、そのほか豊田佐吉、松方幸次郎、森永太一郎といった人たちが、岩下さんのおめがねにかないまして、徹底的な銀行のバック・アップのもとに、大きな事業家になったわけです。

ところが、そういうような個人的な庇護、育成ということを、逆にとられまして、個人的な私情による銀行業務の背任があるというように新聞が書きたてたのです。そのため、当時の大阪の預金者が、不安がりまして、とうとう北浜銀行は取付にあい、頭取の椅子を去るようになったのが、岩下さんの五十七歳の時でした。

ところがそれだけで終らず、翌大正六年になりまして、横領、公文書・私文書偽造行使、商法違反というような四十二件の罪状をもって起訴されまして、懲役十五年の求刑を受け、けっきょく罪状として確定したのは七件、懲役三年に服して、晩年は富士の裾野で隠棲されました。

それから山本条太郎さんの場合は、四十三歳で三井物産の常務になった。四十八歳の時にシーメンス事件がおきましたが、この場合はシーメンスではなくて、ちょっと質が違ったものです。英国のビッカース社と日本海軍との、とくに巡洋艦「金剛」の建造をめぐる贈収賄問題ということにからみまして問題が起きた。

陸海軍の担当は岩原謙三常務でしたが、たまたま山本さんは三井物産の唯一のキレものであるということで、三井の顧問をしていた元造船総監の松井鶴太郎という人から、その問題とは関係

なくて一万五千円の金をもらっていた。そのために、事件に関係ありということで、懲役三年を求刑されてしまった。ところが、それからさらに争っているうちに執行猶予がつき、さらに皇太子殿下（今上陛下）のご成婚記念で青天白日の身になり、復活したわけです。

最後に、外的条件と、自分の意思と両方からんだ例として、松永安左エ門さんと渋沢栄一さんを上げましたが、まず渋沢さんの場合について申し上げます。渋沢さんは、明治のスキャンダルとして有名な大日本製糖の破綻事件のときに相談役をしておられた。

もちろん会社の経営内容にはタッチしてなかったのですが、事件の起る明治四十二年の前年、四十一年の総会で、株主から「どうも、経営内容があやしいのではないか、特別の監査委員会を作って厳重に監査してはどうか」という意見が出された。

その時、渋沢相談役が立って、「自分は、現在の大日本製糖の経営者たちは、完全無欠であるとは思わないけれど、そのような非常手段に訴えてまでやらなければならん事情はないと思う」ということをいった。ところが、翌年、新聞記事がもとで、いわゆる砂糖戻税にからみ贈収賄事件などが暴露された。それで責任を感じたのでしょうか、渋沢さんは七十歳で財界を引退。五年後にもう一度復帰しましたが、九十二歳まで長生きされたから、まだまだお元気だったわけです。

■引退したといえども

松永安左エ門さんの方は、六十四歳で引退されました。

昭和十二年に電力の国家管理問題というのがありました。

時の逓信大臣は永井柳太郎でしたが、実際の立役者は電力局長の大和田悌二さんでした。その大和田さんを中心とする、いわゆる革新官僚一派と、東邦電力社長の松永安左エ門、大同電力社長の増田次郎、東京電灯の小林一三、その他五大電力が必死に争いましたが、ついに政府側に押しきられて、日本発送電という会社ができたといういきさつがありました。

松永さんは、五大電力側が敗北だということになると、非常に立腹されまして、東邦電力をはじめ、社長、取締役等の約百ほどあった会社の役職を、いさぎよく捨ててしまい、隠居の身になられたのです。

ところが、翌十三年の二月、長崎で産業振興の大講演会で九州各県知事をはじめ、官、政、財界の人々のなみいるなかで「産業振興というのは、諸君各位がそれぞれ発憤努力する以外道はない。官庁に頼るなど愚の最たるもので、官僚は人間のクズである」という、まことに痛烈なる演説をして満場騒然となったひとこまがあったりしました。しかし、現役を去っていたために戦後のパージを免れましたが、七十五歳でまた財界に復帰され、今日のカクシャクたる姿は、ご承知

のところです。以上がだいたい財界人の引退のいろいろなタイプでございます。

結局、いろいろ総合しまして、それぞれの運命はありましょうが、つまるところ自分との対決だという気がいたします。安岡正篤先生がいっておられるように「人間、おりるということはむつかしいことだ」ということを、この財界人の姿からお考えいただければ幸いです。

小島　直記（こじま・なおき）
大正八年福岡生れ。昭和十八年東大経済学部卒業。芥川賞候補作「人間の椅子」など社会派作家として注目される。また経済史家、伝記作家としても活躍している。
著書は「三井家の人々」「日本さらりーまん外史」など多数。

サラリーマン三代

日本最初のサラリーマンは坂本竜馬であった!?
——日本〝ホワイトカラー〟百年の変遷史

坂本　藤良

■〝実力主義〟の明治

題は「サラリーマン三代」ということになっておりますが、私はその前にもう一代あると思うのです。といいますのは、サラリーマンの元祖は、実は坂本竜馬であるという持説を、私は持っているのです。

坂本竜馬は、亀山社中という今日の言葉でいえば株式会社に相当する組織を作りましたが、この亀山社中が土佐藩その他から資金をあつめて貿易をやって、薩摩藩の名目で銃砲を輸入し、それを長州藩に渡すといったような経済的基盤のもとに、桂小五郎と西郷吉之助の手を結ばせた。この坂本竜馬の作った亀山社中こそ、日本の最初の株式会社であり、そのメンバーというのは、

日本最初のサラリーマンであったということになるわけです。

この坂本竜馬から金を頂かり、後藤象二郎から土佐藩の資産・負債の譲渡を受けて、それで財閥を作ったのが、いうまでもなく岩崎弥太郎です。この岩崎弥太郎の頃のサラリーマンというものを見ますと、これは今から見てたいへん驚くべき実力主義なのです。最近日本では、日本の企業は年功序列だ、終身雇用だというようにいわれておりますが、少くとも明治時代においては、年功序列どころではなく、驚くべき実力主義であったわけです。

その証拠はいろいろあるのですが、たとえば、三菱の日記にあたる「三菱社誌」にも、こういうことが記されております。森田晋三という当時の管事――これは、トップの四人で、今の企業でいうと常務クラスですが、この人がちょっと問題を起した。するとたちまち平社員にしてしまった。それとは逆に、非常に有能な人がいると、どんどん抜擢（ばってき）している。

あるいは、百姓、町人の出身も武士の出身も、全部同じに袴をぬがせて、前垂れや三菱のマークを背中につけたハッピを着せる。ところが石川七財という武士の出身の人が、これを着せられるのがいやでいやでしようがない。それで岩崎弥太郎に訴えたところが、「それは確かにいやだろうが、しかし事業のため、金のためにはやらなければならない。君にこの扇子をやるから、お得意先なんかにあがった場合は、この扇子をよく開いて、この扇子におじぎしろ」といって、扇子を一つ渡した。この扇子を見たら、小判が一つ張りつけてあったという話があります。

それから社規、社則というようなものを、明治十三年頃に作っておりますが、これを見ても、

責任の所在を実にはっきりさせております。たとえば、第一条の、当社は会社という名前をつけているけれども家業である。すべての責任は社長一身に帰す、というようなことから始まって、したがってその利益も社長一身のものである。しかし、大いに利益があがったならば、大いに賞与を出す。また損失が出たならば月給を減らす、というふうに、非常にはっきりした社規を作っております。

こういった実力主義的なやり方は、決して三菱だけではありません。

三井の場合は、中上川彦次郎のところに、とくに慶応出身の若手の俊秀が集まりまして、この人たちが非常に優遇された。

その頃の月給は、官庁が非常に高くて、局長クラスになると三百円。ところが一般の企業の場合には非常に少なくて、銀行の支店長クラスになっても五十円。これを中上川彦次郎が大幅に上げた。自分の月給も同時に上げて、中上川は当時「東洋一のサラリーマン」といわれたものです。

またこれと同時に、組織の近代化をやりまして、この頃「取締役」などという名前を作っております。もっともこの時の「取締役」というのは、だいだい課長クラスで、部長は「元締」重役になりますと「大元締」という名前で呼んでおります。

そして明治二十八年には、企業のなかで試験制度を採用しております。これは「使用人芸術試験規則」という名前なんですが、芸術というから音楽かなんかやるのかと思うと、そうではなくて、筆蹟であるとか、英語であるとか、簿記であるとか、そういう試験をやって、合格したもの

を登用した。しかも、その試験の結果は、全体に公表するというやり方です。だから今日から見ても、きわめて近代的な実力主義の行き方をしていたわけです。

大きい福沢諭吉の影響

この三井には、とくに慶応からたくさんの人が入っていましたが、当時のサラリーマンに非常に大きな影響を与えたのは、何といっても福沢諭吉だろうと思います。福沢諭吉はいろんなことを書いて残しておりますが、たとえば、日本人の素質は、世界的に見ても非常にすぐれていることを強調しております。そして、合理的な思考をサラリーマンは持たなくちゃいかんということで、盛んに「学問のすすめ」その他を書いたわけです。

ところで、この合理的な思考という点でおもしろいと思うのは、日本で最初に洋式の簿記を紹介したのは、実は福沢諭吉なんです。これには若干の異説もありまして、大蔵省の銀行簿記というのがいちばん最初の本だという説もありますけれど、私の調べたところでは、福沢諭吉のほうが約半年ほど早く簿記の本を書いている。

だいたい貸借対照表というのは、足りないほうに足すことによって、借方、貸方を合わせるという考え方で、この足し算によってバランスをとるというのは、ある意味では非常に西欧的なものの考え方です。福沢諭吉はこれを初めて日本に紹介し、普及しようとした。一方で西欧的な計

数管理および計算思考を導入し、他方「学問のすすめ」に象徴されるように自己啓発を唱導した。

この福沢諭吉によって教育された人たちが、つぎつぎと実業界に入ってサラリーマンになったのですが、この人たちが大正時代に入って指導層になる頃になると、だんだん企業の性格が変ってきたのです。どういうふうに変ってきたかというと、たとえば福沢諭吉に養成されたサラリーマンの一人であり、のちに経営者として活躍した武藤山治を見るとよくわかります。

武藤さんは、大正時代における日本財界の指導者といっていいと思いますが、武藤さんは明治の末頃から非常に近代的な行き方をとりました。日本で初めて社内報を作ったのは、鐘紡なんです。「鐘紡汽笛」というのと「女子の友」という二種類を出した。また提案制度を初めて作ったのも、やはり武藤さんといってもいいと思います。明治三十六年に注意箱というのを作りまして、意見のあるものはどんどんこの注意箱に入れてくれということを書いています。

それから共済組合を、一橋大学の上田貞次郎教授と相談して、初めて作った。これは女工さんから、毎月給料の三%をとって、そのかわり病気とか死亡、退職の場合などに救済する。退職したら年金を与えるという制度です。こういったことを次々とやりまして、鐘紡は非常に職工の待遇がいいといわれましたが、しかし、この武藤さんの基本的な考え方には温情主義、あるいは家族主義といったものが非常に強く出ている。

つまり明治時代の実力主義が、大正時代に入って次第に温情主義的になって行き、その温情主義と結びついて年功制度、終身雇用というものが、だんだん日本の産業界を支配するようになっ

てきたのです。

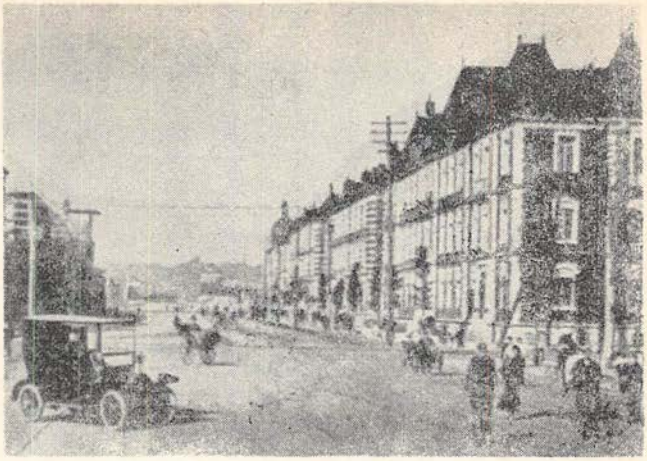
■武藤、河上の〝温情主義〟論争

この温情主義について、私が非常に興味を持ったのは、武藤さんと河上肇さんとの論争です。というのは、武藤さんがＩＬＯの使用者代表としてアメリカにまいりました時、「ダイヤモンド」に論文を書いたわけです。

「近来学者論客の中には、温情主義排斥の議論を出す者多し。かかる言論は、西洋においてもあまり聞かざるところなり。余は、学者論客の温情主義排斥論は、この問題を権利によって解決することが労働者の利益なりと解するによるものと思うも、かくのごときは、学者論客の主張が、単に西洋の労働者とわが国労働者との境遇を同一視することによりて、一の誤謬に陥れるものなり。西洋の労働史には温情主義の時代なし。故に労働者は権利を主張する」

というような書き出しで、

「近来学者論客中、しきりにわが国資本家を攻撃する者あるも、余は、これをもって労働者諸君のため、思慮あるわざと考えず。わが国資本家のごとき、なかには強欲非道なる者あれども、大部分の金持は西洋と違い、まったくくみしやすき者のみにて、諸君は学者論客の言を信じ、真正面にこれを敵視するのははなはだ不利なり。よろしくこれと協調して、諸君の目的を達するを可



明治末年頃の馬場先門付近　右は三菱一号館

とす。ことに日本の資本家は西洋と違い、家を愛し、諸君のなかにもずいぶん主人に見出されるか、または美男子なれば家付の娘に懸想されて、他人の身代をやすやすと受け取りて、急に主人となる者少なからず」

というようなことを書いている。

ところが河上さんが、これに対して「社会問題研究」という自分で出している雑誌の第十八冊で反論を書いている。まずロバート・オウエンが一八六〇年の恐慌の時に、事業を中止しながらも、一人も職工を解雇せず、賃金全額を四カ月の休業期間中払ったという事実をあげて、

「武藤氏によれば、わが国資本家は西洋と違い云々であるが、しかしそれは、はたしてどう違うのであるか。私は試みに刻下の恐慌時における日本の紡績職工に向って、次のごと

く尋ねてみたいと思っている。今の日本に数千の職工を数カ月間も遊ばしておいて、一文も差し引かずに賃金の全額を支払ってくれる資本家が、およそ幾人あるであろうか。（中略）諸君は学者論客の言を信じられないかもしれないけれども、内々老婆心をもって諸君（労働者）に次のことをご注意しておく。諸君が資本家と協調して、その家付の娘に懸想され、他人の身代をやすやすと受け取りて、急に主人となるためには、実は美男子たることを要件とするのだから、諸君は労働問題に対する態度を決定する前に、いちおう鏡に向かって自分の顔を検査されなければならないのである」

こういう反論を書いております。

これがキッカケとなって、その後何回にもわたって両者の応酬が行なわれ、この〃温情主義〃をめぐる論争は大正十年まで続いたわけですが、私は、この問題は両方とも正しいが、両方とも間違っていると思うのです。といいますのは、確かに河上さんのいうように、温情主義というのは日本だけのものではない。外国にもあった。しかし外国では、やはりある一定の時期でもって、資本主義の高度化とともにそれが薄くなっていく。日本の場合には、むしろ明治末期から大正期において、これがしだいに強くなり、そしてさらに今日まで、そういう考え方がしだいに固定化してきているというところに、外国との違いがあるわけです。だから、その点では武藤さんも、河上さんも間違っていると思うのです。

ともかくこういったような論争があって、温情主義というものが、大正期には論争の中心にな

りました。上も下もこの問題を論じました。そして大正期は、明治時代の厳しさというものが次第に失われて、サラリーマンの中には、温情や年功に頼るという気風が、だんだん生れてきた時代であったと思うのです。

■休まず、遅れず、仕事せず

昭和に入ると、この年功序列といった行き方が非常に固定し、弾力性のないものになってくる。それに重役と平サラリーマンとの違いというものが、非常に大きくなってきます。

たとえば、池田成彬さんがまだ重役になる前、こういうことを書いている。それは昭和のはじめですが、

「われわれのほうは、半期で千五百円から八百円だが、重役ともなれば、伴食重役でも三万円はとる。いちばん上のほうは六万円もとる。これでは、少し不公平ではないか。重役は昼の十一時頃きて、議案に判コを押すと、食堂に行ってしまう。食堂で二時間ばかり話し込んで、もどってきて、また判コを押すと三時半か四時に帰って行く。仕事のことなどまるでわかっていない。ただ判コを押すだけだ。仕事はこちらがやっていて、それで千五、六百円と五、六万円とでは違いすぎる」

それから昭和十七年になりますと、重要事業所労務管理令という法令が出ておりまして、この

内容を見ますと、全員、年一回の昇給ということが規定されています。したがって年一回、全員が必ず昇給するという制度が、法律的にここで確認されている。

かつて明治時代には成績をあげれば、どんどん抜擢された。それが、昭和時代には成績をあげても、それほど抜擢されない。そのかわり失敗すると、その責任を問われる減点主義になってくる。したがって休まず、遅れず、仕事をせずといったふうにやっていれば、だんだんと地位も上がり昇給もするといった考え方が一般化してくる。

学歴無用論の登場

ここでおもしろいと思うのは、明治の実力主義が現在の年功序列主義に移ってきた経過と、学歴というものに対する考え方とが、実は逆の方向に向っているということです。

明治の初め頃は、たとえば、「学問は身を立てるの材本」というような言葉があります。また「学問のすすめ」でも、学問の重要性が説かれている。あるいは明治二十二年の朝野新聞によりますと、大学の卒業試験の順番で、会社の給料を決めるということすら行なわれている。

ある意味では、この時代は、学問あるいは学校で勉強するということが、実力ともつながっていた。実力主義が基調であるけれども、そういう意味で学問というものが、実力の基礎として評価されていた時代です。ところがそれがだんだん変ってきまして、明治から大正に移ると学歴に

対する批判が起り、学問についてすら懐疑的になってきます。

大正四年の「会社員物語」という本を見ますと、

「日本銀行とか横浜銀行とか、あるいは三菱や郵船のような官僚主義をおびた大会社となると、閥族の跳梁がはなはだしいから、才能ある男でも学閥に圧迫されて、発展の道がなくなるんですか。こんな大会社になると、まず学識の程度で階級を律するんですか。僕のところでも、その弊が近頃出てきて困るんですが、三井物産は元来人材主義でしたのが、高商閥で固めるようになってきたし、三菱なんぞは初めから赤門の出身が、その昇給の割合が違うんだそうです」

と、学歴主義に対して批判を加えている。

また昭和二年頃、前田一さんの書かれた本に「サラリーマン物語」というのがありまして、当時この本はベストセラーになったんだそうですが、この中にこういうことが書いてあります。

ある会社で「君は成績がよくないが、どうした」と口頭試問できかれた。「実は自分の思っている女と添えず、義理で恩人の娘と結婚させられた」と、あつあつのロマンスを諄々と説ききたりて、「しかるが故に煩悶を続けて、勉強ができませんでした」と答えた。試験官英断して曰く「真剣な恋のできる男は偉い」それで採用になる。それから「君のもっとも尊敬する人はだれか」「妻です」と即座に明答、試験官「妻を尊敬する男はどっかとるところがある」と見事に及第。

前田さんの本には、こういう例がたくさんあがっています。要するに、学問よりもハラだ。人間だというようになってきたことがはっきりわかります。

ですから、今日の学歴無用論も、その歴史的な経過を見ると、位置づけがよくわかります。最初は「学問のすすめ」である。明治時代には、学問というものは実力と合っていた。ところが、それがだんだんと現実と離れて、学問じゃなくて学歴のほうが重視されて、だんだんと日本のサラリーマン社会というものが年功序列に変ってくる。すると今度は、学歴に対する批判が非常に強くなる。だから進歩的な人は学歴無用論を主張することになるというわけです。

したがって、日本のサラリーマン三代をふりかえってみると、年功序列を固定的に考えるのは大変な間違いであって、かつての実力主義をはっきり再確認する必要があるのではないか。そういう意味で、サラリーマンの問題を考える場合、いわば今は幕末である、坂本竜馬の時代である。これから明治の実力主義の時代がやってくる、またやってこさせなければいけない、と考えることができるのではないかと思います。

坂本　藤良（さかもと・ふじよし）

大正十五年生れ。昭和二十六年東大経済学部卒業。五年間の特別研究生を経て、三十一年より慶大、日大などの講師をつとめ、現在、日本経営政策学会理事長のほか、経済審議会、産業構造調査会の専門委員、東横、市川製作所など数社の取締役を兼ねる。著書は「近代経営と原価理論」「経営学入門」など四十冊におよぶ。

三代文士かたぎ

五円の原稿料に感激した明治の文豪、豪華別荘を建てる現代作家——その文士生活の裏おもて

今　東光

■〝もぐり〟で文学修業

私は、川端康成だとか、尾崎士郎とかといっしょに文学を始めたわけですが、その当時まで、大学では、いわゆる法科万能でして、出でては国家を料理するという調子で、われわれのように文科に行くとか、文学をやるというものは、あばら骨が一本足らないように扱われたものです。しかし、われわれ自身としては、たとえ、陋巷に朽ち果てるも悔いることはない、貧乏も覚悟のうえでやろうじゃないか、というのが合言葉でした。

それにしても、私なんかは、放蕩無頼のために勘当になっているし、中学も中退、というと聞こえはいいんですが、学校の方からお断わりをくったようなわけでして、その後は苦難の連続で

した。しかし、窮すれば通ずるで、当時、ありがたかったことに、どの大学でも、出入りなどはまったく自由だった。

たとえば早稲田などでは、坪内逍遙先生がシェークスピアを講義するというような時は、早稲田の卒業生、あるいは早稲田にぜんぜん関係のない、一橋あたりを出たような人までが、会社の帰りとか、会社を休んでまでシェークスピアを聞きに行くという調子です。大学当局にしても、自分のところがそういう有能な教授をもっていることは誇りであり、これがまた学問の道であるというんで、何人のためにも門戸を閉ざしてなかった。ですから、私どもは、どの大学も、みんな首をつっ込んだものでした。

一高時代は、一年の五月頃から、川端と友達になって、こっちは学校を放り出されて行くところがないから、毎日毎日一高の寮に行ってへばり込んでいる。なまけるやつは、みんなぼくの部屋？　に集まってきて、トグロを巻いて、文学論をかわしたり、私が親方になって猥談をする。

そうしているうちに、夜になると、おもしろいもので、誰かいないやつがいるんです。空いた蒲団があるから、そこに寝ちまう。それに寮の食堂へ行くと、だれか休んでいるやつがいるから、その分を横取りするといったぐあいで、別に学校当局ないし、文部省にも損害をかけなかった。というふうにして、おもしろおかしく三年を過ごして、彼らとともに、大学に無事入学？　ということになった。

ところで、私どもの時代までは、大学生はみんな金ボタンでしたが、明治四十年代の文科の写

真なんかみると、谷崎潤一郎さんだけは、縞の着物に縞の羽織の着流しで、そのうえ山高帽をかぶって写っているんです。また慶応では、佐藤春夫が、金ボタンに、塾の、あのツバのペッとなった帽子をかぶるべきなのに、鼻メガネをかけて、山高帽をかぶっていた。それに顔かたちが似ているんで、佐藤はスペイン犬という仇名があったが、本人は大真面目なんです、紳士のつもりでいたんですから。

この山高帽じゃないけれど、妙なことに、私の仲間で、一高から東大に入った連中は、川端康成をはじめ、みんな角帽をかぶらない。ほかの高等学校からきたものは、うれしそうに、真新しい角帽をかぶっているのに、あんな角帽なんておかしくってかぶれるかといって、角帽の代りにハンチングをかぶって行く。

私なんかは、もともと月謝も納めずに講義を盗む、もぐり大学生だったから、角帽はかぶれない。だから、かぶらんやつがたくさん出る方が、私としては好都合なんで、「そうだよ、あんなものかぶるのは田舎っぺだよ」と一生懸命扇動した。すると一高出の法科のやつでも、角帽をかぶらなくなってきた。そして私がハンチングで行くと、よその高等学校からきた連中は、あれは一高やなと思っている。思うのは向こうの勝手で、私はいちいち説明する必要はない。とにかく角帽をかぶったりしたわけじゃないから、もぐり大学生ではあったけれどにせ大学生ではない。これだけは天地神明に誓って、文部当局にも、政府当局にもはっきり申し上げられると思う。

しかし、いま思いますと、ただというくらいありがたいことはない。文科だけ行くのはもった

いないと思って、法科へも行き、上杉慎吉さん、美濃部達吉さん、末広厳太郎さんなどの講義も聞いた。しまいには医科の、それも婦人科のほうまで行くといった調子で、ありとあらゆる学問を吸収するのに、たいへん努力をいたしました。それで谷崎先生や芥川さんから、本郷で喧嘩して歩いて、本郷のパルチザンなんていわれているよりは結構なことだから、しっかり勉強せい、とほめられましたが、もぐり大学生をほめてくれたのは、その二人だけでした。

■「羅生門」も一枚一円

そういうわけで、大学のほうはどうやら無事に終えましたが、その頃、新進作家というのは、私をはじめ、川端康成、横光利一、片岡鉄兵など、みんなもう貧乏このうえない連中ばかりでした。また貧乏はわれわればかりじゃない。当時、有名な作家でも、原稿料は安かったし、社会的地位も非常に低かった。

そうしたなかで、明治時代の文士の気質を表わすもっとも典型的な話が一つあります。

「中央公論」が出てからだいぶたって、山本実彦君が「改造」という雑誌を出し、その創刊号に幸田露伴先生に原稿を頼んだ。ところがこの改造社が、先生に一枚五円という破天荒な原稿料を払ったんです。それで先生はびっくりなさって、こんなに過分にいただくはずがないんだから、半分くらいお返ししようといって、その原稿料をもってきたという美談が伝わっているんです。

今、一枚五円で原稿書いてくれといったら殺されます。だけれども、その当時は、改造社が幸田露伴に五円払ったというんで、私たちは、実に驚天動地の世の中がきたぞ、今にわれわれも五円になるかも知れないぞといって、たいへんびっくりしたもんです。

私の、はじめての作品が「新潮」に出た時は、川端康成以下悪友が十人くらい、いつ原稿料もらうんだといって、毎日毎日ついてまわる。しようがないからみんなつれて、牛込の新潮社までいって、原稿料をもらった。窓口でもらったのは私なんですが、誰が預かったか、今考えるとわからない。みんなで鳥食おうとか、肉食おうとか、なんかバタバタとなくなっちまったことだけは覚えているんです。

その原稿料が、一枚一円五十銭でした。私は、そんなもんだろうと思っていたところが、ある日、本郷の大学の通りを歩いていたら、芥川竜之介さんにばったり会った。しばらく振りだからお辞儀したところが、「おめでとう、今度新潮に小説が出たね。これでどんどん続けて書くんだな」とおっしゃる。私も「はい、これから一生懸命やるつもりでございます」というと、ステッキをつきながら、「きみの原稿料はいくらだった」「私、一円五十銭でございます」「はーん、原稿料も上がったね。ぼくが中央公論に『羅生門』を書いた時は一円だったよ。そうしてみると、きみの……」暗に不服なんです。

自分が最初に書いた「羅生門」が一円で、ぼくのつまらない小説が一円五十銭だなんて、そんなばかなことあるかというような顔をして、ほめているのか、けなしているのかわからない。私

文壇の雄 芥川龍之介氏
死を讃美して自殺す
昨曉催眠劑を呑んで
夫人親友等に遺書を認し

芥川竜之介の自殺を報ずる新聞（東京日日・昭2）

は詐欺でもしたような気がして、「ああ、そうですか。そうしてみると、世の中、だんだん物価高になるから、少し原稿料も上がったんでございましょう」と恐縮していたんですが、先ほど一生懸命激励してくれたのも、これですっかり帳消しになったような気がいたしました。

私は、その足で、谷崎潤一郎先生のところへ報告にまいりました。谷崎という親父は、叱ることだけは一人前だけれども、私の小説なんか読んでいないし、ちっとも世話も激励もしてくれないので、なにが弟子で、なにが師匠だかわからない。でもいちおう雑誌に出たんですから、うかがって報告はしたんですが、「そうかね」といったきり、見ようとも見てやろうともいわない。

それで、今、道で芥川さんに会って、こうこうの話だといったら、「お前のが一円五十銭。ふーん、莫大なもんだな」と、師匠はいうんです。谷崎先生

が中央公論に書いた「少年」というのは、編集局長の滝田樗陰が先生を拉致して、カンズメにして書かせた小説なんですが、それが五十銭だったそうです。

だから当時、島崎藤村だとか、徳田秋声だとか、いろいろ明治時代からの方がおいでになりましたが、原稿料というものは大したものじゃなかった。つまり私の一円五十銭から、幸田露伴先生の五円の中間くらいのところを、みな上がり下がりして書いていたわけです。

極貧生活のなかで

この原稿料でもわかるように、明治、大正、昭和を通じて、作家の生活というものは、経済的には、惨憺たるものでした。森鷗外先生なんかも、陸軍中将で軍医総監だったから、ああいう悠悠としたものが書けたけれども、ただの小説家が、あんな読むのに骨が折れるもの書いていたらやって行けません。ルンペンかなんかになっているよりしようがない。

たとえば、自然主義が勃興した時など泉鏡花先生などは、まったく食えなくなった。ああいうロマンチックな、絢爛無比な小説は売れないんです。それで、毎日おかゆばかり食べていたんです。つまり朝ご飯をたいて、それをのばすためにおかゆにして、昼と夜はおかゆというような調子でした。また、自然主義の波にのって活躍した田山花袋なんかにしても、ずいぶん貧乏がひどくって、質屋通いは年中だったそうです。その田山花袋が、ある一人の新進作家を認めた。それ

は、「根津権現裏」という一巻の小説を書いた藤沢清造という男で、私なんかも仲良くしていたんですが、これはたいへんなやつでした。

私は本郷のある下宿屋で、どうしても銭が払えなくなって、十二月三十日かに、そこを出たんです。それも、むこうが、銭払わないなら出ていけ、出ていけっていうから、私はむこうのいいなりに、素直に出たんです。そうしたら夜逃げだなんて訴えやがって、えらい迷惑したことがありましたが、どっちが迷惑したか、これはよくわかりません。

その時に、行くところがなくてころがり込んだのが、根津権現裏の藤沢清造の下宿です。「おい、おれを親父に紹介して。ひとつ部屋をさがしてもらってくれ」といったら、「いや、おれじゃだめだ」というんです。どうしてだ、と聞いたら、「おれは三年何カ月家賃を払わないから」という。「それは頼もしい家じゃないか。それでもおいてくれるようなうちだからこそ、おれはここを目がけてきたんだ」「二人ともためるようになったら困るよ」「まあつぶれやしないから、なんとかなるよ」といって、とうとう藤沢に紹介させて、そのうちに入ったんです。この藤沢という男ですが、ある時やつの部屋に行くと、お銚子と杯を机において、何かブツブツ、ブツブツいっているんです。何をしているんだときいたら、「おれ、いま一幕物を書いているんだ。居酒屋の場面で、酒飲みながらくだまくのに何分かかるか、時間を計っているんだ」というんです。それに、飲んでいるものといったらお茶なんです。オチャケ飲みながら、どこへ台詞を入れようかと、実に苦心惨憺している。

この藤沢は、遅筆で、なかなか原稿ができずじまいで、私とか、川端、横光、片岡などが、それぞれ新進作家とかなんとかといわれて、どうやらものを書きはじめた時でも、まだ下宿料が払えないでおりました。晩年はとうとう芝の増上寺の境内で、凍死だか、のたれ死だかしてしまったんですが、葬式もだれがしたのかわからないし、どこへ埋まっているのかもわからない。

それで私は、いつぞや文芸家協会の丹羽文雄君に会った時に、「藤沢清造みたいなやつもいるし、シンガポールの沖合で死んだ二葉亭四迷のように、異郷で死んだ人もいる。あるいは、もっともっと不遇で、われわれに忘れられて死んだ作家もたくさんいるんだから、どうだろう、文士の納骨堂でもこしらえたら」といったんです。これが文芸家協会の議題にのぼって、ついに富士山麓に、文士墓をこしらえることになりました。

それはともかく、この頃は、芥川竜之介が自殺する、藤沢清造がそういうふうになるで、実に、なんというか、明治から大正時代にかけて、作家というものが、いのちがけで文学と取り組んでいたということが、わかると思います。

■みみっちい現代作家

ところが、最近はどうでしょうか。経験の浅い、大学出のホヤホヤが、少し当たると、朝からゴルフ、夜はバーへ行くというような生活をしている。これでは、いい作品ができるわけがな

い。つまり、われわれが、陋巷で朽ち果てても悔いないぞという頑張りでやった時代とは、だいぶ覚悟がちがっているんです。できるだけ金を貯めようとか、少し金ができると、別荘でも建てようという。その別荘も、自慢になるような、大きな別荘ならともかく、つまらない別荘を軽井沢あたりにつくりたがる。

だから、お前らの別荘は、どのくらいあるんだ、何千坪じゃといってやると、そんなにごっついものじゃないという。それで私あたりは、「そんなみみっちいもんなら、やめろ。おれはな、別荘持たんでも、日本全国に寺を六つも持っている。中尊寺なんていうのは境内三十万坪で、これもおれのもんじゃ。夏は中尊寺に行きゃあ涼しいし、冬は河内のほうにおれば暖ったかいし、ちゃんとうまくいっているんだ。いまに九州に温泉つきの寺でも取るから見ておれ」なんていっているものですから、あれは泥棒みたいなやつだと、弟の日出海あたりは怒りよるんです。

だいたい、金を貯めるとか、家を建てるとか、別荘を持つというようなことは、財界の人がやることで、文士なんてものは、そんな子孫のために美田を残すような根性では、いい芸術は生れません。

福田蘭童の親父で、青木繁という絵描きがいますね。あの青木なんてものは、冬でも、下駄っぱきで、足袋もはかず、ゆかた三枚着ているだけで、その貧乏のひどさといったらなかったです。そのくせ、おれは貴族だといって、シルク・ハットをかぶり、美術学校の先生が学校まで歩いてくるのに、「ヘーエ、アラヨ」って、人力で通っていた。よく聞いてみたら、車宿の二階に

部屋を借りていて、親父に談判して、出世払いということで人力を使っていたわけです。

私は、芸術家というのは、精神においては大貴族、王侯でなければいけないと思います。どうしたら貯金が増えるだろう、買った土地が値上がりするだろうなんて、貧乏くさいこと考えていたり、月謝払って大学に入るようでは、たいした芸術は生れない。やはりもぐり込んでも入るという王侯貴族でなけりゃ。明治時代には、皇族は月謝など払いませんから。

結局、アメリカのように、国が豊かになって、作家が一年一作、あるいは十年一作で飯が食え、本当に生活が確立しないかぎり、日本の文学はだめだ。

よく「源氏物語」と比較して、今の作家は駄目だというが、これは当たり前なんです。上東門院、つまり関白藤原道長の娘のサロンで、紫式部のように生活や社会的な地位が保護されて、悠悠ともの書いている時代には「源氏物語」も生れるが、今のように、一カ月に短編十編書かなければ飯が食えないということじゃ、なかなかいい作品ができないし、いい作家も出てこない。

やはりそれには、日本の国を安定せしめ、国を富ましめ、いわゆる富国強兵の策をこうじなければだめだと思うんです。

私自身も、現在の日本の青年男女に、なにか希望をもたせる、ファイトをわかせるような小説を書かなければならんと思うんです。それには誰もが読んでくれるように、面白いとか、エロっぽいといった、食いつかせるエサをつけておかなければいけない。だから、今、私は、そんなおもしろい小説といったものを、一生懸命追求しているわけです。

今　東光（こん・とうこう）

明治三十一年生れ。中学を中退して谷崎潤一郎の弟子となり、大正十二年には第六次「新思潮」に参加し、「稚児」「僧兵」などを発表。一時、左翼運動に走ったが、その後、僧侶となる。そして昭和二十八年の「役僧」によって再び文壇に登場、三十一年「お吟さま」で第三十六回直木賞を受賞。主な作品に「八尾別当顕幸」「弱法師」「山椒魚」などがある。なお現在、河内の天台院、大阪府下水間寺の住職、平泉の中尊寺管長を兼ねている。

日本の大学三代

明治十九年、初代文相森有礼により東京帝大が整備確立されてから三代、日本の大学教育はどう発展してきたか

永井　道雄

■外国の二つの評価

私は〃日本の大学三代〃という題でお話いたします。この問題を考える場合、ここに非常に興味深いことがある。それは、大学を含めた〃日本の教育〃というものについて、国際的にまったくあい反する二つの評価があるということです。

最近、イギリスあるいはアメリカなどの日本研究学者が、日本の教育についての著書を出しています。おそらく来年ぐらいにその翻訳が出てくると思いますが、ロンドン大学のドァー教授が〃エデュケイション・イン・トクガワ・ジャパン〃という本を、またコロンビア大学のタフトン教授が〃ソサェテイ・アンド・エデュケイション・イン・ジャパン〃といった具合い。これらの

著書は、いずれも明治以後の日本の教育というものを、著しく高く評価しているわけです。

というのは、世界に百五十ぐらいの国々があって、そのなかで戦後独立したものは百ぐらいあるが、そういう国々は、なかなか近代化、工業化の方向に歩みにくい。ところが、西洋以外の国で経済成長においてきわめて成果をおさめたのが日本だった。そこで日本の教育の歴史についても、最近、熱心な研究が国際的に進められている。それは日本の教育の重要なポイントがわかると、それに基づいて、他の国々の今後の発展も考えられるのではないか、という角度から、問題を考える研究が進んでいるきているわけです。

ところが、一方、日本の教育というものは、国際的にほとんど完全に否認された経験を、われわれは二十年前にもっています。それは教育使節団報告書と呼ばれているものですが、敗戦後、スタカード教授以下、アメリカのきわめて重要な教育者、学者が占領期の日本にきて、教育使節団報告というものを書きました。それはけっして印象的な簡単な報告ではなく、日本の教育をかなり綿密に調査研究し、日本の識者とも会ってまとめられたものです。

これを見ますと、日本の教育は、お話にならないぐらい悪い。軍国主義的であり、国家主義的である。それだけならいいが、中央集権的官僚主義というものが跋扈(ばっこ)しておる。そして、そこにいろいろ潜在性をもった人間性があるのだけれども、それが生かされていない。日本人はそれを打開しようとしているが、その打開のしかたもよくわからないようだ。そこで、それについてことこまかに勧告しようというのが、教育使節団報告なのである——といっています。

さて、こういう二つの報告、研究がある。一方は日本の教育を高く評価し、他方は低く評価している。私は、これに対して、どういう考え方をもっているか、あらかじめ申し上げますと、そのよい評価、あるいは悪い評価、そのどちらにもきわめて重要な真実性が含まれていると思うのです。ただ問題は、そういうよい側面、あるいは悪い側面というものが、同時に、過去日本の百年の歴史にあったとすると、今日もまたそれが潜在していると見るほかはないわけです。そこで大学三代について語る場合にも、私は、そういう、いわば積極的側面、また危機をはらんだ側面が、どのようにからみあいながら、明治から今日までの約百年の歴史を歩んできたかについて、話を進めていきたいと思います。

■森有礼のケイ眼

さて、高い評価をうけている明治の日本の大学は、ロストウ教授の言葉によると、近代化以前の国が近代化にいよいよ船出するということは、予想以上にむずかしいことである、これを教授は〝テイク・オフ〟という言葉で表彰している。テイク・オフとは、飛行機用語ですが、たいていの国は、なかなかテイク・オフがうまくいかない。飛んだと思うと、飛行場の外でフォール・ダウンという事実が世界的にたくさん繰り返されている。それにひきかえ、明治の日本は、テイク・オフに見事に成功した。そういう事例として、あげられているわけです。

そこで、そういう日本人の大学の作り方、これについてお話をしようとしますと、詳細多岐にわたる事実を述べねばなりませんが、私は、そういう問題の一つの鍵として、ちょっと意外な事実から申し上げることにいたします。

明治十八年、第一次伊藤内閣の文部大臣に森有礼という人が就任しました。この人は、明治二年から六年まで、アメリカ合衆国に日本から派遣されて代理公使をつとめましたが、その時、なんと二十三歳の若さ。ところが、アメリカ在任四年間に〝ディビジョン・イン・ジャパン〟〝エデュケイション・イン・ジャパン〟という二つの英語の本を出版したほどの非常に有能なる人材でした。これを読むと、明治の人間が、なぜ世界の大勢に遅れないよう進みえたか。その歴史的由来の一つに〝長篠の戦い〟を挙げている。長篠の戦いというのは、織田と武田の戦いです。武田は戦国時代、騎馬隊をもって天下無敵。一方、織田は新興小勢。しかし、織田信長は、鉄砲は馬より早いことをみてとって、鉄砲を使って武田を倒し、天下を平定したわけです。

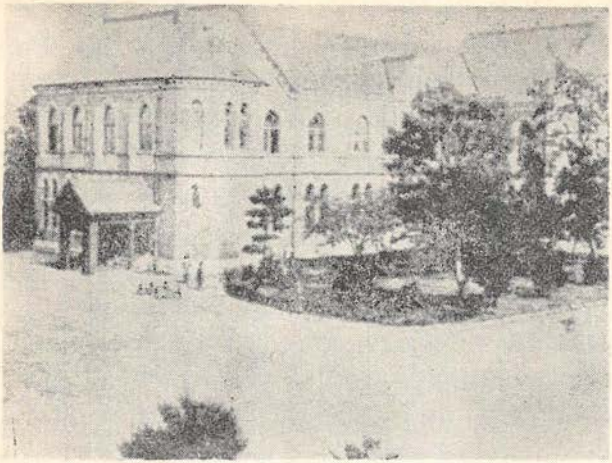
また徳川の時代の終り、日本が転換期にのぞもうとした時、攘夷の思想が強かった。一八六三、四年という、この二年間に、当時、西方雄藩の中心であった薩長土肥の四つの藩のうち、長州、薩摩がいずれも西洋と戦って、意外に簡単に敗れている。その原因は武器の違いにあった。こちらには鉄砲はあったが、向こうにはもっと立派な大砲があった。その時に武士は、長篠の戦いを思い出した。そこで攘夷は一夜にして開国ということになったわけで、日本の存続をはかるためには、もう攘夷などいってはおれない。外国の軍隊がこれほど強いその背景には、偉大なる

文明、産業の支えがあるにちがいない。これを一日も早く把握しなければいけない、という危機に満ちた精神があった。以上が、森有礼のしるしている、日本の教育のなかの、彼自身の明治維新についての見方であります。

さて、こういう考え方に立脚して、いわば危急存亡の時、まことに果敢な教育政策が展開されたわけです。森有礼はアメリカ公使をしているあいだに、外交官ではあるが、アメリカの教育あるいは西欧の教育にたいへん興味をもった。というのは、背後の国民がすぐれていなくては外交はできない。つまり教育なくして外交はできない。このような見地に立って、日本の教育のことを考えたのです。

彼はまた、日本語廃止論というものを唱えたことがあります。その主旨によると、どうも日本語は敬語などが複雑である。だから英語に切りかえてはどうか。しかし英語をよく勉強すると文法がわかりにくい。慣用語が複雑である。そこで、日本式英語という新しい英語を作ってはどうか。そうすると日本人に便利であるばかりでなく、将来、英語国民も助かるであろう——といっているのです。これは今日までの国語改革論のなかで、いちばん徹底したものです。

ところで、森有礼という人は、このようなことも原因の一つとなって、のちに四十三歳で暗殺されるに至りますが、それまでに外交官として第一級の道を歩んでいます。その彼が中途から伊藤博文とはかって、教育を自ら選んだ。これが実は、ロストウ教授のいう、日本の明治の第一期の教育の成功の一つの秘訣であったと考えるのです。つまり、日本の教育を考える場合、これを



帝国大学法・文化大学　明治17年竣工

国際関係の延長としてとらえる、あるいは外交の延長としてとらえる。そういう開放性の満ち満ちている時に非常な飛躍が起る。

当時の明治政府が留学生を外国に送り、外人教師を招くために費した教育予算は、実に驚くべきもので、全教育費の三〇%を越え、これが明治五年から十年にかけて続いている。現在、大学関係に使われる予算は、全教育費の二〇%以下、そのまたわずかを外国からの知識の吸収に使われているということを考えると、いかにこの時、わが国が外国からの知識の吸収に果敢であったかということを知るわけです。

■産業革命と教育の関係

さて、明治の大学が作られたのは、明治十

九年に整備確立された東京帝国大学をもって、その第一期とするわけです。この東京帝国大学を整備確立した人は、いまお話した森有礼、明治十八年にできた第一次伊藤内閣の文部大臣です。

この文相は非常におもしろい文相であった。就任後、まもなく小学校令、師範学校令、帝国大学令というものを自らの手によって起草し、東京帝国大学ができると、そのなかに五つの学部を設けた。法学部、文学部、理学部――ところがあとの二つがきわめて大事です。つまり農学部と工学部の新設です。しかし当時の世界情勢においては、農学とか工学というのは下等なる学問である、大学で学ぶに値いしない世俗的応用学にとどまり、したがって、さようなものは専門学校でよろしい、という考え方が支配的であった。が、ひとり当時新興の文明国であったところのアメリカ合衆国のみが、農学、工学というものを総合大学に含めることによって産業革命の先端をきる、このような政策を一八六二年に示していたのです。森有礼は炯眼よく、アメリカの将来、歴史の将来というものを見ぬいて、東京帝国大学の創立の時期に、世界に先んじて工学部、農学部を設けるという総合大学の出発に踏み切ったのです。

むろん、このような大学のなかにも、今日の眼からみれば、幾多批判すべき点はあるが、進取の気象は見逃せない事実です。とはいえ、これはいわば上からの指導、世界の情勢に通暁した人間が、人々に先んじて大学を作る、こういった状態であった。しかし、これだけでは足りない、できるなら民衆のなかからの力を結集することによって、こうした大学がもっている一つの短所を補おうと考えた人たちが、明治十年代、きそって私立学校の整備に力を注ぎました。

たとえば、早稲田の大隈、慶応の福沢、あるいは同志社の新島、いずれもすぐれた先覚者で、世界の教育史上どこに出しても、おそらく充分比肩し得る思想の持主であったといえましょう。

■私学精神の衰退

さて、大学三代ということになりますと、私はその次の時期についても語らねばなりません。第二の時期——わかりやすく、この時期を区切ると、大正七年です。この年、大学令というのができました。なぜ大学令ができたか。その背後の理由はきわめて単純です。つまり産業革命に日本は遅れていた、さらにまた民主主義の社会形態において遅れている、できるならば追いつき追い越さん。このような目標が、ある程度実って、明治の終りに産業革命が完成、わが国に重要な企業がたくさんでき上がった。

またこの時期には官庁機構の拡大というものが起っています。たとえば後藤新平のごときは、それまでの私鉄というものを統合することによって、鉄道院を省内に設ける。あるいは逓信省の役人の抬頭、このようなものがあらわれるにおよんで、官庁あるいは大企業に産業革命以後、いわば専門家として活動する人間を、いかに育成するか、ここから大学令の問題が生じてきたわけです。今われわれが使っている〝サラリーマン〟という言葉は、当時の文化的状況のなかに生れました。ですから明治はお嫁にやるなら大学卒に——だったのが、もう大正になりますと、大学

卒の失業者という可能性も含まれる。あるいは大学を出ても腰弁か、といった自嘲が大学生のなかに起ってくる。しかし、その背後にありますのは産業革命の完成という事態であったわけです。

そこで政府としては、その時に国立大学の拡張をはかって、東京、京都、東北のほかにも帝国大学を作り、そればかりでなく、できる限り単科の医科大学、あるいは商科大学、工科大学というものを作った。そうすることによって大量の専門家を養成、そうしてまたサラリーマン予備軍というものを作ることによって、日本の社会の発展をはかる、こういう考え方がある程度あったのです。しかし、それがある程度にとどまったところに、実は、大正期の日本というものが、その後のテイク・オフでなく、フォール・ダウンを準備する側面があったのではないかと、私は考えるのです。

というのは、その時期、大学令ができると、はじめて日本の私立学校——先ほどの名誉ある伝統をもって生れた私立学校が、大学に昇格いたします。ところが、大学に昇格することをめぐって、いろいろな混乱が生れた。早稲田騒動もその一つだが、そのいきさつについてもっとも細かく記しているのは、亡くなった作家の尾崎士郎です。尾崎士郎はその著書「早稲田大学」のなかで、「早稲田は大正六年にして滅びた」こう書いています。大学に昇格し、校舎は建った。カリキュラムは立派になった。先生もそろった。しかしながら早稲田における、かつての下から日本を作りあげていこうというスピリットは失われた、と見たのです。

さて、この第二期を特色づけると、政府に十全の計画がなかったということを、われわれは認

めねばならないでしょう。他方において、私学は自由を主張はしたが、その自由というものは、おおむね健全なる経営をなんとか維持していこうとする程度の自由にとどまって、かつて私学がもっていた特色ある教育、ないしは研究というものはなくなって、産業革命の後の日本のなかで拡大していこうというのではなかった。

さて、そうなると大学生はなにをするか。マージャンがはやる。モボ、モガといったものがはやる。学校は休講。学校に希望をもって入った学生は、先生が意外にふまじめであることを発見する。この日本を打開するにはどうしたらよいか。大人はもはや頼りにならん。革命のほかはないのではないか。そこで大正中期以後、左翼学生運動が盛んになるわけです。その人たちの文章をみますと、大学、あるいは学校教育に対する失望から発していることを知るわけです。

こうなると、政府はどう対処するか。社会を転覆されては困る。モボ、モガのマージャンも困る。そうなれば画一的に上から押さえ、しかるべき線で日本をしめていくほかはない。これが大正期の後にあらわれた、昭和初期から戦争にかけての国家主義的、そして軍国主義的、アメリカ教育使節団が指摘したところの、官僚主義的教育が跋扈(ばっこ)した日本の姿であったわけです。

■虚空を斬る勇気を

ところで、日本の大学を第三期改革をしたものは、遺憾ながら日本人ではなく、外国人であり

ます。教育使節団の報告がそれです。われわれは外国の刺激によって、第一期、みごとなテイク・オフを行なった。そして、しばらく安住の時をすごして堕落の経験を味わい、第三期、われわれが立ちなおろうとするのに、その方法は自力にあらず他力であった。このことが、占領期の日本の第二のテイク・オフを特色づけているわけです。

ところが、現在の大学を見渡して、私はきわめて批判的なる人間の一人ですが、今、わが国に大学が七百五十あります。その数において世界有数の国であり、学生は百万を越しています。

しかしながら、国立大学が活発なる活動を行なっているか、現在の文明の心臓ともいうべき大学院制度の確立さえ整備されていない。そのなかで国立大学の教授は自治をいいますが、その自治はおおむね政府の計画に対する拒否を意味します。建設的自治が語られることは少ないのです。

一方、政府も計画を示すが、大学のそれぞれの自由を生かす意味の計画を示すことは少ない。したがって自由において、また計画において、混乱のなかで大学はいずれの方向にいくか、その問題がわからないという点では、第三期の日本の大学は、遺憾ながら第二期に継ぐものである、第一期の精神を継いでいるのではないのです。

このような状況のなかで、打開の道はあるか。私は、森有礼という人のある一面を語ることによって、話を終りたいと思うのですが、先ほど述べた森有礼という人は、日本の教育について、終生悩み続けたのであります。彼は西洋と同じものを日本に作ることはできた。しかし、それでは日本の土壌にあわない。そこで日本の土壌を尊重はするが、それを生かしすぎると閉鎖的にな

る。この二つの接合というものをいかにやるか、そのことが終生、彼の悩みであった。そして晩年、暗殺によって倒れたわけです。

しかし森有礼の晩年の書をひもとくと、そこに日本のわれわれが直面している、きわめて重要な秘訣があることを知るのであります。森は夜、寝られないことがしばしばあった。そこで枕元に一刀をおいて、夜、突然起きると、彼はその刀を取り上げ、鞘をはらって闇に虚空を切る。そうして再び鞘に刀をおさめて寝についたということです。これは、つねに緊張度の高い、いわば、どちらにずり落ちるかわからない分水嶺を歩き続けた、すぐれた日本のリーダーの一人であったことを物語るものであります。

私は、このような意味において、明治のみごとな離陸が、はたしてこの百年の記念の年に再現されるかどうか。もし再現されるとするなら、それは今日の日本人の闇に虚空を切るという、勇気、創造性によって起きるほかはないと思うのです。

永井　道雄（ながい・みちお）

東京工大教授。大正十二年三月生れ。昭和十九年京大文学部哲学科卒業、ただちに同大学人文科学研究所助手となり、二十四年より米国オハイオ州立大に留学、二十九年京大教育学部助教授に就任、三十三年東京工大助教授を経て、三十八年教授に推される。四十年「日本の大学」の著書で毎日出版文化賞を受ける。

明治「二百年」への期待

今から百年後、日本はどう変貌するか。
九十翁がうらなう未来の日本の姿は？

松永安左エ門

深刻になる労働力不足

私は、九十余の老令で、最近では、目も悪く、耳も遠く、歯は全部なくなって、それこそおハナシにならんような次第です。それでも、おまえは明治以来働いた人間としては珍らしい残り者であるから、これまでの百年の話をするにはおよばんが、今後日本はどういうふうになって行くのか、また、どうすればいいのかということについて、何でもおまえの思った通りの話をすればいいというお話がありまして、もの好きにも引き受けたわけです。

今後百年というと、もはや二十一世紀に入っているわけですが、その間にいちばん変化するものは何かといいますと、第一に考えられるものは、人間の働き、労働の生産性だろうと思いま

す。それから第二には、技術革新が今よりもさらに進んで、新しいものが生れ、そしてそれがいろんな関連作用をし、あるいは連鎖反応を起して、始終、国民の生産力や文化、世界の構成の上にも、大きな影響をもたらすということ。あとは、それらを総合することについての考え方だと思います。

近年の傾向を見ますと、医学や医療設備の進歩によって、病気にかかってもたいていは治る。たとえば肺結核など、かつては相当の死亡者を出していたが、まずそれはなくなった。コレラ、赤痢もだんだん克服されて、この頃では、むしろ自動車その他による交通事故の死亡者の方が多くなっている。これまでは非常に高かったガンの死亡率なども、こういう環境の整備、治療技術の進歩によって、あるいは五十年もたたないうちに、非常に減るんじゃないかと思われます。

そうなると、老人層というものがますます厚くなり、一方では、働き手である中年層とか、十七、八歳から二十三、四歳にかけての人たちが、そのわりに増えない。つまりその比率が、だんだん逆ザヤの傾向を示してくる。この結果、労働生産性というものに対して、どういう影響をおよぼすか。

私は、労働力のアンバランス、あるいは不足を解決するために、今よりもっと、機械力による省力的な方法が盛んに取り入れられると思いますが、この生産の調整をどうするかという課題は、次に申します技術の革新と大きなつながりを持っているものでありますから、今後は大いに研究を推し進めて行かなければならないと考えます。

■原子力で産業革命

技術革新については、私自身も研究所を持ち、今もっぱら、それに携っておりますが、やはり大きな問題は、エネルギー革命というものがどういうふうに動いて行くかということでしょう。

その一つの例は、原子力の平和利用、いわゆる原子力発電です。今これの開発は、アメリカにおいてもっとも盛んに行なわれ、GEとか、ウエスチングハウスとかの大きな会社は、世界に先がけて軽水炉の実用化に成功し、さらに高速増殖炉の研究開発を行なっております。この原子力は、石炭にとってかわった石油をさらに上回る大きなエネルギー源として、活用されて行くと思われます。

そこでわれわれの研究所としても、今、永久燃料、つまり高速増殖炉の研究を行ない、アメリカのAPDA（民間の高速増殖炉開発機関）関係と協約を結んだり、日本のメーカー、電力会社、役所、学界の人などをアメリカに送って、すでに一年以上を経過しております。

これらの報告によりますと、あと十年、あるいは十五年もすれば、事業として大きく動き出すのみならず、この炉の開発も、むろん国産でできるようになる。今よく国産とか何とかいいますが、その段階には、日本も、国産という名前はもはやつけられん時代になって、高速増殖炉では、おそらくアメリカと並ぶ大きな製造国になり、輸出国になると思います。その場合、発電コスト

はどのくらいになるかというと、現在の軽水炉でも、百万キロワットのもので、一キロワットアワー当り一円三十銭とも、一円六十銭ともいわれておりますが、ともかくこういうものができるようになると、さらにさがって日本の産業全体に、革命的な変化をもたらすだろうと思われます。そして、これが他の生産に影響をおよぼし、全産業の発展を促すことになりますが、やはり日本の経営者、従業員、あるいは協力団体なども、あい待ち、あい助ける働きがなければならないと思います。

またこのエネルギー革命とは別に、技術革新に関して、もう一つ考えなければならない大きな問題は、電子計算機などに応用されているエレクトロニクスの進歩、発展です。

先進国であるアメリカやヨーロッパの趨勢を見ても、あらゆる工業において、その規模がだんだんマンモス化している。たとえば、アンモニアなどの肥料工場にしても、もう二百トン程度のものでは、とうてい問題にされない。どうしても、八百トン、千トンでなければならないという状態で、やはり日本でも、もう少し規模の大型化を考えて行く必要がある。

そうなると、どうしてもマンモス化した工場は、電子計算機によって自動的に調整して行くことになるが、これは工場内部だけでなく、さらに工場と工場を、パイプや電気で横につなぎ、縦につないで、大規模機能をさらに高める働きをするようになる。これからの技術の行く道は、一つには、こうしたエレクトロニクスの開発にあると、私は思っております。

■戦争は起こり得る

こうした人間の労働生産力の振興とか技術革新で、今後百年の日本の発展については、おおよその目安はつくのですが、これはあくまで、平和状態を見越しての話で、この間に、ひとたび核による世界的な戦争でも起ったと仮定すると、こんなことは痴人の夢になってしまう。

現に世界の情勢を見ると、原子爆弾、水素爆弾、それを運ぶミサイル、あるいはそれを迎撃するミサイルなどが、先を争って開発され、世間の常識に従うと、もしそういう戦争が始まれば、地上には放射能のチリが充満して、人類の全部ではないにしても、大半は絶滅するだろうともいわれている。

これに対して、一方には、最近では放射能の少ないもの、いわゆるきれいな核爆弾というものが実験的にも作れるようになっているので、まずそういう危険は少なくなるという、技術上の進歩からみた見方がある。それにもう一つは、だんだん人間がコスモポリタンになり国際的になって、戦争というものを避ける気分が強くなるから、大きな戦争は少なくなるという見方もある。

私は、それがあるかないかを論ずるつもりはありませんが、やはり国と国とがちょうど日本とアメリカがやっているように、あるいはアメリカがＮＡＴＯやＳＥＡＴＯでやっているように、安全保障をし合ったり、同盟を結んだりするようなことは、今後もあるでしょう。そしていろん

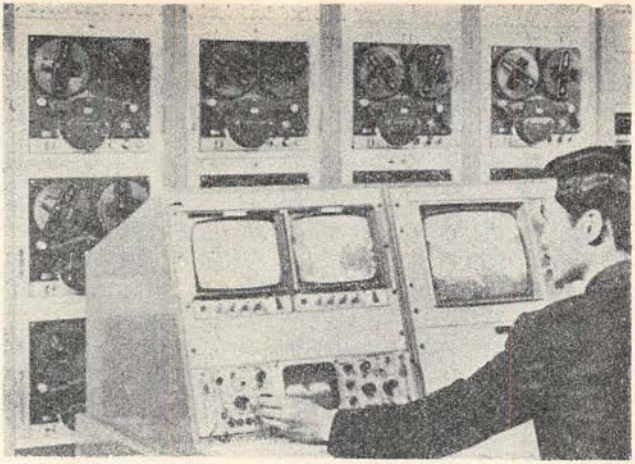
な利害が、ここ五十年や百年では解けないという要素がある以上は、国と国、グループとグループの戦争がないとはいえない。むしろあるというふうに断定してもいいんじゃないか。

その原因を、もう一つ突っ込んで考えてみると、いわゆる南北問題につき当たる。第二次大戦後、ナショナリズムの勃興などで、独立国家というものがむやみにたくさんでき、戦後国連に加入したものだけでも数十にのぼっているという状況。しかもこれらの国の間には、文化、経済、社会組織など、あらゆる面で格差がある。この格差は、今後だんだんに縮まって行かなければならないというのが、人類の希望です。

けれども現実の問題としては、アメリカとかヨーロッパ、ソビエトなどの国力、経済力はますます増大するのに対して、なかには追いついて行ける国もあるでしょうが、ほとんどの国はなかなか追いつけないという事情がある。こういうことも、やはり平和というものを考える場合に、一つの問題になるだろうと思うのです。

私は、刊行会を設けてトインビーの歴史の研究をやっておりますが、やはりあの人の議論の中心になっているのは、人間の歴史はつねに闘いの歴史だということです。

文明社会が生れたのは、まず第一に、自然の挑戦に対して人類が闘った結果だし、その次には力と力の闘いも行なわれた。たとえばローマ帝国というものは、力によって組織されたが、その力自体は一つの崩壊力を内蔵していた。つまり、外部のプロレタリアであるヨーロッパの蛮族がだんだんローマ帝国に侵入して、ついに西ゴート軍がこれを破壊した。それに内部のプロレタリ



今やコンピューター時代　はたして百年後は？

アである、いわゆる政権を持たなかった連中も、政治の腐敗に対して立ち上がる。このローマ史を読んでもその一端がわかるように、人類の歴史は、その意味において、挑戦に対する応戦、すなわち闘いであって、世にいう安易な平和論では解決しないし、無条件の平和というものは、もともとあり得ないというわけです。

たとえば、アメリカ人とベトナム人の対決を考えてみても、そんなばかなことはやめて、話をつけたらいいじゃないかといって、誰でも簡単に青写真を作ることはできるが、現実の紛争はなかなか解決できない。それというのも、人類に課せられた使命が、一方では挑戦であると同時に、他方では応戦であるからで、こういう複雑な争いというものは、一世紀はおろか、十世紀、二十世紀を重ねても、

やむものではない。またやまないということが、世の中の一つの進歩の原因である、ともいっているわけです。

■設計者より実行者たれ

これまで私は、将来の姿というものについて、あれこれ申しましたが、ここで考えなければならないのは、われわれは単にそういう夢を描いて、そうなるだろうとか、そうかも知れないという推論を下すだけでなく、むしろ、われわれはそうすべきだということです。つまり、設計者たるより実行者たれ。夢を描くのではなくて、夢を実現するのがわれわれの任務であって、ただ天下の形勢はこうで、平和がこうと予想することはナンセンスです。要するに百戦不敗の形をとって、こういうふうに進むのだという気力こそ、われわれ日本民族に課せられた大きな課題だと思うのです。

世の中の進歩発展には、いろいろな方法があると思いますが、今、私がお話しましたように、まず科学の促進をはかり、それから社会改革に向って、着々手を打たなければならない。

また日本だけを考えましても、港湾の改築とか将来のための飛行場の建設など、今、政府で考えている以上に、もっと積極的に推進しなければならない。そのほかニューギニアなどの未開地の開発、タイのクラ地峡の開発など、日本人としても、もっと本気になって取り組むべきだし、

海運の振興についても、もっと根本的に考えて行く必要がある。

そして、こういう、いろいろのことを、逐次実行に移すことこそ、百年後の日本を偉大ならしめるゆえんではないかと、私は思います。

松永安左エ門（まつなが・やすざえもん）

明治八年十二月長崎県に生れ、同二十九年慶応義塾を卒業。同四十四年九州電灯鉄道をおこし、昭和三年東邦電力社長に就任。十七年実業界より引退したが、二十四年電気事業再編成審議会委員長に選ばれ、二十八年電力中央研究所理事長に就任。三十二年電力再編成顧問会委員、三十三年超高圧電力研究所理事長を兼ねる。三十九年に勲一等を受く。

あとがき

キワニスクラブといっても、おなじみの方が少いと存じますが、「キワニス」とは、もとアメリカインデアンの言葉で、「自己顕示」という意味。自己の専門職能を通じ、良き地域社会の建設に奉仕する、というのが、このクラブの目的です。

ロータリー、ライオンズとならぶ世界三大社会奉仕団体の一つで、日本では四年前に、はじめて設置されました。若さとバイタリティー、小粒ながらパンチの強さを秘かに誇っております。

故ケネディ大統領はかつて熱心なキワニアン。日本では、官界、財界、言論界、学界などの各界で、現に第一線で活躍している少壮気鋭の人物が会員になっており、現在、東京クラブは二〇〇名です。

当クラブでは、社会奉仕活動の一環として、一昨年（昭和四十一年）四月から昨夏まで、各界の権威を講師に依頼して「明治百年記念講演」を三十回にわたり実施し、「日本人はいかに生きるべきか」を探究してまいりましたが、今回、講師各位のご了解と、大和書房のご協力を得て、この講演内容を刊行し、広く国民各位に読んでいただき、記念講演の意図をともに探究していただ

こうと念願した次第です。

なお、講演の主題および講師の詮衡には、当クラブの次の会員諸氏があたりました。ここに、その労を感謝します。

中央公論・笹原金次郎氏、文芸春秋・田川博一氏、財界研究所・山口比呂志氏、東急エージェンシー・鳥居達也氏、クラブ事務局・牧田喜義氏

社団法人　東京キワニスクラブ会長　篠島秀雄

秘話　日本の百年
はじめて明らかにされる三代の内幕　ペンギン・ブックス 44

1968年3月10日　初版発行　　¥340

編　者　東京キワニスクラブ
発行者　大　和　岩　雄

編者との申合わせにより検印廃止

発行所　大　和　書　房
東京都文京区関口1～33～4
TEL (203)4511～4　振替・東京64227

印刷・日放印刷　製本・誠幸堂　落丁本，乱丁本はお取替えします
©1968

日本の名詩
鑑賞のためのアンソロジー

明治から現代まで、最も愛され唱われ続ける日本の代表詩二八二編をテーマごとに精選、各詩に鑑賞ノートを付して、はじめて成った画期的アンソロジー。人生・愛・死をめぐる秀詩、自然への讃歌、平和への叫びなど網羅

小海永二編
定価四二〇円

望郷の詩

誰もが持つ故郷……人はそれを甘く懐しく、あるいは苦く淋しく思うだろう。本書は、日本の詩人がさまざまな感懐をもってうたいあげた望郷詩四十編を集め、その土地の写真と詩人の生きた道を語る解説を添えた「心の詩」

松永伍一
定価三五〇円

底辺の美学
民衆の創造的エネルギーとその矛盾

詩人の心をとうし、新しい独自の民俗学的観点と実証の手法を混えて、抑圧され、ついに陽の目を見ることなく終っていく底辺の情念を探り、民衆の創造的エネルギーとその矛盾をついて赤裸な日本人の発見を試みた野心作

松永伍一
定価四四〇円

坂本龍馬

明治維新の生んだ奇傑、龍馬……その波瀾に満ちた生涯を語り、特に龍馬の理想と、神出鬼没の活動を追いながら、明治維新に対する独創的な接近を試み、さらに、龍馬の周囲に登場する維新の群像をあますところなく描く

池田諭
定価三九〇円

高杉晋作と久坂玄瑞
変革期の青年像

長州に生れ、松陰の教えを受けた二人の青年、高杉晋作と久坂玄瑞。同じように日本の近代的統一化に力を尽しながら、二つの異なった路線を行った彼等の思想と行動を現代的視点で追い、変革期の青年像を浮き彫りにする

池田諭
定価四二〇円

魯迅伝

中国の苦悩を一身に背負って近代化への道を探りつづけた魯迅――その特異な人と精神を作家の筆で余すところなく描いて、日本における魯迅紹介の先駆をなした記念的な名著。巻末に特に亀井勝一郎「感想」を付して贈る

小田嶽夫
定価四〇〇円

DAIWASHOBO
¥ 340